新潟県埋蔵文化財調査報告書 第78集

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

堂付遺跡
百塚東E遺跡
百塚西C遺跡
割目B遺跡

1996

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

堂付遺跡
百塚東E遺跡
百塚西C遺跡
割目B遺跡

1996

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

小千谷バイパスは、国道17号線が通過する小千谷市街地の交通渋滞・交通騒音を解消するために計画された延長7.4キロメートルのバイパスです。開通すると北側が長岡東バイパス、南側が現国道17号線に連結し、それぞれの地域の生活環境の保全を図るとともに経済活動等に多大な効果をもたらすものと期待されています。

小千谷バイパスについては、新潟県教育委員会が昭和54年にルート選定に伴う分布調査、平成4年に道路法線にかかる遺跡の分布調査・一次調査を経て、平成5年から発掘調査に着手し、平成8年には二期線の部分を除いて全線の発掘調査が終了する予定になっております。

本書は、この道路の建設に先立って発掘調査をした「堂付遺跡」・「百塚東E遺跡」・「百塚西C遺跡」・「割目B遺跡」の発掘調査報告書で、各遺跡とも遺構・遺物はわずかしか発見されませんでした。出土品は量的には少ないものの縄文時代のものが主で、多時期にわたる土器が出土しています。

小千谷市内には数多くの縄文時代の遺跡があります。発掘調査によって、遺構・遺物が多量に出土し、明らかに大規模な集落跡とわかるものと遺構と遺物がごくわずかしか発見されない小規模な遺跡があります。今回調査した遺跡は後者に属し、前者の遺跡と有機的関係を持っていたものと推定され、当時の人々の行動の結果とも考えられます。今後時期別に地域の遺跡を分析することによって、その行動範囲などが一層明確になるものと考えられます。

今回の調査結果が、今後の本県における縄文時代のみならず、全国的な縄文時代研究の一資料として広く活用され、その一助となれば幸いです。

最後に、本調査に対して多大なご協力とご援助を賜った地元の方々、ならびに小千谷市教育委員会をはじめ、建設省北陸地方建設局・同長岡国道工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

新潟県教育委員会
教育長 平野清明

例　言

1　本報告書は新潟県小千谷市大字高梨に所在する堂付遺跡と同市大字千谷に所在する百塚東E遺跡、同市大字三仏生に所在する百塚西C遺跡、割目B遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は一般国道17号線小千谷バイパス法線と同バイパス取り付け道路工事に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。

2　発掘調査は平成6年および平成7年に新潟県教育委員会（以下、「県教委」と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」と略す）に調査を委託したものである。

3　堂付遺跡の発掘調査は平成6年7月12日から12月2日まで実施し、百塚東E遺跡の発掘調査は平成6年7月6日から8月24日まで実施した。両遺跡の整理および報告書作成にかかる作業は平成6年度および7年度に行った。百塚西C遺跡の発掘調査は平成7年4月17日から8月22日まで実施し、割目B遺跡の発掘調査は平成7年5月26日から6月30日まで実施した。両遺跡の整理および報告書作成にかかる作業は平成7年度に行った。

4　出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の注記は以下のように略記号を用い、出土地点・層位等を併記した。

D O	堂付遺跡	百東E	百塚東E遺跡
百西C	百塚西C遺跡	ワリB	割目B遺跡

5　本書の作成は埋文事業団調査課第二係職員が当たり、寺崎裕助（同第二係長）の指導のもと遠藤孝司（同主任調査員）・江口友子（同文化財調査員）・内山　徹（同文化財調査員）・井狩　歩（同文化財調査員）・池田淳子（同嘱託員）が担当した。報告書の執筆は遠藤・江口・内山・井狩・池田が当たった。

執筆分担は第Ⅱ章2・3、第Ⅲ章2、第Ⅳ章（6Cを除く）が遠藤、第Ⅰ章、第Ⅲ章1、第Ⅴ章、第Ⅵ章（6A第Ⅱ群～第Ⅳ群、6B、6Cを除く）が江口、第Ⅱ章1、第Ⅳ章6Cが内山、第Ⅶ章が井狩、第Ⅵ章6A第Ⅱ群～第Ⅳ群、6B、6Cが池田、第Ⅷ章が遠藤・江口である。編集作業は江口・遠藤・井狩が担当した。

6　本書は本文と図版からなる。図面図版・写真図版は巻末にまとめた。

7　遺構の記号・石器の使用痕については、図版の凡例に付した。

8　各遺跡の遺構番号は調査現場で付したものをそのまま使用し、すべて通し番号とした。遺物番号も土器・石器ごとに通し番号とし、図面図版と写真図版の番号は同じである。

9　引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を［　］で文中に示し、巻末に一括して掲載した。

10　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

荒川勝利　遠藤　佐　小熊博史　小千谷市教育委員会　神林昭一　北村　亮　小林達雄　駒形敏朗　清水敏雄　立木宏明　中島栄一　山崎忠一　山本　肇　渡辺裕之　渡辺秀男

目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1. 調査に至る経緯 …… 1

2. 調査体制と整理作業 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1. 位置と地理的環境 …… 4

2. 周辺の遺跡 …… 6

3. 小千谷の考古学的調査 …… 8

第Ⅲ章　調査の概要 …… 9

1. 第一次調査の概要 …… 9

A. 調査の方法 …… 9

B. 調査の結果 …… 9

2. 大グリッドの設定 …… 13

第Ⅳ章　堂付遺跡 …… 14

1. 調査の方法 …… 14

2. 調査の経過 …… 14

3. 中・小グリッドの設定 …… 16

4. 基本層序 …… 17

5. 遺　　構 …… 18

A. 概　要 …… 18

B. 各　説 …… 18

6. 遺　　物 …… 22

A. 縄文土器 …… 22

B. 土製品 …… 28

C. 石　器 …… 28

D. 奈良・平安時代の土器 …… 32

7. 小　結 …… 33
第Ⅴ章　百塚東E遺跡 …… 34
1. 調査の方法 …… 34
2. 調査の経過 …… 34
3. 中・小グリッドの設定 …… 35
4. 基本層序 …… 35
5. 遺　物 …… 37
A. 縄文土器 …… 37
B. 土製品 …… 40
C. 石　器 …… 40
D. 奈良・平安時代の土器 …… 42
E. その他 …… 42
6. 小　結 …… 43
第Ⅵ章　百塚西C遺跡 …… 44
1. 調査の方法 …… 44
2. 調査の経過 …… 44
3. 中・小グリッドの設定 …… 45
4. 基本層序 …… 45
5. 遺　構 …… 46
6. 遺　物 …… 46
A. 縄文土器 …… 46
B. 石　器 …… 48
C. 平成5年度第一次調査出土遺物について …… 49
7. 小　結 …… 50
第Ⅶ章　割目B遺跡 …… 51
1. 調査の方法 …… 51
2. 調査の経過 …… 51
3. 基本層序 …… 52

4. 遺　構 …… 52
5. 遺　物 …… 53
6. 小　結 …… 53
第Ⅶ章　ま と め …… 54
《要　約》 …… 56
《引用・参考文献》 …… 57
《遺物観察表》 …… 60

挿 図 目 次

第 1 図　小千谷市周辺の河岸段丘分布図 …… 5
第 2 図　位置と周辺の遺跡 …… 7
第 3 図　小千谷バイパス法線と遺跡位置図 …… 10
第 4 図　堂付遺跡第一次調査トレンチ設定図 …… 11
第 5 図　百塚東Ｅ遺跡第一次調査トレンチ設定図 …… 11
第 6 図　百塚西Ｃ遺跡第一次調査トレンチ設定図 …… 12
第 7 図　割目Ｂ遺跡第一次調査トレンチ設定図 …… 12
第 8 図　小千谷バイパス関係遺跡大グリッド設定図 …… 13
第 9 図　堂付遺跡第一次調査地区基本層序 …… 14
第10図　堂付遺跡第一次調査地区調査状況 …… 14
第11図　堂付遺跡中・小グリッド設定図 …… 15
第12図　堂付遺跡基本層序 …… 17
第13図　堂付遺跡石器器種別出土分布図 …… 29
第14図　堂付遺跡打製石斧分類別長幅分布図 …… 30
第15図　堂付遺跡打製石斧分類別出土分布図 …… 30
第16図　堂付遺跡打製石斧石材別出土数 …… 31
第17図　堂付遺跡石錘長幅分布図 …… 32
第18図　百塚東Ｅ遺跡グリッド設定図及び基本層序 …… 36
第19図　百塚西Ｃ遺跡第一次調査出土石器 …… 49
第20図　割目Ｂ遺跡調査範囲図 …… 51
第21図　割目Ｂ遺跡基本層序 …… 52
第22図　県内の縄文時代草創期の遺跡分布図 …… 55

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧 …… 6
第2表　堂付遺跡発掘調査工程表 …… 16
第3表　堂付遺跡主要遺構一覧表 …… 21
第4表　堂付遺跡石器器種別一覧表 …… 28
第5表　堂付遺跡打製石斧分類別出土点数 …… 29
第6表　百塚東E遺跡剥片類石材別組成表 …… 42

図版目次

図面図版

図版1　周辺の旧地形図

堂付遺跡

図版2　遺構全体図
図版3　東地区遺構配置図（II グリッド周辺）
図版4　遺物分布図1（土器集中区1）
図版5　遺物分布図2（土器集中区2・3・4）
図版6　遺物分布図3（土器集中区5・6）
図版7　遺構個別実測図1（SK1・SK2・SK3・SK6・SK7・SK8・SK9）
図版8　遺構個別実測図2（集石土坑・配石遺構・SX5・焼土1・焼土3・焼土4）
図版9　遺構個別実測図3（P7・P11・P14・P26・P40・P43・P50・P54・P55・P57～P59）
図版10　土器実測図1（縄文土器）
図版11　土器実測図2（縄文土器）
図版12　土器実測図3（縄文土器）
図版13　土器実測図4（縄文土器）
図版14　土器実測図5（縄文土器・土製品・須恵器）
図版15　石器実測図1（石鏃・ピエスエスキーユ・打製石斧）
図版16　石器実測図2（打製石斧）
図版17　石器実測図3（打製石斧）
図版18　石器実測図4（打製石斧）
図版19　石器実測図5（打製石斧・磨製石斧・両面加工石器）
図版20　石器実測図6（不定形石器・石錘）
図版21　石器実測図7（石錘・剝片・磨石・凹石・石皿）

百塚東E遺跡

図版22　遺構全体図および土器出土分布図・土器実測図1（縄文土器）
図版23　土器実測図2（縄文土器）
図版24　土器実測図3（縄文土器・土製品）
図版25　土器実測図4（須恵器・フイゴの羽口）
図版26　石器実測図1（石鏃・尖頭器・円形掻器・打製石斧・磨製石斧・両面加工石器・不定形石器）
図版27　石器実測図2（磨石・石錘）

百塚西C遺跡

図版28　遺構全体図および基本層序
図版29　D区遺構全体図
図版30　C区遺構全体図
図版31　B区遺物分布図
図版32　土器実測図1（縄文土器）
図版33　土器実測図2・石器実測図

割目B遺跡

図版34　遺構分布図
図版35　遺構個別実測図

写真図版

図版36　遺跡周辺の航空写真

堂付遺跡

図版37　1.調査区西側完掘　2.調査区東側南部低位面完掘　3.調査区東側完掘
図版38　1.I125グリッド遺構完掘状況　2.土器集中区5遺物出土状況　3.4号焼土遺物出土状況
図版39　1.I162グリッド南側壁面セクション　2.6号土坑断面　3.6号土坑遺物出土状況
図版40　1.集石土坑礫出土状況　2.集石土坑完掘　3.配石遺構礫検出状況
図版41　1.1号焼土断面　2.3号焼土遺物出土状況　3.4号焼土遺物出土状況
図版42　1.SK1断面　2.SK1完掘　3.SK5断面　4.SK5完掘　5.SK7断面　6.SK7完掘　7.SX5断面　8.SX5完掘　9.P50断面　10.P50完掘
図版43　1.P7断面　2.P51断面　3.P52断面　4.P53断面　5.P54断面　6.P54完掘　7.P55断面　8.P55完掘　9.P57完掘　10.P58完掘
図版44　1.石錐出土状況　2.石錐出土状況　3.打製石斧出土状況　4.打製石斧出土状況　5.打製石斧出土状況　6.注口土器出土状況　7.土器集中区1遺物出土状況　8.土器集中区3遺物出土状況　9.土器集中区2遺物出土状況　10.土器集中区6遺物出土状況
図版45　遺物1　縄文土器
図版46　遺物2　縄文土器

図版47　遺物3　縄文土器
図版48　遺物4　縄文土器・土製品・須恵器他
図版49　遺物5　石　器
図版50　遺物6　石　器
図版51　遺物7　石　器
図版52　遺物8　石　器
図版53　遺物9　石　器

百塚東E遺跡

図版54　1.遺跡遠景　2.発掘調査前の状況　3.作業風景　4.基本層序
図版55　1.東側遺物出土状況　2.西側遺物出土状況　3.完掘状況
図版56　1.完掘状況　2.立会調査作業風景　3.立会調査終了状況
図版57　遺物1　縄文土器
図版58　遺物2　縄文土器・土製品
図版59　遺物3　須恵器・フイゴの羽口・鉄滓・石器
図版60　遺物4　石　器

百塚西C遺跡

図版61　1.遺跡遠景　2.D区完掘　3.D区自然流路
図版62　1.D区自然流路　2.D区作業風景　3.D区基本層序　4.D区草創期土器出土状況　5.D区晩期土器出土状況　6.B区基本土層　7.B区農道脇遺物出土状況
図版63　1.B区一括土器出土状況　2.B区一括土器出土状況　3.C区SD38断面　4.C区断面三角形鏃出土状況　5.C区完掘　6.C区打製石斧出土状況　7.A区溝完掘状況　8.A区作業風景
図版64　遺物1　縄文土器
図版65　遺物2　縄文土器・石　器
図版66　遺物3　縄文土器・石　器

割目B遺跡

図版67　1.トレンチ1遺構確認状況　2.SD4断面　3.SD5断面　4.P9断面　5.トレンチ3遺構確認状況　6.SD11断面　7.SD11断面
図版68　1.SX12プラン確認状況　2.SX12断面　3.トレンチ8遺構確認状況　4.トレンチ9遺構確認状況　5.トレンチ12遺構確認状況　6.SD25断面　7.トレンチ16倒木痕　8.SX27・SD28確認状況　9.SX27断面　10.出土遺物

第I章 序 説

1. 調査に至る経緯

一般国道17号線小千谷バイパスは、小千谷市木津から長岡市妙見町までを結ぶ、延長7.4kmのバイパスである。現在の小千谷市周辺及び市街地の国道17号線の状況は、道路幅が狭く交通渋滞・交通騒音・交通事故等が深刻な問題となっている。さらに、小千谷市浦柄から長岡市妙見町までの1.5kmの区間は、連続雨量が150mmを超えると通行止めとなる区間でもある。これらの諸問題を解決するために、当バイパスが計画された。

建設省の小千谷バイパス建設計画立案に伴い、県教委がルート選定の事前調査として昭和54年に信濃川左岸から小千谷市街にかけて埋蔵文化財の分布調査を実施した。この調査では縄文時代・平安時代の遺跡が多数発見された。この結果をもとに建設省は平成4年3月に「百塚」及び三仏生の集落の中心を避けてルートを決定した。同年4月には、バイパス法線内の遺跡の分布調査を県教委から委託されて埋文事業団が実施した。その結果、ほぼ全線で遺物が表面採集できたことから、法線内のほとんどの区間で第一次調査を実施し、その結果をもとに第二次調査が必要であると判断した。

国道351号線からの取り付け道路部分について、早急に第一次調査が必要になり、用地買収が終了した部分について平成4年7月に調査を行った。第二次調査は百塚東D遺跡として平成5年6月から8月に行った。バイパス法線の第一次調査は平成5年8月から10月に行った。取り付け道路部分で、平成4年度に用地未買収のため第一次調査が終了していなかった地点は、平成5年9月に行った。その結果、小千谷バイパス第一次調査対象面積80,000㎡のうち70,000㎡という広い範囲で遺物が確認され、建設省にその旨通知した。建設省は平成9年の供用を目指し、暫定一期線分について工事に着手する方針を決定した。これにより一期線分については平成6年度から8年度の3か年で遺跡の発掘調査を行うことになった。二期線分については平成9年度以降に調査を実施することになった。

今回報告する堂付遺跡は、平成5年度の第一次調査で新しく発見された遺跡である。長岡市妙見町から小千谷市大字高梨へと続く「越の大橋」から接続する部分にあたる。同じく百塚東E遺跡は国道117号線から小千谷バイパスへの取り付け道路部分に当たり、工事の進行上発掘調査が急がれていた遺跡である。両遺跡とも平成6年度に発掘調査を行った遺跡である。百塚西C遺跡、割目B遺跡は平成7年度に発掘調査を行った遺跡である。

2. 調査体制と整理作業

A. 発掘調査

第一次調査

調査期間　平成5年8月20日～10月1日
調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）
調査担当　小田由美子（調査課第二係文化財専門員）
調査職員　羽賀信幸（　〃　〃　）
　　江口友子（　〃　嘱託員）

第二次調査

＜平成6年度＞

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）
調　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）
管　理　藍原直木（専務理事・事務局長）
　　渡辺耕吉（総務課長）
　　茂田井信彦（調査課長）
庶　務　泉田　誠（総務課主事）
調査指導　寺崎裕助（調査課第二係長）

〔堂付遺跡〕

調査期間　平成6年7月12日～12月2日
調査担当　遠藤孝司（調査課第二係文化財調査員）
　　江口友子（　〃　〃　）
調査職員　内山　徹（　〃　〃　）
研修生　嶋田仁志（加治川村教育委員会）

〔百塚東E遺跡〕

調査期間　平成6年7月6日～8月24日
調査担当　江口友子（調査課第二係文化財調査員）
研修生　嶋田仁志（加治川村教育委員会）

＜平成7年度＞

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
調　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）
管　理　藍原直木（専務理事・事務局長）
　　山上利雄（総務課長）
　　亀井　功（調査課長）

庶　務　　泉田　誠（総務課主事）
調査指導　寺崎裕助（調査課第二係長）
〔百塚西C遺跡〕
調査期間　平成7年4月17日～8月22日
調査担当　江口友子（調査課第二係文化財調査員）
調査職員　遠藤孝司（　〃　　主任調査員）
　　池田淳子（　〃　　嘱託員）
〔制目B遺跡〕
調査期間　平成7年5月26日～6月30日
調査担当　遠藤孝司（調査課第二係主任調査員）
調査職員　井狩　歩（　〃　　文化財調査員）

B. 整理作業

整理期間　平成6年12月5日～平成8年3月31日
調査主体　新潟県教育委員会　（教育長　平成6年度　本間栄三郎）
　　（　〃　　平成7年度　平野清明）
整理・報告　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平成6年度　本間栄三郎）
　　（　〃　　平成7年度　平野清明）
整理指導　寺崎裕助（調査課第二係長）
〔堂付遺跡〕
担　当　遠藤孝司（調査課第二係主任調査員）
職　員　内山　徹（　〃　　文化財調査員　平成6年12月5日～平成7年3月31日）
〔百塚東E遺跡〕
担　当　江口友子（調査課第二係文化財調査員）
〔百塚西C遺跡〕
担　当　江口友子（調査課第二係文化財調査員）
職　員　池田淳子（　〃　　嘱託員）
〔制目B遺跡〕
担　当　遠藤孝司（調査課第二係主任調査員）
職　員　井狩　歩（　〃　　文化財調査員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1. 位置と地理的環境

信濃川が大きく蛇行し、川幅を広げるあたりに魚沼地方の中核的な都市として発展してきた小千谷市が広がる。人口約43,000人の小千谷市は、新潟平野の南部に位置し中央部を北上する信濃川の左岸に沿って市街地が形成されている。全国でも有数の豪雪地帯として知られ、ひと冬に2mを越す積雪は市民の生活を苦しめてきたが、一方では「小千谷縮」の集産地となり、この地方の主要産業として発展させてきた。

また、北東に隣接する山古志村の錦鯉と並ぶ特産の錦鯉は、全国的な流通の中心地であり、東側の山間部には水田を利用した多数の養鯉池を散見することができる。市内中心部には、戊辰戦争による政府軍戦死者を合葬した船岡山があり、現在は公園として整備され市民の憩いの場となっている。

近世には信濃川舟運上の要所としても栄えたが、大正時代末の上越線開通でその役割を終えた。現在は上越線、国道17号線が生活・産業を支える交通路の主体に変わった。さらに市街の西側を縦断する関越自動車道の開通により、首都圏との距離がいっそう縮まり、新たな高速輸送体系が実現された。信濃川はかつての大量輸送路としての姿から、現在は豊富な水量を利用した水力発電所が流域に多数建設され、一大電源地帯となった。そのひとつ小千谷市南部のJR信濃川水力発電所は、信濃川の水を上流の中里村から山本山の調整池まで引き、一時貯水した後発電を行い首都圏に電力を供給している。また高梨と長岡市妙見地内には、国道17号線のバイパス道路を兼ねる妙見堰が建設され、信濃川の流量調節機能と長岡市の上水道や農・工業用水路の取水口となるなど、信濃川の新たな有効利用が図られている。近年では織物産業の他にも電子機器メーカーが進出するなど、豊かな水と高速道路を結びつけた内陸工業地域として発展している。

東頸城丘陵と魚沼丘陵との間を流れる信濃川は、津南町から三島町に至る流域市町村に広大な河岸段丘を発達させてきた。河岸段丘は河川の浸食作用と氷河期の海水面低下、そして地殻変動によって形成されたもので、独特の景観を作り出している。小千谷市付近では、段丘は左岸での発達が著しく、上流の津南町に比較すると緩やかではっきりしていないという特徴がある。これらの段丘はほとんどが魚沼層群を基盤とし、第四紀の中期更新世から完新世にかけて形成され、段丘上には信濃川流域に広く見られる火山灰層・信濃川ローム層が堆積している［吉越ほか1992］。この火山灰は、妙高・黒姫火山から供給されたもので、そのため信濃川ローム層は供給源に近い西側の上流に向うほど厚く堆積している。

小千谷市は河岸段丘上に形成された都市で「坂道の多い町」といわれるが、これは段丘面変化を表現したものである。周囲の山地は、標高200～500m級の第三紀褶曲丘陵群から形成されており、信濃川の西岸は渋海川の谷が作る小国盆地と境を接する関田山脈の北端にあたり、東岸は東山山脈の東南部にあたり、いずれも緩やかな丘陵山地が続いている。

堂付遺跡・百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・御目B遺跡は、信濃川左岸の小千谷面と呼ばれる標高42～48mの段丘上に立地している。4遺跡で最も北に位置する堂付遺跡は、小千谷段丘面の東端に位置し、東に金倉山（581m）、西に小栗田原段丘を眺めることができる。また、最も南に所在する百塚東E遺跡は千谷地内に

あり、西側を通る市道高架―三仏生線の東沿いには「百塚」と呼ばれる塚が百数十基、約1kmにわたって続く。遺跡名はこの「百塚」の東に位置することから付けられたもので、緩やかな段丘の先端の傾斜地に立地する。両遺跡のほぼ中間、百塚西C遺跡の東側には、小千谷市における考古学の発掘調査第一号である三仏生遺跡が存在し、この遺跡から出土した土器は「三仏生式土器」と呼称され〔中村1957〕新潟県の縄文時代後期中葉の標式土器とされている。この三仏生遺跡も、堂付遺跡よりやや高い小千谷面に立地する。

小千谷面は小千谷段丘群の低位に位置する段丘で、信濃川ローム層が認められず、完新世に形成された比較的新しい段丘である。小千谷段丘群は、現在、以下の七段階に分けられている。

Ⅰ　山本山Ⅰ面：標準面の山本山山頂（標高336.1m）から西方に緩傾斜する小段丘面

Ⅱ　山本山Ⅱ面：山本山Ⅰ面直下から東西へ延びる三段の小段丘を合わせた面

Ⅲ　市民の家面：山本山Ⅱ面の急な段丘崖下に西に緩傾斜をし東西に広く形成されている平坦面

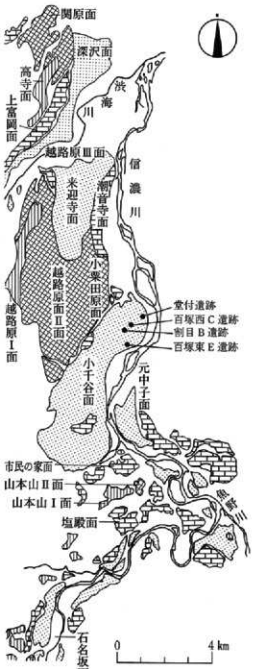
Ⅳ　船岡山面：小千谷市街地の南方に位置する丘陵、船岡山の頂上の平坦面

Ⅴ　塩殿面：船岡山から北西に延びる狭い平坦地

Ⅵ　小千谷面：東頸城丘陵東端山麓から、信濃川自然堤防側にある標高40m付近の平坦地と船岡山の下に広がる平坦地

Ⅶ　元中子面：信濃川右岸の標高約50mの沖積段丘面

これらの段丘面のうち山本山Ⅰ面は、下流の越路町に広がる越路原Ⅰ面にも広範囲に分布している。また、小千谷市北部の小栗田原面と越路原Ⅱ面とは比高約100mを測り凹凸状になっていることから一見異なった面に見えるが、実際は同じ面であることが確認されている。これらのことから、この地域は信濃川流域の中でも大地の上下変動が大きかったことが知られている。「甲武信岳」に源を発した信濃川は、現在の小千谷市北部から越路町付近で流れを緩め、膨大な堆積物を吐き出し平地を広げ、新潟平野を形成してきた。その南部にあたるこの地域は、信濃川が平野部へと流れ出す位置にあたり、新潟平野の形成を知る上でも重要な地域と考えられている。



第1図　小千谷市周辺の河岸段丘分布図
（『日本の地質4　中部地方Ⅰ』1988年より転載）

2. 周辺の遺跡

小千谷市内に所在する遺跡は現在163か所（うち塚55遺跡は除く）を数え、なかでも縄文時代の遺跡が圧倒的に多く、120か所と遺跡全体の約7割強を占めている［遠藤1990］。古代37遺跡、中世31遺跡、旧石器時代5遺跡と続き、弥生時代は三仏生遺跡（39）・鶴ケ丘遺跡（43）・中道遺跡（73）の3遺跡で、散発的に土器が出土している程度である。古墳時代の遺跡については現在のところ全く不明である。

旧石器時代では、本遺跡群西側の一段高い小粟田原段丘面に所在する館清水遺跡（31）や城之腰遺跡（53）より石刃、ナイフ形石器や彫器が出土している［藤巻ほか1991・小千谷市1969］。また、多量の尖頭器が出土した真人原遺跡（110）［小野1992］やナイフ形石器が表面採取された天辺原A遺跡（56）などが挙げられ、荒屋型彫器など細石刃文化で著名な川口町荒屋遺跡（128）［芹沢1990］は信濃川の上流約10kmに所在する。いずれも、元中子・小千谷面といった完新世より高位の更新世の段丘に立地し、当時の信濃川河床に近い段丘先端部に占地していることが窺える。

縄文時代の遺跡は時期的に継続するものもあるが、草創期1、早期5、前期7、中期62、後期41、晩期14、時期不明41である。これらの遺跡の動態は、県内の縄文遺跡の時期的な増減傾向と様相が類似し、中期に遺跡は急増し、規模も大きくなり縄文時代の最盛期を迎える。中期に成立する遺跡の多くは後期へと継続し、後期に出現する遺跡は晩期へ継続するものが多いが、晩期単独の遺跡は認められない。

市内の縄文時代草創期の遺跡は、四ツ子山遺跡（76）、大崩遺跡（115・116）で石器の単独資料が報告されているが［甘粕ほか1983］、石器と土器（隆起線文系）が出土した遺跡は百塚西C遺跡（3）が初例であろう。今後、小千谷面においても草創期の土器が発見されることが期待される。早期では百塚東E遺跡（2）［江口ほか1995］・蟹沢遺跡（93・94）［八幡1937］及び三仏生遺跡［中村1957］・本田遺跡（84）・両新田遺跡（57）［藤巻1985］で楕円押型文土器が断片的に出土している。本田遺跡では田戸上層式併行の貝殻腹縁文や茅山式併行の貝殻条痕文土器が出土している。前期の遺跡も早期から継続するかたちで、蟹沢遺跡・本田遺跡・大石畑遺跡（89）などがあげられ、中原遺跡（92）では諸磯式土器、本田遺跡では諸磯式・十三菩提式土器が出土している［中川ほか1964］。堂付遺跡でも繊維を多量に含む羽状縄文が出土しているが、点数的に多くはない。中期の遺跡は、中期後半から後期初頭の土器や住居跡が検出された大平遺跡（95）［上

第1表　周辺の遺跡一覧

旧石器時代

31. 館清水遺跡	53. 城之腰遺跡	56. 天辺原A遺跡	73. 中道遺跡	110. 真人原遺跡	128. 荒屋遺跡

縄文時代

1. 堂付遺跡（縄文早～晩期）	27. 北高梨遺跡（縄文時代）	53. 城之腰遺跡（縄文中～後期）	79. 上ノ原C遺跡（縄文時代）	105. 陣ケ平遺跡（縄文中期）
2. 百塚東E遺跡（縄文早～晩期）	28. 野中遺跡（縄文時代）	54. 天辺原C遺跡（縄文時代）	80. 上ノ原A遺跡（縄文時代）	106. 山谷遺跡（縄文中期）
3. 百塚西C遺跡(縄文草創～晩期)	29. 平沢遺跡（縄文後～晩期）	55. 天辺原B遺跡（縄文時代）	81. 獅子ケ平遺跡（縄文中期）	107. 島遺跡（縄文中～後期）
4. 朝日B遺跡（縄文時代）	30. 上野遺跡（縄文後～晩期）	56. 天辺原A遺跡（縄文時代）	82. 細島遺跡（縄文中～後期）	108. 冬井遺跡（縄文後期）
5. 俣沢遺跡（縄文中～後期）	31. 館清水遺跡（縄文中～後期）	57. 両新田遺跡(縄文早・前・後期)	83. 塔の神林遺跡（縄文中～後期）	109. 下ノ沢遺跡（縄文時代）
6. 斎々供遺跡（縄文中～後期）	32. 矢ノ上A遺跡（縄文時代）	58. 道金原北遺跡（縄文時代）	84. 本田遺跡（縄文早～前期）	110. 真人原遺跡（旧石器・縄文）
7. 遍命寺遺跡（縄文中～後期）	33. 矢ノ上B遺跡（縄文時代）	59. 道金原遺跡（縄文中～後期）	85. 妙高寺遺跡（縄文中～後期）	111. 越ケ原遺跡（縄文時代）
8. 沼田遺跡（縄文中期）	34. 百塚西B遺跡（縄文時代）	60. 下原遺跡（縄文中期）	86. 朴の木遺跡（縄文中期）	112. 三本明遺跡（縄文後期）
9. 町裏遺跡（縄文後期）	35. 百塚西A遺跡（縄文時代）	61. 亀ケ池観音堂塚群（縄文中期）	87. 原遺跡（縄文時代）	113. 赤ノ口遺跡（縄文時代）
10. 池津遺跡（縄文中～後期）	36. 矢ノ上C遺跡（縄文時代）	62. 滝原遺跡（縄文中期）	88. 外山遺跡（縄文時代）	114. 岩山遺跡（縄文中～後期）
11. 十三塚遺跡（縄文中～後期）	37. 矢ノ上D遺跡（縄文時代）	63. 時水遺跡（縄文時代）	89. 大石畑遺跡（縄文早～中期）	115. 大崩北遺跡（縄文早～後期）
12. 前原遺跡（縄文後期）	38. 矢ノ下遺跡（縄文時代）	64. 上ノ山遺跡（縄文中～後期）	90. 下の開発遺跡（縄文中期）	116. 大崩南遺跡（縄文早～後期）
13. 寺社堀遺跡（縄文中～後期）	39. 三仏生遺跡（縄文後～晩期）	65. 船岡山遺跡（縄文時代）	91. 上の原遺跡（縄文前～晩期）	117. 山中遺跡（縄文時代）
14. 前原A遺跡（縄文時代）	40. 源藤六遺跡（縄文後～晩期）	66. 上殿原遺跡（縄文中～後期）	92. 中原遺跡（縄文前～後期）	118. 原北遺跡（縄文時代）
15. 前原B遺跡（縄文後・晩期）	41. 小粟田原II遺跡（縄文後期）	67. 元中子遺跡（縄文中～後期）	93. 下蟹沢遺跡（縄文早～前期）	119. 原南遺跡（縄文時代）
16. 塊山遺跡（縄文中期）	42. 南原遺跡（縄文中期）	68. 大清水遺跡（縄文中期）	94. 上蟹沢遺跡（縄文早～前期）	120. 山下遺跡（縄文中～後期）
17. 大屋敷遺跡（縄文後期）	43. 鶴ケ丘遺跡（縄文時代）	69. 徳右エ門山遺跡（縄文中期）	95. 大平遺跡（縄文中～後期）	121. 山王遺跡（縄文後期）
18. 雨だれ遺跡（縄文中～後期）	44. 朝日A遺跡（縄文時代）	70. 下道I遺跡（縄文時代）	96. 林中遺跡（縄文中期）	122. 外新田遺跡（縄文中～後期）
19. 七曲遺跡（縄文時代）	45. 百塚西D遺跡（縄文時代）	71. 中道東遺跡（縄文中期）	97. 岩山田遺跡（縄文中期）	123. 岩野原遺跡（縄文中～後期）
20. 魚無沢遺跡（縄文後期）	46. 百塚東A遺跡（縄文時代）	72. 山王林遺跡（縄文時代）	98. 上の開発遺跡（縄文中期）	124. 朝日遺跡（縄文晩期）
21. 前塚遺跡（縄文中～後期）	47. 百塚東C遺跡（縄文時代）	73. 中道遺跡（縄文時代）	99. 墓地の下遺跡（縄文中期）	125. 下釜松遺跡（縄文晩期）
22. 青池遺跡（縄文晩期）	48. 百塚東B遺跡（縄文時代）	74. 矢原遺跡（縄文中～後期）	100. 稲荷堂遺跡（縄文中～晩期）	126. 多賀屋敷遺跡（縄文中～後期）
23. 館の上遺跡（縄文中期）	49. 金塚遺跡（縄文時代）	75. 大明神遺跡（縄文後～晩期）	101. 観音堂遺跡（縄文中～後期）	127. 西倉遺跡（縄文草創～中期）
24. 行塚遺跡（縄文時代）	50. 百塚東D遺跡（縄文時代）	76. 四ツ子山遺跡（縄文中期）	102. 八幡様遺跡（縄文中期）	129. 両新田遺跡（縄文時代）
25. 小粟田原I遺跡（縄文中期）	51. 桜野遺跡（縄文中期）	77. 中原遺跡（縄文中期）	103. 大北沢遺跡（縄文中期）	
26. 三ケ峰遺跡（縄文後期）	52. 天辺原D遺跡（縄文時代）	78. 上ノ原B遺跡（縄文時代）	104. 臼坂遺跡（縄文中期）	

✱ 旧石器時代　★ 縄文時代（草創期）　▲ 縄文時代（早期）　△ 縄文時代（前期）

● 縄文時代（中期）　○ 縄文時代（後期）　■ 縄文時代（晩期）　□ 縄文時代

第２図　位置と周辺の遺跡

国土地理院発行地形図
『長　岡』平成２年
『小千谷』平成６年　合成１：50,000

原ほか1958]、中期後葉から後期前葉の集落が検出され、竪穴住居83軒を発掘調査した城之腰遺跡がある。その他、前野遺跡（51）や元中子遺跡（67）、俣沢遺跡（5）も規模の大きな中期の遺跡である。後期の遺跡では、前葉の城之腰遺跡や中葉の三仏生遺跡をはじめ、元中子遺跡や大明神遺跡（75）、上ノ山遺跡（64）などがあり、大明神遺跡や上ノ山遺跡は晩期へと継続される。市内の遺跡は、信濃川が蛇行し、段丘が張り出す地形を呈する芋坂・時ノ島、高梨・三仏生地区などの小千谷段丘面の東端部に集中する傾向があり、本遺跡群もこの三仏生地区に所在している。

3. 小千谷の考古学的調査

市内の遺跡は、明治・大正時代すでに若林勝邦・大野延太郎・魚沼無口の諸氏らによって遺物の発見報告がなされている［若林1983、大野1900、魚沼1916］。昭和11年には、長岡の近藤勘治郎氏の報告を受けた八幡一郎が、「越後中魚沼郡芋坂の土器略報」として県内初の早期押型文土器及び前期の繊維を含む羽状縄文土器として蟹沢遺跡の報告を行っている［八幡1937］。翌12年には斎藤秀平が全県の縄文時代・弥生時代の遺跡を集大成している。市内関係では28か所の遺跡が取り上げられている。県内の縄文土器編年を「芋坂式—羽状縄文式—坪穴式—長者ケ原式—塔ケ崎式—三十稲場式—三仏生式—石倉式」と示した［斎藤1937］。このうち蟹沢遺跡出土の押型文土器を標式とした芋坂式、および三仏生字清水上出土の磨消縄文土器を標式とした三仏生式は、学史的にも有名な遺跡で、三仏生遺跡は現在に至るまで新潟県内の後期中葉の代表的な遺跡となっている。

小千谷市における本格的な発掘調査は、昭和30年に長岡市立科学博物館による三仏生遺跡の調査が初例で、後期中葉に位置づけられる多量の土器片や住居跡、石組炉跡などが出土した。また、翌年には小千谷市教育委員会による大平遺跡の調査が実施され、縄文時代中期後半の住居跡が検出された。その後、昭和55年から56年にかけて新潟県教育委員会による城之腰遺跡（53）の発掘調査が実施され、縄文時代中期後葉から後期前葉の竪穴住居跡83軒を中心とした集落跡が検出された。昭和56・57年には市教育委員会が竜ケ池観音堂塚群の方形基壇状遺構と塚群を発掘調査し、南北朝から室町時代にかけての火葬墓の埋葬形態が明らかになった［池田1982・1983］。昭和60年・61年には徳右ェ門山遺跡（69）と中道遺跡（73）の発掘調査が実施され、徳右ェ門山遺跡では中期中葉を主体とする土器と住居跡や土坑・炉跡などが検出され、中道遺跡では前期から後期・弥生・平安時代の土器が断続的ではあるが出土している。平成元年に小千谷市教育委員会による婆々懐遺跡（6）の発掘調査が実施され、後期初頭の三十稲場式を主体とした土器と、土坑群が検出されている［遠藤1989］。そして平成5年、国道17号線小千谷バイパスに関連して埋文事業団による百塚東D遺跡の発掘調査がなされ、少量ではあるが早期から晩期までの土器が出土している。中心となる時期は後・晩期である。

この他、市史編さん事業の一環として立教大学による岡林の古墓群の調査［中川1962］や、新潟大学による真人原遺跡の調査が特筆される。偶然発見された岡林の1号古墓からは、珠洲焼の壺中より「道導禅門五十一歳□□□キリーク・サ・サク（阿弥陀三尊種子）嘉暦三年太才戊辰六月十二日午時圓寂」の墨書銘がある銅製宝篋印塔が出土し、真人原遺跡では多量の尖頭器が出土し、尖頭器製作に関わる貴重な資料が得られている。

また、忘れてならないのは地元の熱心な郷土史研究者や愛好者で、古くは片貝の安達寅松・芋坂の大滝金司の両氏、そして教職をとる傍ら精力的に市内の遺跡を踏査され、現在の遺跡の多くを発見した安達吉治氏、市文化財調査審議会委員長を長年勤め、埋蔵文化財に情熱を注いだ浅田壮太郎氏らの活躍は、今日の小千谷市の遺跡調査や研究、文化財保護行政の基礎をなしているといっても過言ではない。

第Ⅲ章　調査の概要

1．第一次調査の概要

A．調査の方法

小千谷バイパスおよび取り付け道路法線内の第一次調査は平成5年8月20日～10月1日に行った。第一次調査の方法はトレンチによる発掘法とした。道路幅に合わせ4×4mのトレンチを11m間隔に三列にし、20mごとに設定することを基本とした。雑草等を取り除くため、バックフォーで表土から10cm程度を除去し、Ⅱ層からは基本的には人力により、ジョレンで堆積土を薄く掘削しながら遺物の検出に努めた。地山まで掘削が終了後、壁面・地山面で遺構の精査を行い、確認された一部の遺構については半截を行ったものもある。

遺構精査後、各トレンチの地山面と土層堆積状況の写真撮影及び記録を行った。遺物は出土層位を確認し、層位ごとに収納した。トレンチ位置を法線図上に記録後、バックフォーで埋め戻した。

B．調査の結果

第一次調査の結果、小千谷バイパス第一次調査対象面積80,000㎡に対して、70,000㎡という広い面積で遺物が確認された。各遺跡ごとの面積等については第3図参照。ほぼ全面から遺物が出土したが、第Ⅰ層（表土）のみからの遺物出土地点も多く、遺跡範囲の確定が困難を極めた。ここでは第一次調査の結果を基に遺跡の概略を述べる。

堂付遺跡

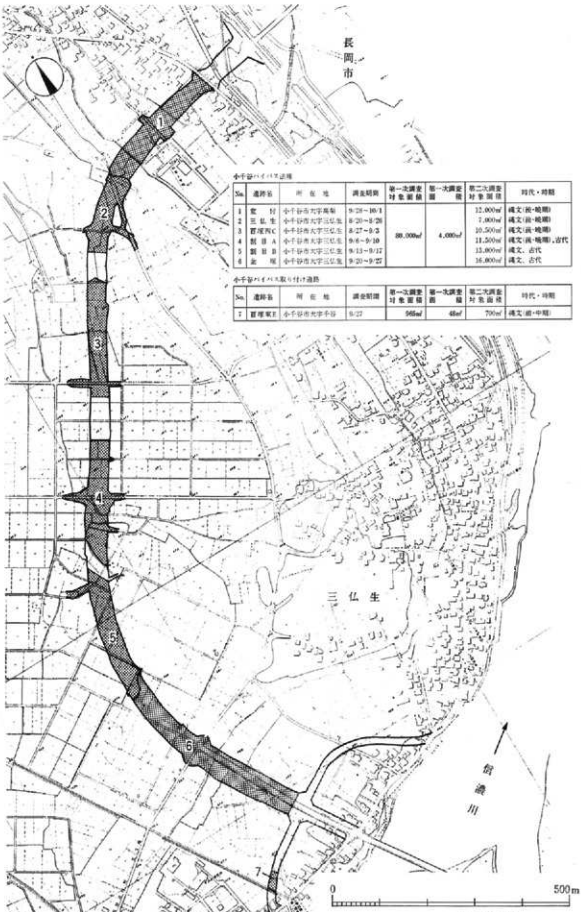
今回の第一次調査で新しく発見された遺跡である。他の5遺跡より一段低い段丘面に位置している。ほぼ全面から遺物の出土があり、縄文時代の遺物包含層の存在が確認された。遺物は縄文時代後・晩期の土器片を中心に石器・剥片などが多数出土している。信濃川に近い部分では洪水によると思われる堆積土が確認され、この層をはさんで遺物が出土している。

三仏生遺跡

新潟県の縄文時代後期の標式土器である三仏生式土器が出土した三仏生遺跡の縁辺部にあたると考えられる。現況は畑地・荒地・水田で、遺物点数は少なかったが、部分的に縄文時代の遺物包含層が確認された。遺構と推定される落ち込みが検出されている。

百塚西Ｃ遺跡

周知の遺跡である百塚西C遺跡の縁辺部と考えられる。現況は水田と畑地で、耕作による攪乱、盛土、土取りなどにより、遺物包含層の存在しない部分もある。縄文時代後・晩期の土器がまとまって出土した地点や、石核・剥片が集中して出土した地点もあった。



小千谷バイパス遺跡

No.	遺跡名	所在地	調査期間	第一次調査対象面積	第一次調査面積	第二次調査対象面積	時代・時期
1	荒　川	小千谷市大字高梨	9/28～10/1	80,000㎡	4,000㎡	12,000㎡	縄文(前・晩期)
2	五丘生	小千谷市大字三仏生	8/20～8/28			7,000㎡	縄文(前・晩期)
3	都塚西C	小千谷市大字三仏生	8/27～9/3			10,500㎡	縄文(前・晩期)
4	都塚A	小千谷市大字三仏生	9/6～9/10			11,500㎡	縄文(前・晩期)、古代
5	都塚B	小千谷市大字三仏生	9/13～9/17			13,000㎡	縄文、古代
6	新　堀	小千谷市大字三仏生	9/20～9/27			16,000㎡	縄文、古代

小千谷バイパス取り付け道路

No.	遺跡名	所在地	調査期間	第一次調査対象面積	第一次調査面積	第二次調査対象面積	時代・時期
7	都塚東I	小千谷市大字千谷	9/27	980㎡	49㎡	700㎡	縄文(前・中期)

第３図　小千谷バイパス法線と遺跡位置図

小千谷市役所提供
1：2,500を縮小　平成２年印刷

割目A遺跡

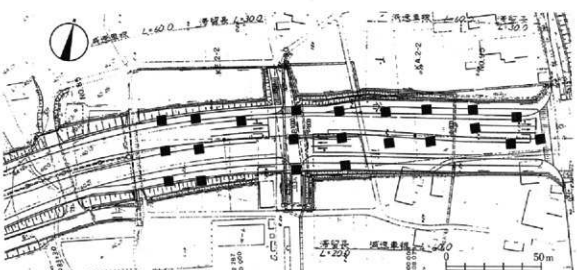
古代の割目A遺跡の中心部分と考えられる。須恵器・土師器が多数出土しており、遺構も多く検出された。耕作による攪乱を部分的に受けている。遺構としてはピット4基、土坑3基が確認された。縄文土器もわずかではあるが出土している。

割目B遺跡

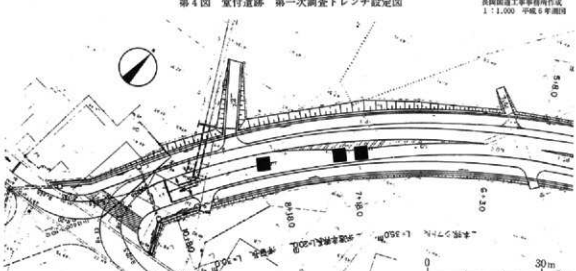
全面から縄文時代、古代の遺物が出土している。耕作による攪乱と第二次世界大戦中の東部52部隊の兵舎等による攪乱をかなり受けている。しかし、遺物包含層が良好に残っている部分も確認された。縄文時代の竪穴住居跡の可能性のある落ち込みの一部が確認されている。割目B遺跡の範囲は今回の調査部分まで広がるものと考えられる。

金塚遺跡

金塚遺跡も畑地の耕作及び東部52部隊の兵舎等による攪乱が多い。遺物の広がりから、金塚遺跡の範囲



第4図　童付遺跡　第一次調査トレンチ設定図

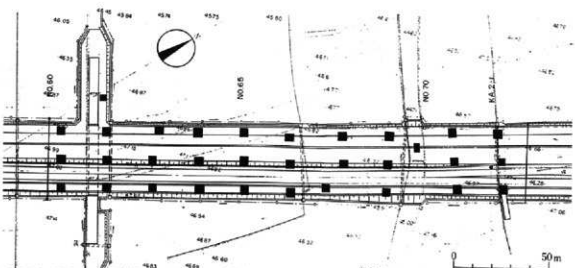


第5図　百塚東E遺跡　第一次調査トレンチ設定図

もかなり広がり、縄文時代の遺物と古代の須恵器・土師器も多く出土し、住居跡の可能性のある遺構なども多く確認されている。金塚遺跡の中心と推定される部分が第二次調査対象範囲に入っている。三仏生集落の西端にある近世の遺跡といわれる「百塚」の一部に当たる可能性のある塚状の高まりが、市道高梨―三仏生線沿いに1基確認された。

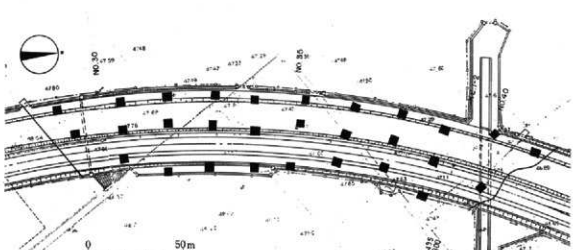
百塚東E遺跡

平成4年度に調査できなかった取り付け道路部分について調査を行った。現況は畑地で、遺物包含層が厚く良好に残っており、遺物も多数出土した。地形は東側から西側へ緩く傾斜し、黒色土が厚く堆積していた。遺物は縄文時代前期・中期の土器を中心に出土している。当初遺跡名は百塚東E・F遺跡としていたが、百塚東E遺跡の名称に改めた。



第6図　百塚西C遺跡　第一次調査トレンチ設定図

建設省北陸地方建設局
長岡国道工事事務所作成
1：1,000　平成6年測図



第7図　割目B遺跡　第一次調査トレンチ設定図

建設省北陸地方建設局
長岡国道工事事務所作成
1：1,000　平成6年測図

2. 大グリッドの設定

小千谷バイパスは信濃川右岸の長岡市妙見町と左岸の小千谷市高梨・三仏生地区を結び、再び右岸の横渡地区に通ずる延長約7.4kmの国道17号線バイパスである。この小千谷市高梨・三仏生地区は市内でも遺跡の集中する地区で、バイパス工事に関連して7遺跡約70,000㎡の発掘調査が必要となった。

このため、7遺跡に共通の基準を設け法線内の全遺跡をカバーするグリッドを設定することにした。設定の基準は、国土地理院の座標軸（100×100mの方眼）を用い、南北軸を数字で北から1、2、・・・16、東西軸をアルファベットで西からA、B、C、・・・Iとして表示し、大グリッドとした。北東隅の座標値は、X148900、Y28700である（第8図）。

第8図　小千谷バイパス関係遺跡大グリッド設定図

第Ⅳ章　堂付遺跡

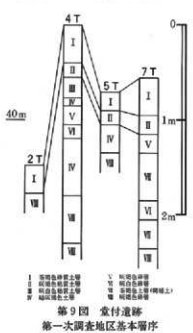
1. 調査の方法

発掘調査は、第一次調査結果を参考に重機による表土除去を行い、第Ⅰ層でも比較的まとまった遺物が出土した場合は、人力による掘削に切り替える方法をとった。遺物包含層はベルトコンベアーを使い人力で掘削・排土し、遺構に絡むものや、ややまとまって出土した遺物は随時出土状況の図面を作成し、掘り下げていった。出土遺物は少量であり、単発的に出土するものが多い。遺構は第Ⅱ～第Ⅳ層の各層において精査を実施したが、明確に確認できなかったため、最終的な遺構確認は第Ⅴ層上面で実施した。また、特に遺物が集中して出土した地点は、下部に土坑などの遺構が存在する可能性が高いため、土層観察ベルト等を設定し、遺構の確認に注意した。遺物は、個別に平面ドットとレベル値を記録しながら取り上げた。包含層から単独出土した遺物は、小グリッド毎に層位を記録して取り上げた。検出された遺構は、種別ごとに分類して各番号を付して図面作成・写真撮影を行った。

2. 調査の経過

調査は堂付遺跡の第二次調査面積約7,500㎡と、平成5年度に未買収地で調査ができなかった西側の池周辺（第11図）の第一次調査を併行して、平成7年7月12日から12月2日までの延べ94日間にわたり実施した。調査の経過及び概要は以下のとおりである。

7月12日、調査区西側より東方向に重機による表土除去を開始し、7月20日から人力による包含層掘削に着手する。遺物の出土状況は希薄で第Ⅲ層直上まで重機で掘削した地点もあり、調査は予定以上に進んだ。この間に、第一次調査を7月26日から8月2日の延べ4日間併行して実施した。第一次調査地区は現況が水田及び養鯉池で、池の中心

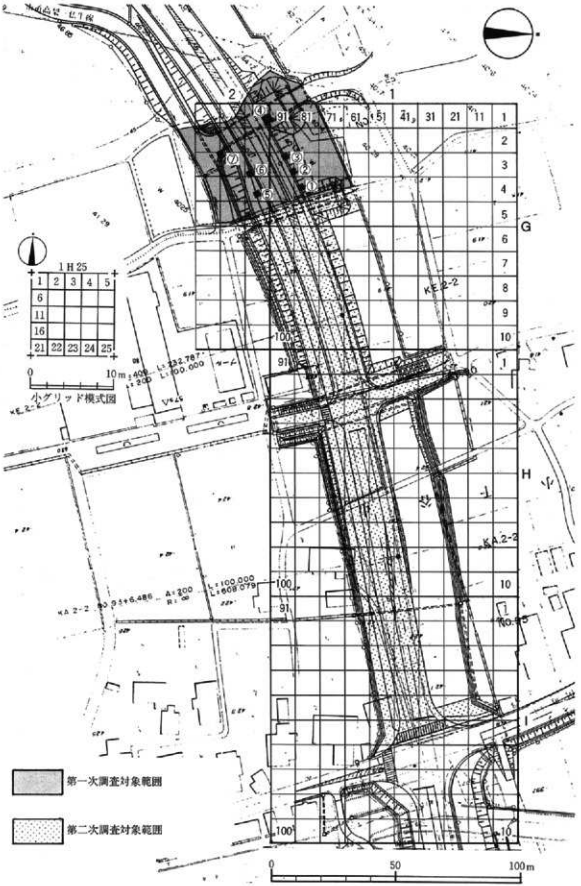


第9図　堂付遺跡
第一次調査地区基本層序

3号トレンチ土層堆積状況（西から）

6号トレンチ土層堆積状況（西から）

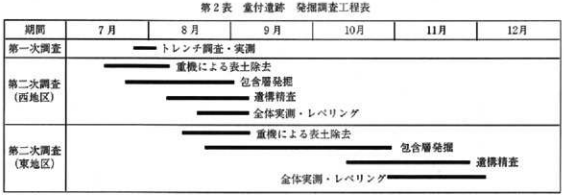
第10図　堂付遺跡　第一次調査地区調査状況



第11図　堂付遺跡　中・小グリッド設定図　　建設省北陸地方建設局長岡国道工事事務所作成　1：1,000　平成6年測図

部は造成時にかなり深く掘削していることや、湧水が著しいため、池中心部を外して第一次調査を実施した。任意に7か所の試掘穴を開けたところ、第4トレンチ第Ⅴ層から近世陶器片1点、第7トレンチ第Ⅶ層から縄文土器片2点と近世陶器片2点が出土した。遺物の出土状況は希薄で遺物を包含する層も確認できなかった。第一次調査区は、小千谷段丘面の小段丘崖の低地を流れる旧流路と考えられ、第二次調査から除外することとなった。堂付遺跡第二次調査区は、I152グリッド付近を境として、東側は西側より約1m低い平坦面となり、土層の堆積も西側の調査区とは様相が異なっていた。東側の調査区第Ⅲ層から、石器や土器の集中出土が相次ぎ、出土量も増加した。本遺跡の6地点で遺物集中地点があり、このうち5地点が東側平坦地に集中している。特にI115・25の中グリッドの第Ⅲ層から多量の土器が集中して出土した。土器集中区の下部には土坑あるいは住居跡の存在する可能性が高く、遺構の落ち込みがあるか精査したが確認されなかったため、土層観察ベルトを設定し、断面観察を行ないプラン検出に努めた。しかし、焼土は検出されたものの床面の検出はできなかった。最終的には第Ⅴ層上面で遺構精査を行い、柱穴を検出した。遺物は、個別に平面とレベルを記録しながら取り上げた。調査区西側については、1Gグリッドで土坑およびピットが各1基、1H54・55グリッドで集石遺構が1か所検出されただけで、他は倒木痕であった。なお、遺構や遺物の出土が希薄で遺存状況が不良な箇所については、調査の中止や調査範囲を削減して、12月2日現場を撤収し調査を終了した。

第2表 堂付遺跡 発掘調査工程表



3. 中・小グリッドの設定

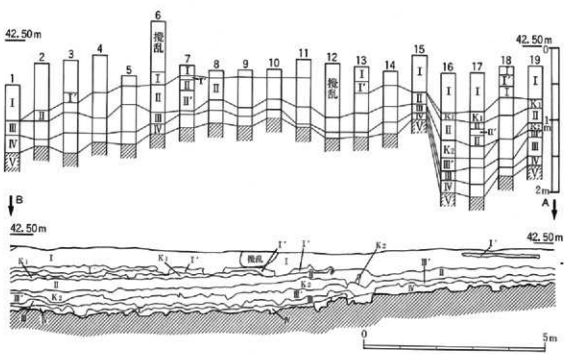
小千谷バイパス法線は、信濃川左岸の越の大橋と小千谷大橋のあいだの約2kmにわたり、関連工事も含め7遺跡の発掘調査が必要となった。このため、公共座標系を用い、全遺跡を網羅する100m方眼を大グリッドとして設定した（第8図）。さらに100m方眼を1辺10mの方眼に区分し100等分し、中グリッドを設定し、北西隅から東方向へ1・2・3～10、南東隅を100とした。そして中グリッドを2m方眼ごとに等分し小グリッドを設定し、中グリッド同様に北西隅から東方向へ1・2～5、南東隅を25とした（第11図）。小グリッドは「1H50－25」のように表記した。

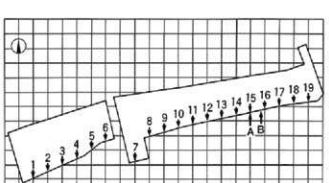
4. 基本層序

堂付遺跡は更新世前期に形成された魚沼層群を基盤とし、小千谷面と呼ばれる沖積段丘上に位置する。

小千谷面は、信濃川左岸によく発達した河岸段丘で南北8km、東西3kmの広がりを持ち北に向かって緩く傾斜している。堂付遺跡の約300m南西に所在する三仏生遺跡とは同一段丘面であるが、中間に比高約5～7mの小段丘崖がある。堂付遺跡は三仏生遺跡より低位の平坦地に立地している。調査区の大部分は水田で平坦であるが、西側の一部は段丘崖に沿った低湿地帯で養鯉池として使われていた。

層序は色調や含有物・粘性などで区分し、上位より第Ⅰ層：褐色土（表土）、第Ⅱ層：茶褐色土、第Ⅲ層：黒色土、第Ⅳ層：明褐色土（漸移層）、第Ⅴ層：明黄褐色土（地山）である。しかし、調査区の1152グリッド付近を境として土層に差異が見られ、東側は地山面で比高約1mの低位面となっている。この低位面には第Ⅱ層・第Ⅲ層を挟み黄褐色の砂質土（K層）が10cmから15cm上下に堆積し、地点により若干の厚みが異なるが低位面全体にみられる。調査区の200m東側に現在の信濃川の河床があること、調査区西側の平坦面には堆積していないことなどから洪水堆積によるものと考えられる。第Ⅱ層及び第Ⅲ層は場所により5cm





Ⅰ 層　褐色土（表土、しまりなし・粘性弱）
Ⅰ'層　暗褐色土（しまりはとんどなし・粘性弱）
K₁層　黄褐色土（上部はやや褐色を呈し、砂質である）
Ⅱ 層　暗灰褐色土（しまりあり・粘性中）
K₂層　暗灰褐色土（Ⅱ層よりやや明るい、ややしまりあり・粘性中）
Ⅲ 層　黒褐色土（ややしまりあり・粘性中）
Ⅳ 層　明褐色土（漸移層、ややしまりあり・粘性弱）
Ⅴ 層　明黄褐色土（地山、しまりあり・粘性強）

第12図　堂付遺跡　基本層序

から40cmと堆積が異なり、安定していない。縄文時代の遺物包含層は第Ⅱ層から第Ⅳ層までで、第Ⅱ層からは後期、第Ⅲ層は中期、第Ⅳ層では早・前期の土器を主体としているが、明確な区分はできなかった。

5. 遺　構

A. 概　要

堂付遺跡で検出された遺構は、土器集中区6か所，土坑9基、集石遺構1基、配石遺構1基、溝3条のほか、ピット及び性格不明遺構と倒木痕である。この中で土器集中区5は、掘込みや床面等の確認ができなかったが遺物の出土状況や焼土、ピットの配列などから竪穴住居跡の可能性が高い。遺構確認面は第Ⅲ層（黒褐色土）及び第Ⅳ層（明褐色土）で、遺物を伴う遺構は少なく、時期を明確にできるものは僅かであった。遺構の分布状況は、調査区東側の一段低位の平坦地に集中していることから、信濃川に沿った河岸に集落の中心があったものと考えられる。以下、種別ごとに代表的な遺構について記述する。

B. 各　説

（1）土器集中区（図版4～6，写真図版38）

集中区1　1H54・55グリッドに位置し、第Ⅲ層中に包含されている。遺物は径約8mの範囲に分布し、370点が出土している。出土した遺物は、143や144のように内外面とも器面が入念に研磨され、内面に数条の平行沈線と刻目が施される浅鉢や、緩やかな波状口縁を呈し一条の平行沈線が巡る深鉢など、数個体分の土器が確認されるが、いずれも器形は復元できない。遺構プランが検出できないため、セクションベルトを設定し土層観察を行ったが、遺構は確認できなかった。時期は縄文後期中葉が主体である。

集中区2　1I34グリッドに位置し、第Ⅱ層中に包含されている。2.5から3.0mの楕円形を呈し、約15cmのレベル範囲から112点の縄文土器片が出土している。個体数からすれば1・2個体と推測され、時期は縄文後期初頭である。掘込み等は確認されなかった。

集中区3　1I44・45グリッドに位置し、第Ⅱ及び第Ⅲ層中に包含されている。東西6.5m、南北4.5mの範囲に分布し、232点の縄文土器片が出土している。時期的には縄文中期と後期の土器が混在して出土している。出土した土器の上面と下面では約50cmの深度差があり、出土状況やレベル差からみて土坑に伴うものと考えられるが、包含層中での土層識別はできなかった。遺構最終確認面である第Ⅴ層においても掘込み等は確認できなかった。

集中区4　1I35グリッドに位置し、第Ⅲ層中に包含されている。径4.5～5mの不定形状に分布し、上面と下面のレベル差は30cmである。出土点数は94点と集中区では最も点数が少ないが、出土状況から土坑などの遺構に伴うものと推測される。中期と後期の土器が混在している。

集中区5　1I25グリッドに位置し、第Ⅱ及び第Ⅲ層中に包含されている。南北約7m、東西3.5m（西側は今回の調査対象範囲外のため未調査であるが、土器の出土状況から範囲は拡大するものと考えられる）の半円形から1,061点の縄文土器が出土した。時期は後期中葉が主体を占める。集中区内はさらに小ブロック単位で土器が出土し、20cmのレベル幅に収まっている。焼土も検出されたが、床面となりうるような土層は特に確認できなかった。しかし、最終遺構確認面の第Ⅴ層直上でピットが数基検出され、焼土を中心にして円形状に巡る状況から、住居跡に伴う小柱穴と思われる。

集中区6　1I15グリッドに位置し、第Ⅲ層中に包含されている。径2.5mの円形の範囲から101点の土器片が出土し、深度25cmのレベル幅に収まる。土器は中期と後期の土器が混在している。

（2）土　坑（図版7、写真図版42）

SK1　1G99－9・10グリッドに位置する不整形の土坑である。上端長径96cm・上端短径83cm、地山からの深度は30cmである。垂直に近いかたちで掘込まれ、底面はフラットである。

SK2　1H61－19・20グリッドに位置し、平面プランはやや角張った楕円形の土坑である。上端長径233cm・上端短径210cm、下端長径93cm・下端短径58cm、地山からの最深度は50cmである。底面は中心部が溜録状に低くなり若干の凹凸となり、側壁の東および南東側は緩く傾斜する。覆土は2層の黒褐色土が主体を占め、上面に明褐色土が堆積する。2層は基本層序の第Ⅱ層に近似するが、少量の炭化物粒を含みややしまりがある。2層から縄文土器が2点出土している。

SK3　1H94－5グリッドに位置する不定形の土坑である。東側は調査対象外で土坑全体の平面プランは不明である。確認できた範囲では、上端長径92cm・上端短径47cm・下端長径106cm・下端短径52cm、地山からの最深度は52cmである。確認面から「ハ」の字状にやや広がりをもつフラスコ状土坑に近似する。

SK6　1I45－2グリッドに位置する不整楕円形のフラスコ状土坑である。上端長径185cm・上端短径127cm・下端長径120cm・下端短径65cm、地山からの深度は68cmである。南側の側壁が緩く北方向に傾斜し、底面も北西方向に入り込んでいる。底面はフラットで、表面はガチガチにしまっている。覆土は小ブロック単位で帯状に東から西方向にやや傾斜して堆積するものが多いが、主体となる土層は3層の暗灰褐色砂質土で若干さらさらしている。確認面直上付近より13点の縄文土器が出土している。

SK7　1I44－13・14グリッドに位置する不整楕円形の土坑である。上端長径190cm・上端短径105m・下端長径93cm・下端短径77cm、地山からの深度は36cmである。土坑の北東と南西側は緩く傾斜し、中心部は方形に近い形を呈している。覆土は褐色土と暗褐色土の2層であるが、掘込みが不明瞭でサブトレンチで立ち上がりを確認した。

SK8　1I25－25グリッドに位置する半円形の土坑である。土坑の南側は攪乱を受け全体の平面プランは不明である。確認できた範囲では、上端長径105cm・上端短径70cm・下端長径60cm・下端短径35cm、地山からの深度は22cmである。

SK9　1H73－21・22グリッドに位置する不整形の土坑である。西側は道路部分で調査区外で、土坑全体の平面プランは不明である。確認できた範囲では、上端長径200cm・上端短径94cm・下端長径90cm・下端短径36cm、地山からの最大深度は53cmである。

（3）集石土坑（図版8、写真図版40－1・2）

1H54－25、1H55－21グリッドに位置する。土坑は礫群を囲むように長径335cm・短径265cmの不整円形プランを呈し、遺構確認面からの深さは24cmである。礫と礫の間には、炭化物を含む黒褐色土が堆積している。礫群は径170cm前後の円形プランを呈し、個々の礫は10cm前後の偏平なものが多い。総数1348点の礫が出土し、明らかに火熱を受けた痕跡が認められるもの593点、破砕もしくは火熱をうけたと思われるもの634点で計1227点、全体の91％がなんらかの火熱に関連する痕跡があった。このような様相を呈する集石土坑は、早期に帰属するものが多いが、本遺構は遺物を全く伴わず時期は不明である。

（4）配石遺構（図版8、写真図版40－3）

1I45－3グリッドに位置する。北東側には礫が検出されず、長径110cm、短径100cmの馬蹄形を呈している。第Ⅲ層黒褐色土中で礫の配列が確認されたが、土坑など遺構に伴う落ち込みや焼土は確認できなかっ

た。礫は人為的な加工や被熱した痕跡はなく、すべて自然石である。遺物は出土していないため、時期は不明である。本遺構の南東約2mより注口土器（164）が単独出土しているが、何らかの関係があるものと考えられる。

（5）焼　土（図版8、写真図版41）

4か所の焼土を検出したが、いずれも調査区東側の一段低位の平坦地に所在する。4か所とも明確な火床は確認されず、焼土2はとくに残存状況が悪く深さも明確に計測できなかった。焼土4は土器集中区5の範囲内に所在し住居跡に関連すると考えられるが、ほかの焼土は単独の検出である。

焼土1　I145－19グリッドに位置し、平面プランは楕円形を呈する。長径90cm・短径65cm、深さ23cmを測る。東側にピットが2基検出されているほか、遺構は検出されていない。焼土は細かい炭化物を含み、明赤褐色を呈している。焼土内からは遺物は出土していない。

焼土2　I135－12グリッドに位置し、平面プランは楕円形を呈している。焼土の範囲は長径130cm・短径90cmであるが、残存状況は不良で淡い赤褐色を呈しているが明瞭ではなかった。炭化粒や火床も確認されなかった。

焼土3　I146－1グリッドに位置し、平面プランは半円形を呈する。長径80cm・短径50cm、深さ12cmを測る。焼土は赤褐色を呈し、ややしまりが弱い。焼土内より体部が欠損した縄文土器の底部が検出された（196）。焼土の周辺からはピットなどの遺構は検出されなかった。

焼土4　I125－13グリッドに位置し、平面プランは楕円形を呈する。長径130cm・短径70cm、深さ18cmを測る。焼土は赤褐色を呈し、炭化物を若干含んでいる。北側の端には胴部を欠損した縄文土器底部が検出された（197）。焼土の周辺からは多量の土器片が検出され、小柱穴と思われるピットも数基検出された。床面は確認できなかったが、住居跡に伴う地床炉と考えられる。

（6）ピット（図版9、写真図版42・43）

分布は調査区全体に見られるが、東側下段の平坦面に集中する傾向がある。ここでは、土器集中区5に関連する掘込みのしっかりとしたピットについてのみ記述する。

P 50　I125－8グリッドに位置し、長径35cm・短径25cm、深さ25cmの不整円形を呈している。覆土は2層に識別され、上層は黒褐色土で細かな地山粒が混入し、しまっていない。下層は明黄褐色粘土質土の地山に近似するが、細かな黒褐色粒子が混入し、堅くしまっている。

P 54　I125－14グリッドに位置し、長径30cm・短径25cm、深さ18cmの不整円形を呈している。覆土は2層に識別され、上層は黒褐色土で細かな地山粒が混入し、下層は明黄褐色粘土質土の地山に近似するが、細かな黒褐色粒子が混入する。上下層ともガチガチに堅くしまっている。

P 55　I125－19グリッドに位置し、長径30cm・短径25cm、深さ20cmの不整円形を呈している。覆土は3層に識別される。1層は黒褐色土で、細かな地山粒が混入するがしまっていない。2層は明黄褐色粘土質土の地山に近似するが、細かな黒褐色粒子が混入し、堅くしまっている。3層は東側壁面に堆積し、第Ⅳ層に近似するがやや暗い土層である。

P 57　I125－19グリッドに位置し、長径32cm・短径25cm、深さ48cmの楕円形を呈している。ほかのピットと比べやや深く、土層セクションで柱跡が確認できた。1層は黒褐色土で、細かな地山粒が混入し、ややしまっている。2層は明褐色土でよくしまっている。

（7）性格不明遺構（図版8、写真図版42）

掘り形や土層の堆積の仕方が安定せず不明瞭で、近・現代の遺物が出土している遺構などを一括した。

SX5　I162－5・I163－1グリッドに位置する不整形な土坑である。上端長径117cm・上端短径93cm、下端長径153cm・下端短径120cm、地山からの最深度は112cmである。底面中央部にはさらに径55cmの円形の落ち込みがある。遺構確認面の開口部よりも底径の方が大きく、形態的にはフラスコ状の土坑となる。底面より数石のような状態で直径20～30cm前後のやや偏平な礫が多く出土した。覆土は黒褐色土の単層で、ややしまりがなく柔らかい。覆土中位より近世陶器・鉄滓が数点出土していることから、近世以降の土坑の可能性が高い。

第3表　堂付遺跡　主要遺構一覧表

遺構名	グリッド	長径cm	短径cm	深さcm	備考
土器集中区1	1H54・55	800	800		土器　370点
土器集中区2	1I34	300	250	15	土器　112点
土器集中区3	1I44・45	650	450	50	土器　232点
土器集中区4	1I35	500	450	30	土器　94点
土器集中区5	1I25	700	(350)	20	土器1,061点
土器集中区6	1I15	250	250	25	土器　101点
SK1	1G99－9・10	96	83	30	不整形
SK2	1H61－19・20	上端233 下端 93	上端210 下端 58	50	楕円形
SK3	1H94－5	上端 92 下端106	上端 47 下端 52	52	不定形
SK6	1I45－2	上端185 下端120	上端127 下端 65	68	不整楕円形
SK7	1I44－13・14	上端190 下端 93	上端105 下端 77	36	不整楕円形
SK8	1I25－25	上端105 下端 60	上端 70 下端 35	22	半円形
SK9	1H73－21・22	上端200 下端 90	上端 94 下端 36	53	不整形
集石土坑	1H54－25 1H55－21	礫群170 土坑335	礫群170 土坑265	24	不整円形 礫総数1,348点
配石遺構	1I45－3	110	100		馬蹄形
焼土1	1I45－19	90	65	23	楕円形
焼土2	1I35－12	130	90		楕円形
焼土3	1I46－1	80	50	12	半円形
焼土4	1I25－13	130	70	18	楕円形
ピット50	1I25－8	35	25	25	不整円形
ピット54	1I25－14	30	25	18	不整円形
ピット55	1I25－19	30	25	20	不整円形
ピット57	1I25－19	32	25	48	楕円形
SX5	1I62－5 1I63－1	上端117 下端153	上端 93 下端120	112	不整形

6. 遺　物

倉付遺跡の出土遺物は平箱35箱で、奈良・平安時代の土師器・須恵器片が8点出土している他は全て縄文時代の所産である。縄文時代は早期から晩期まで各期の土器が出土しているが、大半は後期の土器である。遺物のほとんどが包含層から出土したもので、遺構に伴うものは極く僅かであった。縄文土器の出土量は平箱20箱、石器類は15箱である。

A. 縄文土器（図版10～14、写真図版45～48）

出土土器の傾向を概観すれば、後期中葉の加曽利B式併行の土器が中心をなし、ほか各期の土器が散発的に出土している。また、粗製土器の体部片（無文や縄文のみ）や著しく磨耗した土器や文様観察のできない細片が多く、時期不明の土器が多かった。検出された土器の大半が器形や全体の文様構成を知り得ることができない小片であるため本報告では、以下のように時期の判別可能な土器を早期から晩期までを第Ⅰ～Ⅴ群、それ以外の粗製土器及び土器底部を第Ⅵ群に大別した。さらに土器の胎土・文様構成などの類似・共通する属性や形態で細分したが、これは細かな時期及び型式的な関係を示すものではない。

第Ⅰ群土器……縄文時代早期に帰属する土器

1類—平行沈線が施される土器

2類—横位・斜位の沈線文と刺突文が施される土器

3類—網目状の細沈線文が施される土器

4類—列点刺突文が施される土器

5類—条痕文が施される土器

6類—外面に縄文、内面に条痕文が施される土器

7類—格条体圧痕文が施される土器

8類—無文の底部土器

9類—撚糸文を施す土器

第Ⅱ群土器……縄文時代前期に帰属する土器

1類—撚糸側面圧痕文が施される土器

2類—非結束羽状縄文が施される土器

3類—ループ文が施される土器

4類—羽状縄文が施される土器

5類—連続刺突による列点文が施される土器

6類—所謂コンパス文が施される土器

7類—細い連続爪形文が施される土器

8類—細い隆起平行線文が密接に施される土器

第Ⅲ群土器……縄文時代中期に帰属する土器

1類—口唇部が肥厚し、口縁部に文様帯が集中する土器

2類—口縁部に二本一組の隆帯が付される土器

3類—半截竹管により半隆起線文や爪形文が施される土器

4類―キャリパー形を呈し、頸部に剣先文が施される土器

5類―隆帯を主体とした文様の土器、火焔型土器

6類―口縁部に横位の隆帯を付し、頸部が無文帯となる土器

第Ⅳ群土器……縄文時代後期に帰属する土器

1類―頸部と胴部の境に隆帯を巡らせ、橋状把手が付される土器

2類―櫛歯状工具による条線文が施される土器

3類―口縁から頸部にかけてS字や渦巻状の把手が付される土器

4類―波状口縁直下にS字などの隆帯が付される土器

5類―器面の内外面を入念に研磨し、平滑な精製土器の胴部

6類―縄文地文の上に平行沈線が描かれ、沈線を区切るように短沈線や括弧文が施される土器

7類―よく研磨された器面に多条の平行沈線文が施される壺形土器

8類―平行沈線文間に斜行短沈線が充填される土器

9類―口縁部の内面に沈線などの文様が施される浅鉢土器

10類―その他、上記に属さない土器

第Ⅴ群土器……縄文時代晩期に帰属する土器

1類―頸部に沈線文が施される土器

2類―網目状撚糸文が施される土器

第Ⅵ群土器……粗製土器及び時期不明底部を一括

1類―口縁及び胴部

2類―底部

（1）第Ⅰ群土器（1～48）

縄文時代早期中葉の貝殻・沈線文系土器から、後葉～終末の条痕文系土器、縄文・条痕文系土器を一括して本群とした。基本的には田戸下層から田戸上層・常世式土器に併行する時期と、茅山上層式に併行する時期に大別されるものと考えられる。

1類（1～9・11）　沈線文系の土器である。

1類a（1～5）　比較的幅広の平行沈線文を器面全体に施すものである。口縁部は緩やかな小波状を呈し、口唇端部には刺突文が施される。沈線の施文は、2本一単位の平行沈線でやや幅のある棒状工具2本を束ねて、同時に器面に押しつけ文様を描いているものと考えられる。いずれも内面は丁寧にナデ調整が行われ、胎土には植物繊維の混入が認められるものがある。

1類b（6～9・11）　やや細い沈線が施されるもので、一見条痕文系土器に類似するが内面のナデ調整などから本類とした。

2類（10・12～17）　横位・斜位の平行沈線文を施し、沈線間若しくは区画した内部を刺突するもの。

2類a（10）　やや細い沈線を斜位に施し、組み合わせにより菱形状の区画を作り出し、その中に沈線と同一と思われる丸棒状工具による刺突が行われるものである。岩原Ⅰ遺跡第2群Ⅰ類Bに類例がある。

2類b（12～14）　2本一単位の平行沈線を基軸として、沈線に沿って斜位方向からの連続刺突が入るものである。12・13は胴部から頸部にかけての破片で、口縁部が外反し開き気味となる器形と推測される。内面のナデ調整も入念でシャープなつくりである。

2類c（15～17）　3本同時施文具による平行沈線文が幾段か構成され、この沈線間に一単位3本の刺突

が充填される。沈線と刺突の施文は、一単位の幅や施文状況から同一工具によるものと思われる。口縁端部の内外面には連続の刻目が施される。文様の構成などから常世式併行の時期と思われる。

3類（18～20） 綱目状の細い沈線を先の尖った棒状工具で器面全体に描くもので、口唇部には刻みが施されるものである。

4類（21～26） 棒状工具による列点状刺突文が施されるグループである。21の口縁端部には刻目、22には孔が見られる。

5類（27·28·38～41） 内外面とも条痕文が施文されるものである。器壁が薄く、繊維を少量含むが焼成良好で堅緻なものが多い。38～41は擦痕により条痕が不明瞭である。

6類（29～36） 外面に縄文、内面に条痕文が施文される縄文・条痕文土器を本類とした。繊維を少量含み、胎土はやや粗雑なものが多い。29の口唇部には絡条体圧痕、30の口唇部には刺突による刻目状の文様が施されている。31～36では外面の条痕文が明瞭に残るが、29·30の口縁部付近の内面についてはナデ調整により条痕が不明瞭となる。

7類（37） 外面に絡条体圧痕文、内面に条痕文が施される土器である。1点の出土で、口唇部にも絡条体圧痕が施される。

8類（42） 乳房状の尖底土器の底部である。胎土に少量の繊維を含み、にぶい黄褐色を呈していることなどから1類aと類似するものである。

9類（43～48） 撚糸文を施すものを一括した。本類は胎土や文様から同一個体と考えられる。46は底部に近い破片で撚糸文と沈線文が施され、47は丸底の底部片で沈線文のみ施文されている。底部中央には、焼成前に開けられた有孔痕が観察される。48は撚糸文を羽状に施したものである。これらは、東北地方南部の縄文条痕系土器群の影響を受けた早期末の土器である。

（2）第Ⅱ群土器（49～65）

前期初頭の花積下層式から終末の十三菩提式併行までであるが、土器の量は晩期に次いで少ない。当該時期の土器分布状況は、早期と類似しIG区南側より多く出土している。

1類（49） 1点のみである。植物撚糸（原体）側面圧痕による隆手状文を成すもので、連続刺突が施される。胎土はやや不良であるが、繊維を少量含み、よく焼き締まっている。花積下層式併行と思われる。

2類（50） 器面全体に撚の異なる2種類の原体を交互に施文し、羽状を描く非結束羽状縄文である。口唇部には、器面に直角に半截竹管状工具による爪形刺突が巡る。胎土に多量の植物繊維を含み、金雲母も含有される。

3類（51·52） 原体末端につくられた環の部分のみを連続して施文し、ループ文を描く。2点のみの出土である。

4類（53～57） 植物繊維を多量に含み、器面全体に羽状縄文を施すものを本類とした。53·54は直線的に、55は外反気味に立ち上がる頸部から口縁部の破片である。

5類（58～60） 連続の刺突により列をなすものである。58はやや円形状の刺突列となり、内面は格子状の沈線が施される。巻町新谷遺跡［前山1994］で類似する土器が多数出土している。

6類（61～63） 細い竹管状工具により文様を描くもので、3点とも同一個体である。山形の波状口縁を呈し、口縁端部は調整され角ばっている。文様は口縁部に2本の沈線文間にコンパス文が配され、沈線文下はRL縄文が施される。黒浜式に併行すると考えられるが、繊維の混入は不明瞭である。

7類（64） 細い竹管状工具による半隆起線に連続して爪形文を施すもので、胎土に微細砂粒を多量に含

有する。十三菩提式併行の土器と思われるが、1点の出土で全体の器形は不明である。

8類（65）　頸部に細い竹管状工具による隆起平行線を密接施文し、文様帯を構成している。口唇頂部には連続して刺突が施される。頸部と胴部を区画する隆帯にも刻目が施される。鍋屋町遺跡［室岡ほか1960］などで類似する土器群が見られる。

（3）第Ⅲ群土器（66～94）

縄文時代中期に帰属するものを一括した。前葉の土器は関東・中部高地の影響を受けたものが数点出土しているが、北陸系の新崎式の土器が多い。中葉及び後葉の土器は在地系や東北地方の影響を受けた土器群が多い。

1類（66・67）　関東及び中部高地系の影響を強く受けた土器である。2点とも口唇部が肥厚し、波状口縁を呈するものである。66は口縁に沿って扁平な棒状工具による連続角押により沈線を描くもので、頂部直下に三角形隙刻をつくりだしている。67は頸部無文帯であるが、大きめの環状突起と太い隆帯・沈線が施される。新巻類型に近似する土器である［山口ほか1989］。

2類（68・69）　頸部に2本一単位の粘土紐を縦位に貼付け、扁平な隆帯となる土器である。貼付け後、表面と同様にRL縄文が施文される。同一個体で、胴部文様などは不明である。長峰遺跡第Ⅰ群12類［室岡ほか1984］に類似する土器が見られるが、東北地方の大木7b式から8a式の影響を受けた土器と考えられる。

3類（70～87）　半截竹管により半陰起線文（以下「半截竹管文」と略す）や爪形文を描きだす、北陸の新崎式併行の土器を一括した。

3類a（70～73）　半截竹管文を配し、爪形文を施文するものである。70は半截竹管文と爪形文が交互に施文されるもので、爪形と爪形の間隔は5～6mmとゆったり気味である。71は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢で、口縁部は無文帯で頸部に3本の半截竹管文が巡り上段に連続の爪形文が施される。半截竹管文と胴部LR縄文の間に、器面に対して垂直に竹管文が横位に連続刺突されている。71・72とも押し引きによる爪形の間隔が密接である。73は横位の半截竹管文や爪形文と縦位の半截竹管文が交わる部分に、小突起状の貼り付けがなされている。

3類b（74～82・86）　口縁部から頸部にかけて数条の半截竹管文により文様が描かれているもので、胴部は縄文を施した後に直線や曲線で文様を描き出している。82は横位の半截竹管文に沿って連続して三角形のキザミが施される。86は「し」字状に垂下する半截竹管文が組み合った文様で、胎土に微細な石英を多く含み、茶褐色を呈している。深沢式土器に近似する土器である。

3類c（83・84）　縄文地に半截竹管文によりB字状文などを描いているものである。いずれも胴部破片で、押し引きは浅く平面的である。

3類d（85・87）　頸部で「く」の字状に外反し、四単位の小突起が付される波状口縁である。RLの縄文地文に半截竹管文が直線的に縦横に描かれる。小突起間下には厥手状の貼付隆帯が四単位付されるものと思われる。同一個体である。

4類（88）　キャリパー形を呈し、文様帯は口縁部と胴部に見られ頸部が無文帯となる。口縁部には刻先文が描かれ、波状口縁となっている。胴部は縄文地文を施文後に沈線により文様が描かれている。大木8b式の古手土器である。

5類（89～93）　隆帯により文様が構成される、いわゆる火焔型土器群を本類とした。89は鋸歯状の小突起が口縁部に施され、頸部に袋状突起が付されている。脇には区画内に斜行の沈線が充填される楕円区

画文が施されている。口縁部内面にはおこげの付着が認められる。90・91は胎土や文様などから同一個体で、文様は基隆帯を主要モチーフとし、内面は入念なナデ調整が行われている。90は逆U字状文、91は右斜方向の渦巻文が施されて隆帯に刻みが入る。

6類（94） 頸部が内湾し、ややキャリパー形を呈している。口縁には4単位の突起があり、各間に小突起が2つずつ付される波状口縁である。口辺部には口縁に沿って一条の隆帯が巡り、さらに一条4分割して隆帯が付されている。頸部は無文帯で、胴部とは二条の隆帯により区画される。胴部の地文は縄文で、粘土紐の貼付けによる曲線の懸垂文により4単位に区画されている。

（4）第Ⅳ群土器（95～165）

縄文時代後期に帰属するものを一括した。後期初頭の三十稲場式から三仏生式までの土器片であるが、主体は後期中葉である。

1類（95～97） 頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、頸部が無文帯となり橋状把手が貼付される、いわゆる三十稲場式土器を本類とした。95は長胴の深鉢で、頸部無文帯で橋状把手が付されている。胴部はやや太めの棒状工具を上方から下方に刺突している。頸部のくびれが弱く、蓋受けをさほど意識しない形態は、三十稲場式でも古い様相を呈する土器とされている［田中1989］。96は口縁部が「く」の字状に強く外反する蓋受けの形態を呈し、四単位の橋状把手が付されている。胴部は全面に半截竹管のようなもので器面の粘土を盛り上げた所謂「突瘤文」が施されている。97は外反する頸部の破片で、無文帯下に刻みを有する隆帯が巡り、胴部は縄文地である。

2類（98～110） 曲線や直線の鋸歯状工具による条線文が施文されるものである。106・108～110は直線で、98～105・107は曲線的に描かれ、98・99の口縁部内側には一条の平行沈線が巡るものである。

3類（111～113） 波状口縁の頂上部から頸部にかけて渦巻状や「S」字状の突起が付されるものを本類とした。111は口縁部から下がる渦巻状突起の沈線と隆帯が口縁に沿って巡り、その直下に磨消縄文と4本の沈線が巡る文様帯が施されている。112・113はS字状突起が付されていたが、一部剝落している。

4類（114・115） 波状口縁直下に粘土紐による貼付けが付されているものである。114はS字状を呈する隆帯で、内外面とも入念に研磨される。115は「ノ」字状の隆帯で、頸部は磨消縄文と沈線の文様帯を構成する。

5類（116～118） 器面の内外面を入念に研磨した精製土器を本類とした。116は緩やかな波状口縁を呈し、口縁部が逆「く」の字状に内湾する。117・118は入念な研磨の後に平行沈線と短沈線による文様が描かれている。いずれも焼成良好で、色調は黒褐色を呈し、器面は平滑である。

6類（119～137） 加曽利B1式的土器様相を呈するもので、文様は深鉢胴部上半部に集中する。縄文を地文とし、一条または二条一単位の平行沈線文が巡り、「S」字状の短沈線や括弧状の区切文が付されている。胴部下半はナデ調整による無文帯となる。137は縄文地の上に3本の短沈線を組み合わせ、スタンプ状の文様が施されている。柏崎市野崎遺跡に類例が見られる［甘粕ほか1984］。

7類（138～140） 研磨された器面に多条平行沈線文が描かれているものを本類とした。138・139は六条一単位の平行沈線が巡り、逆「の」の字状の沈線が施される。内面は未調整で、壺形（注口）土器の肩部分の破片である。関東の加曽利B1式併行と考えられる。

8類（141・142） 研磨された器面に平行沈線が巡り、沈線間に交互の斜行短沈線が充填される。

9類（143～153） 内面口縁部に沈線が巡る浅鉢を本類とした。143～148は同一個体で、内面口唇部に受け口状の段を有し、沈線と沈線の間の半隆起線には刻目が施される。153の口唇部には棒状工具による円

形の刺突が施され、外面にも四条の沈線が巡っている。いずれの土器も内外面は入念に研磨され、焼成良好で堅緻である。

10類（154～156）　頸部に一条の沈線が巡り、口縁部は縄文地で沈線下は研磨された無文帯となる深鉢である。緩やかな波状口縁を呈し、つくりは丁寧である。

11類（157～161）　細かな縄文地に直線又は幾何学的な沈線が描かれるものを本類とした。157・158は幅の太い沈線で施文される口縁部から胴部上半の破片で、158には磨消縄文の技法が施されている。

12類（162・163）　集合沈線を施すものを本類とした。同一個体である。やや外反気味に立ち上がる深鉢で、口縁部は無文帯となる。頸部は横位の沈線区画により二段の文様構成となり、上段は数条の細い集合沈線帯、下段は二条の波状沈線となる。胎土などから本群としたが、文様や文様構成などから弥生土器の可能性もある。

13類（164・165）　その他の土器を本類とした。164は注口土器で、口縁部に2組の突起がありS字状の粘土紐貼付文が施される。胴部の最大幅を測る場所に沈線が1本巡り、これを境に下半部は無文帯となる。上半部は波状に沈線が施され、その間に細かなRL縄文が充填される。165は緩やかな波状口縁を呈し全面にRL縄文が施文されるが、口縁部はナデ調整により無文帯を造りだしている。底部から直線的に立ち上がり胴部中央で最大幅となり、頸部でしまり再び外反し口縁部に至る器形であるが、全体的に丸みのある深鉢である。

（5）第Ⅴ群土器（166～171）

縄文時代晩期に帰属する土器である。

1類（166・167）　浮線文土器で、2点の出土である。口縁部は無文帯で、頸部に数条の沈線が巡り、166は口唇部が摘まれて先細りとなり、内面に一条の沈線が巡る。2点とも内外面は丁寧に調整され、平滑で薄手である。大洞C2式からA式併行の時期と考えられる。

2類（168～171）　網目状撚糸文が施される土器である。頸部は無文帯でくびれ、口縁部と胴部に網目状撚糸文が施される。口縁は山形の小突起が付され、やや肥厚となる。いずれも同一個体で、成形や焼成は入念な土器である。

（6）第Ⅵ群土器（172～202）

粗製土器及び底部の土器を一括した。

1類（172～192）　口縁部若しくは胴部片を本類とした。

1類a（172～181）　縄文が施される土器である。172・173は原体の縄目の細かいもので、174・175は太い縄文となっている。いずれもLR縄文である。181・182は口縁に沿って一条の沈線が巡り、沈線下にRL縄文が施される。

1類b（182～188）　撚糸文が施される土器である。182・183は口縁部無文帯で、頸部に綾絡文が描かれ胴部は無節の縄文が施される。

1類c（189・190）　撚の異なる原体を使用して羽状縄文をつくりだす土器である。LR撚りの節は大きく、RL撚りの節は細かくなっている。境に結束回転による綾絡文が施されている。本群としたが、縄文前期に帰属するものと思われる。

1類d（191・192）　無文土器である。192は小型の深鉢で、口唇部を摘み口縁に沿ってナデ調整が施されている。器面は荒く調整され、胎土の砂粒が上下に移動し条線を描いている。

2類（193～202・206）　底部の土器を本類とした。圧痕は所謂網代圧痕と笹の葉と推測される圧痕の2種

類に大別されるが、図化しなかったが202のごとく無文の底部が圧倒的に多い。網代圧痕は194のように経条・緯条とも一条超え一条潜る規則的に編まれているものや、195の経条・緯条とも一条潜り二条超えるもの、199のように経条が二条超え一条潜り、緯条が一つ超え二条潜るものなどが観察できる。また、198のように経条を基条として、右左斜位に二条組み合わせて三条で編んでいるものもある。206は台付土器の脚部で、胎土は緻密で焼成も良好で堅緻である。

B. 土製品（図版14、写真図版48）

（1）土製円板（203・204）

器面が荒く不明瞭であるが縄文を地文とし、幅広の沈線文が施文される土器の破片の周縁を丸く打ち欠き作出したものである。図化した2点のみの出土である。

（2）土 偶（205）

土偶の胴部下部か体部と思われる。腰部分はややくびれ、器面中央部には丸棒状工具による刺突文が1点あり、臍を表現しているようである。周縁はヘラ状工具による5本の連続押引きが施され、沈線文内はキャタピラ状の文様を呈している。胎土は灰黄褐色を呈し、焼成は良好で厚さ2.7cmを計る厚手の板状土偶である。重さ107gである。

C. 石 器（図版15～21、写真図版49～53）

堂付遺跡から出土した石器類は、合計107点である。これを剝片石器・石錘・磨石類に大別し、さらに剝片石器は各器種ごとに分類を行った。石器の出土分布状況は第Ⅲ層（遺物包含層）を中心に遺跡のほぼ全域に散在して出土しているが、遺構に伴うものはない。出土した石器の分布範囲と土器集中区の分布がほぼ一致していることから、時期的には後期に属する石器が多いものと思われる。

器種別出土点数・器種別分布状況は第3表・第13図に示した。集計は完形品・欠損品とも1点と数え、接合資料は接合したものを1点とし、観察表には「接完」と記入した。

第4表 堂付遺跡 石器器種別一覧表

器種	石鏃	ピエス・エスキーユ	打製石斧	磨製石斧	両面加工石器	不定形石器	石錘	磨石類	石皿	合計
出土数	10	3	52	6	2	14	13	6	1	107
(%)	(9.3)	(2.8)	(48.6)	(5.6)	(1.9)	(13.1)	(12.1)	(5.6)	(0.9)	

（1）石 鏃（1～10）

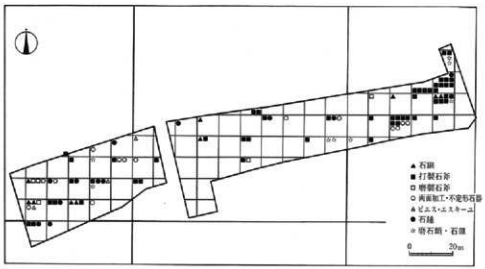
小型で薄く、先の尖った石器を石鏃とし、未成品4点を含め10点出土している。完形品6点は、すべて凹基無茎鏃に分類される。これらを基部形態により、

A類：脚部が短く抉りが小さいもの（4点）

B類：脚部が長く抉りが大きいもの（2点）

に分類した。これを、城之腰遺跡の分類で使用した「抉り度」で示せば、A類は平均0.24、B類は平均0.59となり、両者に2倍以上の差がみられる。側縁の形状では、曲線的で丸味をもつもの（1・2）、直線的かやや内湾気味となるもの（3・4・6）、先端部でやや内湾し脚部に沿って外湾するもの（5）、に分かれる。1は尖頭部を、5は尖頭部と片方の脚部をそれぞれ欠損した状態で出土している。出土分布状況は、調査区の西

側に5点、東側の土器出土集中区に3点まとまっている。なお、未成品4点は、いずれも西側1G98区付近から出土している。石材はガラス質安山岩・頁岩が各3点、凝灰岩・緑色凝灰岩・チャート・黒曜石が各1点使用されている。



第13図　堂付遺跡　石器器種別出土分布図

(2) ピエス・エスキーユ (11 ～ 13)

向かい合った二辺の縁辺部に剥離痕が観察できる剥片をピエス・エスキーユとした。比較的小型の剥片が3点出土し、いずれも石材は鉄石英が使用されている。13は剥離痕の一辺が不明瞭であるが、他2点と同質石材であることや形態面からピエス・エスキーユに含めた。3点とも、調査区の西側から出土している。

(3) 打製石斧 (14 ～ 65)

剥片あるいは礫を打ち欠いて作った斧形石器である。出土した打製石斧は、石器器種の48.6%に及び、石器類の中心的な遺物であり、この遺跡を特徴づけるものである。打製石斧の分類は、一般的には短冊形・撥形・分銅形の各形態が用いられているが、この遺跡では分銅形が出土せず、また比較的撥形に片刃が多いという偏りがみられた。そこで、石器の素材から剥片と偏平礫とに二分し、さらに剥片を形態面と刃部により短冊形をA類、撥形をB類とし、特に片刃であるものをC類とした。C類については、形態面でも分類し、短冊形をa類・撥形をb類とした。D類については、偏平礫を素材にしているものとした。

第5表　堂付遺跡
打製石斧分類別出土点数

形態	小型	中型	大型	合計
A類	7	16	0	23
B類	0	5	1	6
Ca類	0	7	1	8
Cb類	1	9	0	10
D類	0	1	4	5
合計	8	38	6	52

A類：剥片を素材とし、短冊形であるもの。(14 ～ 36)

B類：剥片を素材とし、撥形であるもの。(37 ～ 42)

Ca類：剥片を素材とし、片刃で短冊形であるもの。(43 ～ 51)

Cb類：剥片を素材とし、片刃で撥形であるもの。(52 ～ 60)

D類：偏平礫を素材としているもの。(61 ～ 65)

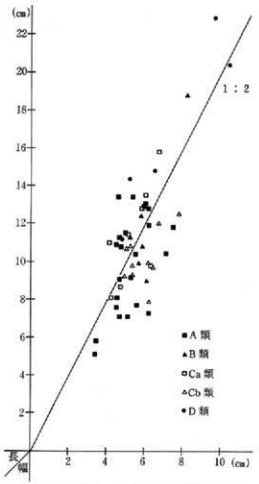
長さは平均11.3cmで、全体としては中型のものが多く、±3cmの範囲（8 ～ 14cm）に73.1%が含まれる。8cm以下の小型は15.4%、14cm以上の大型は11.5%である。長幅比はほぼ2：1に集まり、10cmを境に大きなものはやや幅が狭くなり、小さなものは幅が広くなるという傾向が見られる（第14図）。

分類別出土点数を第4表に示したが、A類が23点（44.2%）ともっとも多く、Ca・Cb類は合計すると18

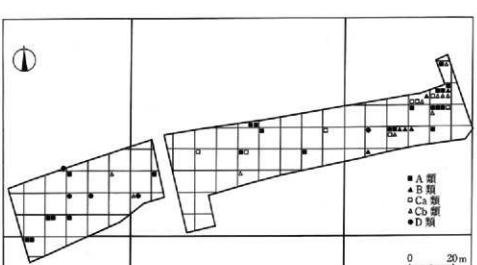
点（34.6%）となり、A類の出土点数に続く。なお、形態面だけに着目すれば、短冊形（A・Ca類）は59.6%、撥形（B・Cb類）は30.8%である。39・41・45・50の4点は同質の石材を使っており、41・45は接合できたことから、いずれも同一石核から剥離されたものと考えられる。

また、45・50は大型剥離で刃部を作り出し、自然面との急角度を活かした片刃となっている。29は背面に敲打・摩擦痕が観察されることから、磨製石斧の製作途中から打製石斧に転用したものと考えられる。29・43は刃部の一部が欠損しているが、残りの部分には光沢のある磨痕が観察される。

D類は5点であるが、このうち4点は調査区西側の1Gグリッド付近に集中している。西地区では縄文時代早・前期の土器が主に出土していることや、64・65のような大型の打製石斧の形態などから、D類は時期的に古い様相を呈するものと考えられる。

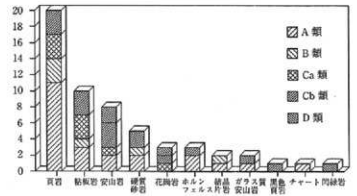


第14図　堂付遺跡　打製石斧分類別長幅分布図



第15図　堂付遺跡　打製石斧分類別出土分布図

その他、磨耗痕が見られるものがあり、18・23は背面の刃部に、30・31などは両面の刃部に、60は腹面の一部に観察することができ、打製石斧の23.1％がこれにあたる。D類の5点は、長さが平均16.7cm、重さが平均680.7g（全体では平均202ｇ）と大型である。64が最大で長さ22.9cm、重さ1.19gを測り、石材は閃緑岩を使用している。いずれも簡単な調整で仕上げられており、



第16図　堂付遺跡　打製石斧石材別出土数

中・大型剥離で刃部と側縁部を整え、両面には自然面を1/2以上残している。63・64・65には、側縁部に敲打痕が観察できる。出土分布状況は遺跡全体に散在しているが、特に東側の1134・35・45・53グリッドからは集中して出土している。これは土器集中区の分布状況とほぼ一致している。また、西側はA・D類が多く、B類は出土していない（第15図）。使用石材は11種類を数える。頁岩がほぼ半数（20点）を占め、粘板岩（10点）、安山岩（7点）がこれに続く（第16図）。

（4）磨製石斧（66～71）

剥離・敲打などによって成形し、研磨調整を加えて仕上げられた斧形石器である。6点と出土数は少なく、完形品3点、接合資料1点、破損品2点である。66は石材に蛇紋岩を使用した、長さ3.7cm、幅0.8cmの小型磨製石斧である。側面には擦切り痕と思われるわずかな段が認められ、擦切石斧と推定される。刃部には磨耗痕が観察される。69は基部に稜をもたないが、断面はいわゆる隅丸長方形で、側面はやや不明瞭であるが、研磨され光沢をもった定角式磨製石斧に近似する。刃部は偏刃を呈し、使用による刃こぼれが観察できる。石材には蛇紋岩を使用している。67・71は基部あるいは刃部に剥離痕を残し、全面を敲打調整によって仕上げてある。67は基部と思われる部分を剥離し刃部とする製作途中の未成品とも考えられるが、現状で使用した痕跡が観察されることから完成品とした。なお、71は中央部で折れたものを接合した資料である。使用石材は安山岩である。

（5）両面加工石器（72・73）

大型厚手の剥片を素材とし、主に交互剥離によって縁辺の側面観がジグザグ状を呈するものを両面加工石器とし、2点出土している。72は縁辺部に小・中剥離によって刃部を円刃状に作り出しており、片面には使用による磨耗痕が観察される。打製石斧の欠損、または再利用の可能性も考えられる。73は自然面を多く残し、刃部と考えられる縁辺部は大型剥離で片刃を作り出している。

（6）不定形石器（74～81・83・84・86・87）

定形石器以外の二次加工がある剥片石器を不定形石器とし、12点出土している。76は側縁に抉りを入れ、一部に鋸歯状剥離で刃部を作り出している。77・79は鋭利な先端部をもち、これに続く側縁に二次加工を施している。84は横長剥片を素材とし、腹面の縁辺に連続した鋸歯状剥離をもつ。石材は頁岩7点、ガラス質安山岩3点、粘板岩1点、ホルンフェルス1点である。

（7）石　錘（88～100）

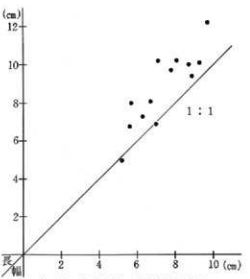
偏平礫の縁辺部に打欠きによる剥離またはつぶしの加工を施し、抉りを作り出している錘具である。出土した13点すべては、いわゆる礫石錘であり、抉りの作り出し部位は相対する縁辺の2か所に剥離・敲打

が施されている。長さ10cm、幅8cm前後の中型程度で、長幅比は1.2：1の範囲に集まり、楕円に近い形を呈するのが多い（第17図）。

出土分布状況は、西側1G区から半数以上の7点が出土しており、打製石斧が多数出土した東側1I区からは1点しか出土していない。使用石材は安山岩10点、砂岩2点、花崗岩1点である。

（8）磨石類（106～111）

表面に磨痕、凹痕、敲打痕が認められる礫を磨石類とし、計6点出土している。分類は表裏面あるいは側縁・稜上に磨面があるものを磨石A類（4点）、表面に凹痕があるものを凹石B類（1点）、A・B類の痕跡を合わせもつものをC類（1点）とした。106は、形態は三角柱状を呈し、稜の部分が細長く研磨されている。これは、「擦石」「穀摺石」「特殊磨石」などと呼称されてきたもので、早期中葉から後期の土器に伴うものとされている[八木1976]。107は約1/2が欠損しているが、表裏面に赤く変色した面が見られ、ほぼ全面が何らかにより熱を受けたものと考えられる。110は楕円形礫の片面に、比較的浅い凹痕が認められる凹石である。112は表裏面に2カ所ずつ凹痕が認められ、側縁を残して全面に滑らかな研磨が施されている。使用石材は、106が砂岩で、その他は安山岩である。



第17図　堂付遺跡　石錘長幅分布図

（9）石　皿（112）

偏平で大型の礫の片面がくぼみ、磨痕がある石器である。1I区から1点だけ出土している。約1/2欠損しているため加工の有無は確認できないが、残った形態から無加工で磨面だけと推定される。使用石材は、安山岩である。

（10）剥　片（82・85・101～105）

石核から素材剥片を剥ぎ取る際に生じた石片で、加工痕・使用痕が認められないものを剥片とした。82・85は背面がすべて自然面で、打面は二つ以上の剥離面をもつ。101～104は一部に自然面を残している。

D. 奈良・平安時代の土器（図版14、写真図版48）

須恵器2点、土師器6点の出土である。いずれも細片で図化したのは須恵器1点である。

（1）須恵器（208）

甕の胴部破片で、内面に同心円文、外面には細かい格子叩き目が見られる。技法的につくりがやや雑で、平安時代の所産と考えられる。

7. 小　結

本遺跡より出土した縄文土器は早期から晩期にわたり、その大半が断続的・散発的様相を呈し包含層からの出土であった。この中で注目されるのは、土器集中区5出土の土器群と早期の土器群である。土器集中区5は、平面プラン・掘り込みは確認できなかったが遺物の出土状況、焼土やピットの配置などから竪穴住居跡であったと推測される。出土土器は、第Ⅳ群6類の127・133のように縄文地に数条の沈線が巡り、短沈線や括弧状の区切線文が付される加曽利B1式の特徴を呈する精製土器や、第Ⅳ群2類101・105のような擦痕状工具による条縄文の粗製土器などである。第Ⅳ群2・6類は三仏生遺跡の2類と3類［中村ほか1957］、刈羽大平遺跡第Ⅲ群、小丸山遺跡第Ⅴb層［品田ほか1985］にそれぞれ比定される精製土器と粗製土器があるが、6類についてはすでに後期前葉に出現しているとされる。［品田1996］。

また、第Ⅰ群（縄文時代早期）土器は調査区西側に偏り分布し、散発的な出土状況であるが、内容的にはバラエティーに富んだ土器群である。県内の早期土器については、駒形敏朗・石原正敏・小熊博史の3氏による詳細な研究・検討が行われ、沈線文・貝殻腹縁文土器→刺突文土器→絡条体圧痕文土器→条痕文土器→縄文・条痕文土器という大まかな編年的位置づけがなされている［駒形1987］。また佐藤雅一氏による川口町西倉遺跡の発掘調査により、西倉Ⅱ群土器などの在地系土器の抽出が示唆されている［佐藤1988］。

このような状況を踏まえ堂付遺跡第Ⅰ群土器を整理するならば、1類から4類までが沈線文系、5類・7類が条痕文系、6類・9類が縄文・条痕文系に大枠で位置づけできる。本資料は破片資料が大半で、文様構成が明確でないため田戸下層式と上層式を識別するのは難しいが、1類aは1本引きの平行沈線文、1類bは斜行沈線が文様主体で田戸下層式、2類から4類は平行細沈線や刺突文を主体とし、2類a（10）のように沈線で区画した内部を刺突するもの、2類b（12～14）の沈線に沿って列点状に刺突を施すものなど田戸上層式に比定されるものと考えられる。この中で注目されるのは2類c（15～17）で、棒状工具を3本同時に使用し沈線間の区画内に同一施文具による刺突を行い、口唇部の内外面に刻目を有し、繊維を含まない土器群である。佐藤雅一氏は西倉第Ⅱ群土器について①2本同時施文具による平行沈線文を主体、②口縁端部及び端部から内・外側に、絡条体圧痕文・刻目文を斜位施文する、③多用な貝殻文・刺突文は認められない、④土器胎土には植物繊維は含有しない、とその特徴を列記しており、本類も極めて西倉第Ⅱ群土器に類似するものといえる。西倉第Ⅱ群土器については、「田戸上層式の時間幅で整理される」としながらも絡条体圧痕文の存在から、「貝殻文と絡条体圧痕文の置換えが行われた時期に製作された可能性が高い」と編年付けている。3・4類は刺突文土器、7類が絡条体圧痕文土器、5類が条痕文土器である。9類土器（43～48）は、平成7年度に埋文事業団が発掘調査を実施した上川村上小島遺跡に縦位の撚糸文を地文とする土器群が知見される程度で県内でも類例が少ない土器である。しかし、福島県の塩喰岩除遺跡第2群第10類C種［芳賀ほか1994］や、大畑貝塚G式土器［馬目ほか1975］、青森県表館遺跡［畠山ほか1981］などで類例が求められる。このうち大畑貝塚G式土器では「胎土に植物質繊維の混入が著しく、－（中略）－撚糸文・縄文・条痕・擦痕の地文と沈線文が器の表裏面を飾り、この組合わせによって57の類形が確認できた。」とし、「強いて求めるとすれば、茅山上層式や縄文条痕土器にその一端が併行するであろうと思われる。」と編年的位置づけがなされている。塩喰岩除遺跡においても早期末に位置付けがなされている。また、東北地方南部の大木2a式土器などで撚糸文を用いた羽状構成の土器が見られるが、本類は大木2aなどに比べ45・48のようにラフな文様構成であり、今のところ早期末から前期初頭に位置するものと考えておきたい。

第Ⅴ章　百塚東E遺跡

1. 調査の方法

第一次調査は調査区内に任意にトレンチを設定して重機（バックフォー）で表土を除去した後に人力で地山まで掘削を行った。遺物の出土層位を記録して土層の写真を撮影した。遺物はトレンチ番号・層位を記録して収納した。第一次調査の結果から第二次調査対象面積を700㎡とした。第二次調査の方法は重機で表土を除去し、包含層の直上で止めた。包含層は人力によって薄く掘削した。排土はベルトコンベアーを使用し、取り付け道路法線内の所定の場所へ運搬した。調査区域の中央を縦断するように排水パイプが設置されていたため、調査区域を二分する畦のようになり、包含層の掘削が進み地表面が下がるにつれ人が移動する際は不便であったが、畦を土層を観察するのに利用した。遺物はほぼ全面から出土したが、細片がほとんどであった。このため調査区域全体の遺物出土状況を写真撮影した後に、遺物を小グリッドごとにまとめて層位を記入して取上げ収納した。包含層の掘削後、遺構を精査したが明確な遺構は検出できなかった。調査区域の全体図を作成した後、清掃を行い完掘状況の写真撮影を行った。

2. 調査の経過

百塚東E遺跡の発掘調査は、小千谷バイパス取り付け道路工事に伴い、平成5年9月27日に第一次調査を行い、第二次調査対象面積を確定した。平成5年11月16日には遺跡範囲内にガス管を設置するために、ガス管設置部分の立会い調査を実施した。縄文土器、石器類が30点ほど出土している。平成5年度にガス管を設置した部分は、盛土をして未舗装道路として使用していた。道路部分はガス管の安全が保たれる幅を小千谷市のガス水道局から確認を得て、盛土を旧地表面まで掘削した。また、調査区内に、取り付け道路建設に伴い移転した家屋の生活排水を流すためのパイプが設置されていた。この排水パイプは径も大きく移設できなかった。この結果、遺跡の発掘調査できる部分が縮小されることになった。

第二次調査は平成6年7月6日から8月11日まで実施した。7月7・8日に表土除去を行った。11日に発掘機材を現場プレハブに搬入し発掘の準備を行った。12日から人力による包含層掘削を開始した。天候にも恵まれ、作業は順調に進んだ。遺物はほぼ全面から出土したが、調査区南側の低い部分にやや密度が高く分布していた（図版22）。7月末には包含層掘削もほぼ終了し、遺構精査を行ったが、倒木痕が二か所あるのみで、明確な遺構は検出されなかった。8月8、9日に平板により全体図を作成した。8月9日に完掘状況、基本土層を写真撮影し、11日にはすべての発掘調査を終了した。

8月11日に建設省に引き渡した後、遺物の出土状況が密だったことから排水パイプ下の立会調査が必要になり、8月22日から24日まで行った。表土から地山までの掘削と排土の運搬はすべて人力で行った。排水パイプ下からも土器や石器の剥片類が多数出土した。基準杭を取り除いた後だったので、遺物の取上げは「パイプ下立会い」として層位を記入して収納した。第Ⅴ層までの掘削が終了した後に、完掘状況を写真撮影した。立会い調査終了後は、畳付遺跡に合流した。

3. 中・小グリッドの設定

小千谷バイパス法線内の遺跡は第Ⅲ章2で述べたように、国土地理院の座標軸を基準に100×100m方眼を組んで分割し大グリッドとした。百塚東E遺跡の調査区域は小千谷バイパスの取り付け道路部分に当たり、大グリッド16Bの範囲に位置している。大グリッドの中を10×10mの中グリッドに細分し、1～100までの番号を付けた。調査区の範囲は第18図のように16B33～73の間に位置する。中グリッドの中をさらに2×2mの小グリッド25個に細分した。したがってグリッドの呼称は「16B43－10」というように表記した。グリッド杭の打設および、レベル値の測定は測量業者に委託した。

4. 基本層序

百塚東E遺跡は信濃川左岸の河岸段丘（小千谷面）上の傾斜地に立地し、現況は畑地である。調査区域内でのレベル差はおよそ2mであった。土層は一部に耕作による撹乱を受けていたが、調査区域内の低い部分ではおおむね同一層序で堆積状況は良好であった。16B44、54グリッド付近の高い平坦面には第Ⅱ層、第Ⅲ層が欠落しているところもある。遺物包含層は第Ⅱ層・第Ⅲ層を中心にしており、第Ⅳ層からもわずかに出土している。遺物は縄文時代早期から晩期までの土器・石器と古代の土器が出土しているが、層位的に区別はできなかった。基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　灰褐色土　表土（耕作土）層厚は20～25cmである。

第Ⅰ'層　灰褐色土（第Ⅰ層よりやや明るい）　表土（耕作土）層厚は20～45cmである。

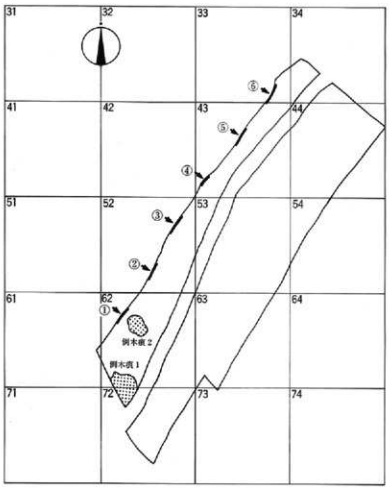
第Ⅱ層　黒褐色土　遺物包含層。大半の遺物はこの層から出土している。層厚は20～40cmである。土のしまりはない。

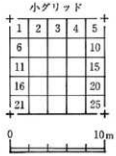
第Ⅲ層　茶褐色土　遺物包含層。第Ⅱ層より遺物の出土量は少ない。層厚は20～45cmでしまりはよい。

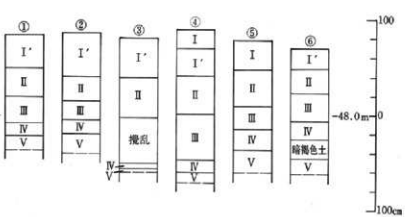
第Ⅳ層　暗黄褐色土（漸移層）　黄褐色土が斑状に混入し、粘性がありしまりはよい。層厚は15～20cmである。低地部分の第Ⅳ層には0.5cm大くらいの硬質な黒色粒子を多量に含む部分もある。

第Ⅴ層　黄褐色土（地山）　高く平坦な部分は黄褐色土であるが、低い部分は黄褐色土に赤褐色土が混ざって砂質になっている。下にいくほど砂質で硬質になりサビたようになっている。水が滞留、あるいは流れていた可能性もある。傾斜が始まる部分の地山には、段丘礫が集積している部分もある。

暗褐色土層　⑥（第18図）付近にのみ部分的に堆積している層である。第Ⅳ層と第Ⅴ層の間に堆積している。粘性があり、しまりはよい。層厚はおよそ20cmである。







(1：40)

Ⅰ層　表土・灰褐色土
Ⅰ′層
Ⅱ層　黒褐色土　遺物包含層
Ⅲ層　茶褐色土
Ⅳ層　暗黄褐色土（漸移層）
暗褐色土層　茶褐色土に黒褐色土が多量に混入する
Ⅴ層　黄褐色土または黄褐色土に茶褐色土が混って砂質になる(地山)

第18図　百塚東E遺跡　グリッド設定図及び基本層序

5. 遺　物

百塚東E遺跡で出土した遺物は、縄文時代の土器・土製品・石器類と古代の土器およびフイゴの羽口、鉄滓などであった。明確な遺構は検出されず、遺物はすべて表土および遺物包含層からの出土であった。このため、土器は所属時期ごとに、石器は器種ごとに分類して報告する。フイゴの羽口、鉄滓はその他として報告する。

A. 縄文土器（図版22～24、写真図版57～58）

縄文時代の土器は早期から晩期まで2,100点程出土しているが、大半を中期前葉の土器が占める。細片がほとんどで接合するものも少なく、器形・文様構成を復元できるものも少なかった。ここでは、早期の土器を第Ⅰ群、前期の土器を第Ⅱ群、中期の土器を第Ⅲ群、後期の土器を第Ⅳ群、晩期の土器を第Ⅴ群と分類した。また時期不明の土器で文様が特徴的なものについては最後に第Ⅵ群として一括して載せた。群内での詳細な時期区分は算用数字で表し、さらに文様別に分類しアルファベットで表した。分類の概略は以下のようである。また、観察表も作成した。

第Ⅰ群土器　早期の土器　　（1類:前葉、2類:中葉、3類:後葉）
第Ⅱ群土器　前期の土器　　（1類:前葉）
第Ⅲ群土器　中期の土器　　（1類:初頭、2類:前葉）
第Ⅳ群土器　後期の土器
第Ⅴ群土器　晩期の土器
第Ⅵ群土器　時期不明の土器

（1）第Ⅰ群土器（1～12）

早期の土器をすべて一括して本群とした。出土点数は13点である。1類の早期前葉の土器はa楕円押型文土器とb菱目押型文土器とに分けられ、2類は貝殻を施文具とする中葉の土器である。関東地方を中心とする田戸上層式段階に相当すると考えられる。3類は東北地方南部を中心に分布する雲母式段階に併行すると考えられる。

1類a（1～8）　早期前葉の楕円押型文の土器である。出土地点・層位はすべて同一である。1～3は同一個体である。胎土は繊維、金雲母をわずかに含み、やや粗い。口縁部は直線的にやや開いている。3は1，2，より楕円が小さく細目であるが、同一個体とした。異なった原体を使用している可能性がある。全体の器形は細片のため不明である。4は繊維を含まない。5～8は同一個体で、1～4より楕円形が小ぶりの原体を使用している。内面調整は丁寧であるが、外面の剥落が著しい。

1類b（9・10）　早期前葉のネガティブな菱目押型文の土器である。9・10の出土地点は30mほど離れているが同一個体と思われる。幅1.7cmの円柱状工具軸に菱目形に陽刻した原体を横位に回転して施文している。菱目原体の長さは3mmとかなり短かい。

2類a（11）　早期中葉の貝殻文沈線文系の土器である。先丸のヘラ状工具で沈線と貝殻腹縁文が横位に施文されている。中央部の文様は直線的であるが、上下の文様は波状に巡る。

2類b（12）　早期中葉の土器である。細い背竹管状工具を使い沈線で区画した中に、巻貝の先端を回転させて疑似縄文を施文している。巻貝を回転させているため、疑似縄文は緩やかにカーブしている。口唇

部内側のわずかに突出した部分に、刺突文が連続して施されている。

3類（13） 早期後葉の貝殻文沈線文系の土器である。沈線で縦位に区切った間に貝殻腹縁文を斜位に施文している。胎土は精良である。

（2）第Ⅱ群土器（14～17）

前期の土器を一括して本群とした。

1類（14～17） 前期初頭の羽状縄文を施した土器である。14～17は同一個体である。器厚は4～5mmと極めて薄手であり、底部は砲弾状になるものと推定される。非結束羽状縄文によって器面全体を施文している。内面には指頭痕が顕著に見られる。長野県中・南信に分布する中越式系の土器と推定される。

（3）第Ⅲ群土器（18～101）

中期の土器を一括して本群とした。本遺跡の遺物の主体を成している。

1類（18～25） 中期初頭の北陸系・新保式土器のⅢ期に相当する一群である。幅3mmほどの半截竹管を使用し、半隆起線文・爪形文・格子目文などで施文している。器厚は6～9mmと比較的薄手である。胎土はにぶい橙色から灰褐色を呈し、褐色の粒子を少量含むものもあるが、かなり緻密である。18～20は同一個体である。口縁部がキャリパー状にふくらむ深鉢である。口縁部上端は縄文地文の上部に三角形陰刻を施している。下部は横位・縦位に半隆起線を巡らし、U字や菱目形状に引いて施文している。21・22は同一個体である。21は口唇部が平らな口縁で爪形文、半隆起線文、縄文などで施文されている。22は新保式に特徴的な格子目文が見られる。24も縄文地文に三角形陰刻を施している。口唇部内側は、わずかに内湾している。25はキャリパー形深鉢の口縁部である。かなり磨耗が進み、文様が不明瞭な部分もあるが、縄文地文に三角形陰刻を施している。

2類a（26～79） 中期前葉の北陸系・新崎式の土器群である。半截竹管による半隆起線文や爪形文によって施文するのが特徴である。格子目文も継続してみられる。26は口縁部に主突起を持ち、爪形文の下に半隆起線文を二条巡らし、頸部にかけて横位の幅広の無文帯がある。27も口縁部に主突起を持ち、爪形文の下につまみ出しによる小突起が作り出されている。28は縦の8mm程度の短い半隆起線文の下に横位の半隆起線文と爪形文が交互に施文されている。29は口縁部がやや外反する。半隆起線文と縄文である。30は爪形文・半隆起線文の施文の方法が粗雑である。31・32・34は爪形文を連続して巡らしている。33は口唇部に細かいキザミが入れられている。35・36・38・39・60は半隆起線文と爪形文が交互に施文されている。37は半隆起線の下に横位の無文帯がある。40・41・66は縄文地文に縦に平行した沈線を施している。42は半隆起線文に区切られた中に、三叉文が充填され、格子目文などもみられる。43は半隆起線文に区切られた中に格子目文が施されている。44は小型で径の小さい土器のようである。爪形文、半隆起線文、格子目文が施文されている。45・47・51はやや荒い格子目文になっている。46は縄文地文に細い4mm幅の半截竹管で縦の半隆起線、B字状文を施している。49は口縁部のやや大きめの主突起下に玉抱き三叉文が充填されている。50・55は半隆起線文につまみ出しによる小突起となっている。52は口縁部主突起下に玉抱き三叉文が充填される。主突起内面には、こぶ状の突起が付いている。53は口縁部突起下に三叉文が充填される。主突起内面は丁寧に成形され、稜が鋭利に形づくられている。54も口縁部突起下に三叉文が充填されている。主突起内面は最も厚いところに直径4mmの孔が文様の一部としたのか未貫通ではあるが、開いている。56は縄文地文に縦の半隆起線文が引かれており、底部付近である。57は横位の幅広の無文帯の部分である。58は粘土を丸く貼り付け、その周囲を半截竹管で一周している。60は半隆起線文と爪形文が交互に施文されている。61は雲母をわずかに含んだ胎土である。半隆起線文で区切られた中に縄文が施さ

れている。62は頸部に爪形文を巡らし、下に縦の半隆起線文が垂下する。65は表面にススが多量に付着している。口縁部は深い二条の沈線が巡り、その下に縄文が見られる。67は半隆起線文が折り返して二条になっている部分である。68は頸部から口縁部に向かって外反する部分で、半隆起線文がやや深めに五条引かれている。内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残っている。72はV字状に貼り付けた隆帯の上から竹管で押圧している。73は縦の半隆起線文の両脇に斜位に二条半隆起線文を施文している。74は粗製土器である。75・76は粗製土器で、半隆起線文にキザミを入れて施文している。77～79は外面は半隆起線および縄文による施文であるが、表面は赤色顔料によって塗彩されている。77・78は浅鉢である。

2類b（80～84）　中期前葉の羽状縄文を施した土器である。80～83は同一個体である。80は口縁部で小突起を持ち、縄文施文後に半截竹管によって二条の半隆起線文を巡らしている。胴部は結束羽状縄文によって器面全体に施文している。

2類c（85～99）　中期前葉の粘土紐の貼付け隆帯による三叉文や半隆起線文、爪形文等もみられる土器である。全体的に胎土は金雲母や石英を多く含んで粗く、色調も暗・赤褐色系統のものが多い。85～87は関東の阿玉台式系統の土器の影響を受けていると思われる。85は丸棒状工具で山形に沈線を施文している。86・87は背竹管状工具を押し引いて施文している。88は縦に引かれた半隆起線文の内側に細い丸棒状工具で刺突が連続して行われている。89・90は隆帯が貼り付けられており、90には指頭痕も見られる。91・92・93は貼り付け隆帯で三叉文を作っており、93の縦の隆起線は貼り付けである。94は底部で推定直径は約18cmである。95は口縁部で横位に沈線が一条巡り、縦に短い沈線が引かれている。96はヘラ状工具で深くつけた縦の3本の沈線で文様を成している。97は幅5mmほどのやや細目の半截竹管を使用して半隆起線文を引き、やや浅めに爪形文を押し引いている。99は幅3mmの極細の半截竹管で、半隆起線が三条引かれている。

100・101は縄文時代中期の土器の底部である。100は外面の地文は縄文で底部にはわずかに網代痕が見られる。底部直径は11.3cmである。101の網代痕は明瞭で、底部直径は14.5cmである。

（4）第Ⅳ群土器（102）

後期の土器である。102は口縁部に小突起を持つものである。突起部から垂下する隆帯が貼り付けられている。

（5）第Ⅴ群土器（103～106）

103～106は晩期の細目状撚糸文を施した同一個体の粗製土器である。胎土は砂粒子を多量に含んでいるためもろい。内面は比較的丁寧に調整されている。

（6）第Ⅵ群土器（107～114）

時期不明土器を一括して掲載した。107は三十稲場式土器様の刺突文と沈線を施した土器である。粘土紐の輪積み部分から破損しているので擬口縁になっている。108・109は撚糸文を施した土器である。108は撚糸文Lによる施文である。109は口縁部である。110は口縁部に連続して列点刺突が巡る土器である。上段の刺突は不整形であるが、下段の刺突は長方形である。111～114は同一個体である。外面は無文で粗製土器であるが、内面に条痕文で器面調整を行っている。

B. 土製品（図版24、写真図版58）

（1）手捏土器（115）

16B52－5グリッド出土の極めて小型の無文土器である。手法は手捏で調整は粗いものとなっている。底部付近しか残っていないので全体の器形・文様の有無も不明である。底部推定直径は2.6cmである。

（2）土　偶（116～119）

土偶は全部で4点出土しているが、いずれも細片である。116は土偶の手の部位と推定される。手の先には棒状工具で沈線を二本引いて指を表現しているようであるが成形は粗雑である。手と胴部を繋ぐ部分に貫通孔が一つある。117も手の部分と推定され、胴部との接合部分に一条の沈線が縦に引かれている。手をやや上方に向けた形で板状土偶になるものと推定される。形態的には縄文時代中期のものと考えられる。118は土偶の胴部で足の付け根に近い部分である。右脇には二条の沈線が巡り、中央部にも二条の沈線が縦に引かれている。裏面には文様は見られない。形態的には縄文時代中期と推定される。119も土偶の胴部である。胎土に繊維の混入が見られる。表・裏面とも縦の平行沈線で施文されている。

（3）土製耳飾（120）

滑車形の耳飾である。平面形は円形で推定直径3.0cm、内円径1.2cmと大型である。断面形は鼓状を呈している。

（4）土製円盤（121）

無文の小型土製円盤である。胎土は精良であるが、成形は粗雑で不整楕円形を呈している。周囲は面取りしている。

C. 石　器（図版26～27、写真図版59～60）

百塚東E遺跡で出土した石器類は、すべて縄文時代のもので器種・剥片・石核を含め670点余りである。ほとんどが剥片で成品は少なかった。石器の内訳は石鏃1点、ピエス・エスキーユ1点、円形掻器1点、打製石斧11点、磨製石斧1点、両面加工石器1点、二次加工のある剥片61点、磨石5点、石錘9点、不明石器2点、石核11点である。土器は縄文時代中期前葉のものが主体であり、早期～晩期までの各時代の土器も少量ずつ出土しているが層位的に区分できなかった。石器についても土器同様に大半が縄文時代中期に属するものと考えられるが、形態的に早期・前期に分類できるものも見られる。図化した石器には巻末に観察表を作成した。剥片類については石材別組成表を作成した。ガラス質安山岩と安山岩で全体の半数以上を占めていることがわかる。その他としたものには鉄石英や石英、玉髄、などが少量ずつ含まれる。本文中の使用痕の表現については五丁歩遺跡［高橋保ほか1992］の石器観察表の記載方法に準拠した。

（1）石　鏃（1）

凹基無茎鏃である。基部の抉り込みは比較的深く行われており、形態的には縄文時代前期に属するものと思われる。縦・横の比率は1：1である。石鏃の出土はこの一点のみである。

（2）尖頭器（2）

木葉形を呈した尖頭器であり、硬質で緻密な横長剥片を素材としている。正面の調整は側縁部のみであるが、丁寧に行っている。尖頭器の出土もこの一点のみである。

（3）円形掻器（3）

やや楕円形を呈するいわゆるラウンドスクレイパーである。厚さ4.6cmの厚手の剥片を素材としており、

裏面には素材の腹面が残っている。横断面はやや左側に寄った三角形を呈する。裏面はわずかに湾曲しているが平滑面を作り、使用により生じたと推定される光沢が広範囲に認められる。正面は中央まで剥離が行われ、周縁だけに比較的小型の二次加工を行っている。掻器はこの1点のみである。

（4）打製石斧（4～12）

4は大きさに対して比較的厚手のもので撥形の打製石斧である。刃部平面形は直刃で、側面形は片刃である。風化が著しく進行しているため剥離面も不明瞭であり、石器表面も剥落している部分がある。5は頁岩製の縦長剥片を素材としている。形態は撥形である。正面は礫表皮を多く残している。刃部平面形は円刃で、側面形は片刃である。6は頁岩製の撥形打製石斧である。周縁部への剥離調整は深い角度で行っており、側縁部の一部にツブシの加工が施されている。7は頁岩製である。正面は礫表皮をほぼ全面に残し、二次加工は裏面を主体に施されている。刃部平面形は円刃で側面形は片刃である。刃部を作り出すための二次加工はとくに行わず、原石から打ち欠いたときにできた鋭利な稜線をそのまま刃部にしている。8は黒色頁岩製である。縦長剥片を素材としており、風化が著しく進行している。形態は撥形で刃部平面形は直刃で、側面形は片刃である。9は短冊形の打製石斧である。石材の安山岩の風化が著しく稜線も明確ではないが、おおまかな剥離によって側縁部に二次加工を施して形状を整えている。10は極めて厚手の剥片を素材としている。刃部平面形は直刃で片刃であり、微細剥離痕が見られる。正・裏面に磨耗痕が見られ、とくに正面の磨耗痕は著しく、変色している。一部新しい剥落がある。11はガラス質安山岩製である。基部のほぼ中央から破損しているようであるが、不自然な割れ口である。打製石斧としたが、基端に当たる部分に丁寧な調整痕が見られるのは再加工しようとしたものか。12は破損しているが、形態は撥形と推定される。風化が著しく進行しているため、稜線もわずかにしか判別できない。

（5）磨製石斧（13）

13は蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部平面形は円刃で側面形は両刃で微細剥離痕が見られる。側面にも研磨は行われ線状痕が認められるが、中期の定角式磨製石斧などと比較すると側面の稜がはっきりせず、横断面が丸みを持っている。

（6）両面加工石器（14）

14は元は打製石斧であったものが、両端が破損したために残った中央部分の剥れ口や側縁部を再加工して両面加工石器にしたものと推測される。正面の光沢痕は打製石斧として使用していたときの使用痕と考えられ、剥離の稜線が平滑になるまで使用されており、線状痕もみられる。

（7）不定形石器（15～19）

15～17は横長剥片を素材とした剥片石器である。15は刃部は外湾し微細剥離痕がみられ、新しい剥離も見られる。16は硬質頁岩のやや厚手の剥片を使用しており、刃部は鋸歯縁状になっている。17は左側縁部が一部破損している。刃部正面の二次加工はやや粗雑だが、裏面からの二次加工は丁寧に行っている。刃部は直線状である。18・19は縦長剥片を素材とした剥片石器である。18は頁岩製で刃部への二次加工は丁寧に密に行っており、かなり鋭利になっている。19は薄手の剥片を使用し、刃部は細かな鋸歯縁状になっている。

（8）磨　石（20～24）

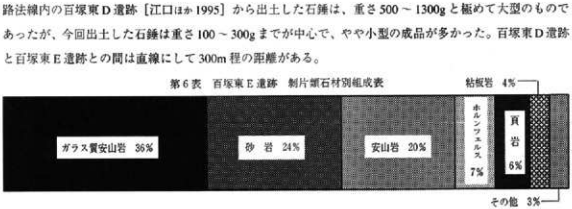
早期の土器に伴うとされている磨石類の一部に「特殊磨石」などと呼ばれているものがある。これは横断面が三角形もしくは四角形の自然石の稜の部分を磨面とするものが多い。中部地方では早期中葉頃までの押型文系土器群の時期に集中して存在するとされる。岩原Ⅰ遺跡［北村ほか1990］にまとまった資料があ

る。20～24がこれに相当するもので、第Ⅰ群の押型文系土器群と出土地点とも近く共伴するものと考えられる。磨面は一面でややザラついており、敲打痕は見られない。24のみ磨面は二面で、石材の器面自体が荒れていることもあって多少の凹凸がある。中期に一般的に見られる平面形が円形に近い磨石、凹石等が皆無であることも特筆される。

（9）石 錘（25～34）

出土点数は全部で9点であった。すべて礫石錘で偏平楕円の安山岩を使用している。原石の長軸方向を打ち欠いて縄掛け部分を作り出している。平成5年度に発掘調査を行った同じ小千谷バイパス取り付け道路法線内の百塚東D遺跡［江口ほか1995］から出土した石錘は、重さ500～1300gと概めて大型のものであったが、今回出土した石錘は重さ100～300gまでが中心で、やや小型の成品が多かった。百塚東D遺跡と百塚東E遺跡との間は直線にして300m程の距離がある。

第6表 百塚東E遺跡 制片類石材別組成表



D. 奈良・平安時代の土器（図版25、写真図版59）

（1）土師器

図化はしていないが、1点だけ出土している。器形は無台杯と推定される。細片のため、手法等は不明である。底部推定直径は5.0cmである。

（2）須恵器（122～134）

須恵器の出土点数は15点でその内13点を図化した。細片が多く器形は推定の域を出ない。122は横瓶の口縁部である。推定口径は8.4cmである。口唇部は剝落している。123は甕の口縁部である。外面に自然釉が付着している。124は甕の口縁部である。125は底部に近い体部である。底部近くの外面の器面は荒れており、内面調整も粗雑である。126は肩部に近い体部である。127・128・129は同一個体である。128は破損した土器片の2面を擦っており、滑らかである。130は大甕の体部である。外面のタタキ目が顕著である。内面の当て具の痕も顕著である。131～134は細片のため器形は不明である。

E. その他（図版25、写真図版59）

（1）フイゴの羽口（135）

16B62－15・第Ⅱ層出土である。外面推定直径は12.0cm、孔の推定直径は3.3cmである。孔の先端の周囲には鉱滓が多量に付着している。外面は滑らかに丁寧に整形を施している。精錬・製錬炉の羽口として使用されていたのか、鍛冶炉の羽口として使用されていたのかは不明である。

（2）鉄 滓

図化していないが調査区内から鉄滓が4点出土している（写真図版59）。総重量は103.2gである。135のフイゴの羽口との関連が推測される。

6. 小　結

遺跡は信濃川左岸の小千谷面といわれる河岸段丘上にあり、東から西へ傾斜する斜面に位置する。遺構は検出されなかったが、遺物は縄文時代中期初頭～前葉の土器を中心に調査区全域からほぼ万遍なく出土した。調査面積は少ないながら出土遺物の種類は多い。ほかに縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器も少量ながら出土している。また、土偶や耳飾などの土製品も出土している。古代の須恵器も15点出土したことから、小千谷市内で確認されている2基の須恵器の窯跡との関連が推測される。フイゴの羽口や鉄滓も出土しており、付近に製鉄に関係した遺跡がある可能性もある。

押型文土器　第Ⅰ群とした縄文時代早期の押型文土器10点は『岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』[北村1990]の新潟県内における押型文土器の変遷（案）によると第Ⅲ期に当たる。第Ⅲ期は細久保式の中段階に相当すると考えられている。出土した土器の一部には胎土に繊維を含むものがあるが、一般に縄文土器の胎土に繊維を混入するのは早期中～末頃から前期にかけてと言われている。県内の遺跡では湯沢町岩原Ⅰ遺跡や上林塚遺跡、中里村小丸山遺跡［石坂ほか1994］、妙高高原町の関川谷内A・B遺跡（平成6・7年度発掘調査・未報告）、同町大堀遺跡（平成5～7年度発掘調査・平成7年度報告）などで出土している押型文土器の一部に繊維を含む例がみられる。小千谷市内では蟹沢遺跡や、両新田遺跡、三仏生遺跡、川井本田、細島遺跡、大崩遺跡でも断片的に押型文土器の資料が見られる［甘粕ほか1983］［佐藤雅一ほか1993］。

前期初頭の土器　第Ⅱ群とした土器は前期初頭の長野県中・南信地方を中心に分布する中越式土器の終末に併行すると考えられる。中越式土器は東海系の木島式土器の影響を強く受けており、木島式土器は「おせんべい土器」と俗称されていたように器厚はごく薄いものとなっている。出土した土器は胎土に繊維を含まず器面全体に羽状縄文を施した薄手のものである。内面には指頭痕が顕著に見られる。県内での類例は少ないようである。群馬県三原田城遺跡の第4号住居跡では花積下層式の土器群と共に出土している。

石器出土状況　百塚東E遺跡で出土した石器類約670点のうち器種が明確なものは約15%とかなり少ない。遺跡全体のごく一部を調査した限りで全体の傾向を把握することは難しいが、今回の調査における石器の分布の傾向を土器の分布状況を見ながら概観してみたい。出土した土器約2,100点のうち大半は縄文時代中期前葉であり、ほぼ全域から出土しているが16B52－10、16B53－5、16B53－6に集中する傾向が見られる（第22図）。一方、早期・前期の土器は合わせて35点で出土土器の1.7%と希少であるが、押型文土器の出土地点と円形掻器の出土地点は同一であり、また石錘の出土地点も押型文土器の周辺であることから、これらの石器は該期に帰属する可能性が高い。しかし、この近くからは中期の土器もかなり出土していることから明言はできない。また、形態的に前期に属すると考えられる石鏃や、早期に属すると考えられる磨石類は散発的な出土状況を呈しており土器の分布状況とは必ずしも一致しない。

剥片の約半数を占めるガラス質安山岩と安山岩を使用した定形的な器種は3点と極わずかな出土であるが、ガラス質安山岩と安山岩の剥片に二次加工を施して不定形剥片石器としているものは約50点とかなり多く見られる。

第Ⅵ章　百塚西Ｃ遺跡

1．調査の方法

遺跡は農道や用水路などによって調査区が分断されたため、便宜上南からＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｅ区として分けて調査を行った。排土処理の関係からＡ区をまず初めに調査し、次にＣ区、Ｂ区、Ｄ区、Ｅ区の順で行った。表土はバックフォーで除去し遺物包含層の直上で止めた。遺物包含層は基本的に人力で掘く掘削していった。Ｂ区北東側の広い範囲については表土を除去しても遺物に当たらなかったため、地山直上までバックフォーで掘削し、その後地山までは人力によって掘削した。

調査区は水田に囲まれており、調査期間が4月中旬から8月中旬と稲作に水の必要な時期と重なったため周囲の水田から水が浸透し、また梅雨の集中豪雨により調査区が何度となく水没し、排水に時間を割く事が多かった。このため調査区の周囲に排水用の溝を掘りポンプアップして24時間排水を行っていたがレベルの低い地点では常に水を含んだ状態であった。

Ｄ区の縄文時代草創期の土器が出土した地点については、小グリッド2m四方をさらに1m四方に4区分し、層位ごとに排土を採取し水洗した。この水洗の結果、5mm程度の大きさのものも含め30点の土器が採取できた。

2．調査の経過

百塚西Ｃ遺跡の第一次調査は平成5年8月27日～9月3日に行った。第二次調査は平成7年4月17日から8月22日まで行った。各地区ごとに経過を述べる。

Ａ区　遺物の分布は極めて希薄であった。遺構も近代の畑の畝と考えられる溝と旧農道脇に掘られたハサ木跡のピットがいくつか点在するのみであった。倒木痕が17基検出された。調査終了後は排土置き場とした。

Ｂ区　北東側の広い地区は遺物は数点しか出土しなかった。わずかに北側の一角で縄文時代晩期の土器が一括で出土した程度である。農道脇の最西南端は土地改良で地山まで削平されて遺物は出土しなかったが、その東側は遺物包含層も良好に残り遺物も多数出土した。遺物はグリッドと層位を記入して収納した。他の地区の遺物は出土点数が少なかったため、平面図に出土地点を記録し、番号と層位を記入して収納した。

Ｃ区　東側の沢にむかって傾斜している部分は包含層がわずかに残っており、縄文時代の土器十数点と打製石斧1点が出土した。縄文時代草創期の断面三角形の錐は、平坦な地山まで削平された地点で5月9日単独で出土した。多数検出された溝は畑の畝の跡と考えられ、溝の覆土から出土した遺物は近・現代の陶器片のみであった。

Ｄ区　表土を除去した時点で遺物が数点検出されていたので、遺物包含層が残っていることが期待された。しかし、遺物は縄文時代晩期の土器が2ケ所でまとまって約50点ほど第Ⅱ層から出土しただけであったので、とくに土層観察用のセクションベルトを残していなかった。自然流路もあと北側の残り五分の一

を30cmほど掘り下げて掘削作業終了という時点で縄文時代草創期の土器が出土したため、層位の比定に苦慮した。土器の分布状況を記録して取り上げた。草創期の土器が出土した地点は小グリッドを更に小さく区画してその中を掘削し、排土は土嚢袋にすべて詰めた。土嚢袋は約300袋を数え雨天で掘削作業が出来ない日に水洗を行った。流路東側に草創期の遺物包含層が良好に残っていたため、調査区ぎりぎりまで拡張したが遺物は出土しなかった。7月20日には県立六日町高校教諭荒川勝利氏と長岡市大島中学校教諭渡辺秀男氏に草創期出土地点の土層の火山灰、地質等について指導・助言を頂いた。8月3日には国學院大学小林達雄教授に現地を視察いただき、土器等について指導・助言を頂いた。

E区　表土を除去した時点で礫層が出ていたので、これで調査を終了するつもりであった。しかしD区で検出された自然流路の続きが検出される可能性も考えられたので、人力で礫層を含む地山まで掘削した。遺物は縄文時代の打製石斧1点と土器が5点、フレークが1点出土したが、自然流路の続きは検出されなかった。

調査終了後は周囲の水田から水が浸透し農作業に支障をきたすため、一部排土で埋め戻しを行った。

3．中・小グリッドの設定

百塚西Ｃ遺跡も他の3遺跡と同様に国土地理院の座標軸を基準に100×100m方眼を組んで分割して大グリッドとした。今回の百塚西Ｃ遺跡の調査区域は3E～5Dの範囲に位置している。大グリッドの中は10×10mに細分し、1～100番までの中グリッドとした。中グリッドのなかは2×2mの小グリッド25個に細分した。グリッド杭の打設および、レベル値の測定は測量業者に委託した。

4．基本層序

現況は大部分が水田で、一部畑地であった。昭和30年代の土地改良によって削平や盛土が行われている。A区は遺物包含層はほとんど残っておらず、遺物もまばらに出土する程度であった。B区は農道脇に当たる狭い範囲で遺物包含層が良好に残り、中期から晩期の縄文土器が多数出土した。畑の耕作により、土器は細片がほとんどであった。この部分の北側に広がる畑地から縄文土器が多数表面採集できることから遺跡の中心はこの畑地を含む段丘の先端部に存在すると考えられる。また、B区北東側の広い調査区では遺物包含層に相当する黒褐色土は残っているが遺物は数点しか出土せず、北端の一角で縄文時代晩期の粗製土器が一括で出土した。C区北側は東に向かって傾斜する地形であった。傾斜していたため削平を受けず遺物包含層が残り遺物がわずかに出土している。南側の平坦な部分は地山まで削平を受けていた。D区は自然流路が検出されたため、他の調査区とは土層は異なっている。D区にしか見られない暗褐色土層があり、縄文時代草創期の土器を包含していた。Ⅱ層の縄文晩期の土器を包含する層と草創期の土器を包含していた暗褐色土層との間には、遺物を包含しない赤褐色土層が入っている。南の沢に向かい傾斜している部分には50cmほど盛土がしてあった。E区はA～C区とほぼ同一層序であった。基本的な層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　　暗褐色土　表土・耕作土。

第Ⅰ'層　　暗褐色土に赤褐色粒子を多量に含む。表土・耕作土。

第Ⅰ"層　　第Ⅰ'層よりしまりがない。D区自然流路南側のみに見られる。表土・耕作土。

第Ⅱ層	黒褐色土　縄文時代中期から晩期の遺物を包含する。粘性弱、しまり強。
第Ⅲ層	褐色土　粘性中、しまり強。
赤褐色土層	D区の自然流路にのみ見られる。遺物は包含しない。粘性やや弱、しまりやや強。
暗褐色土層	D区の自然流路にのみ見られる。縄文時代草創期の土器を包含する。粘性やや弱、しまり強。
第Ⅳ層	黄褐色土に暗褐色土が混入する（漸移層）。粘性弱、しまりやや強。
第Ⅴ層	黄褐色土層（地山）部分的に河岸段丘礫を含む。粘性弱、しまり強。

5. 遺　構

百塚西C遺跡では、遺跡の主体である縄文時代の明確な遺構は検出されていない。近・現代の畑の畝と考えられる溝や、旧農道の脇に設置されたハサ木跡とみられるピット、倒木痕と考えられる性格不明遺構などが検出されているのみである。C区の溝についても畑の畝と考えられる。北西から東南に走る幅広の深い溝（SD34～37）を、北東から西南に走る細く浅い溝（SD50・51）がほぼ垂直に切っている。また、北東から西南に走る広く深い溝（SD44～47）を北西から東南に走る細く浅い溝（SD34～37）がほぼ垂直にたち割っている。広い幅の溝の深さは、削平されて底面しか残っていないものもあるが確認面からの深さは約35cm、細い溝は約10cmである。

6. 遺　物

A. 縄文土器（図版32～33、写真図版64～66）

百塚西C遺跡は全体に遺物の分布は希薄であった。縄文時代の土器はおよそ570点出土している。ここでは草創期の土器を第Ⅰ群、中期の土器を第Ⅱ群、後期の土器を第Ⅲ群、晩期の土器を第Ⅳ群とした。

（1）第Ⅰ群土器（1～18）

土器は土を水洗して採取された5mmほどの大きさのものも含め全部で47点出土している。ここでは実測に耐え得るものについてのみ実測図を作成し報告する。すべて同一個体の土器片である。推定口径が32cmほどの深鉢になるものと推定される。底部形状は不明である。口唇部から隆帯を貼付け上から押さえて付けた隆起線文が三条平行にめぐっている。隆帯の幅は4～5mmである。5～9は胴部で微隆起線文が幾重にも横方向に施され、7・9は一部に無文部がみられる。10～13のように底部に近い胴部には斜位に微隆起線文が施されている。微隆起線文の幅は4mmで横方向に引かれる場合には等間隔で数段施しているが、斜位に引かれる場合は間隔がやや開き均一ではない。14～17は無文部の破片である。7～9，11，14の内面には部分的に横位の条痕状の成形痕が見られる。これは内面全体に工具を横方向に動かして成形を行ったためと推定される。植物の茎の断面を利用した工具を使用しているため条痕状の痕跡には繊維痕も見られる。成形後に内面全体をナデて器壁を整えているが消し切れずに一部に残ったようである。内面には炭化物が付着している。胎土は緻密で金雲母片や不透明白色粒子・石英をわずかに含んでおり、焼成も良好である。18は平成5年度の第一次調査でD区西側のNo.29トレンチから多数の剥片類と共に出土したものである。出土地点は35mほど離れているが、胎土の観察から1～17の土器と同一個体の可能性がある。幅5mm

の微隆起線文が斜位に施されている。内面に炭化物が少量付着する。

（2）第Ⅱ群土器（19～60）

中期の土器である。A区からE区までに出土したものをまとめて扱った。大半がB区農道脇東側の第Ⅱ層から出土したもので中期初頭～前葉に属するものである。ほとんどが深鉢であると推定されるが、細片のため全体の器形を明らかにできるものは少ない。1～3類に大別した。

1類（19～57）　中期初頭から前葉にかけての土器である。文様構成でa～lに細分した。

1類a（19）　口縁部に竹管文による渦巻状の突起をもつものである。外面にはススが付着している。

1類b（20～26）　口縁または口縁下に半截竹管による横走する半隆起線文をもち、その区画内に蓮華文をもつものである。22～26が三角形陰刻による蓮華文である。20は口縁でキャリパー状を呈するものと考えられ、口縁すぐ下の区画された部分にヘラ状工具による刻みがめぐる。その下には無文帯がある。摩耗が著しい。21もヘラ状工具による刻みをもつがやや不規則である。22は口縁すぐ下に蓮華文が施され、三角形陰刻のようであるが摩耗その他によりはっきりと観察できない。23、24は円筒形の胴部にやや外反する口縁をもつ器形の深鉢になると考えられ、口縁下に半隆起線文を持ち、その下に三角形陰刻が見られるが、細片のためはっきりと観察できない。25はキャリパー形の口縁部になると考えられ、正位の蓮華文で、その下には縦位の沈線が見られる。23～25は丸みのある山形の蓮華文になっている。26は円筒形になる深鉢で逆位の蓮華文である。

1類c（27）　口縁部の横走する半隆起線文の下に縦位の短い半隆起線文をもつものである。

1類d（28）　口縁部の横走する半隆起線文の下に無文帯をもつものである。

1類e（29～31）　横走する半隆起線文で区画された口縁部に縄文を施したものである。

1類f（32・33）　細目の半截竹管による沈線が口縁下に二条施されているものである。その下に連続する刺突文が施されるものである。同一個体であり、刺突文の下部には炭化物が多く付着している。

1類g（34）　細目の半截竹管による沈線と撚糸文をもつものである。胎土が比較的精良である。内面にヘラ状工具によると見られる横方向の調整痕が明瞭に観察できる。

1類h（35～40）　口縁下から頸部にかけて縦位の半隆起線文または沈線をもつものである。沈線の施文具には半截竹管あるいはヘラ状工具が考えられる。35は半隆起線文をもつもので頸部と考えられる。36はキャリパー形になる頸部と考えられ、半截竹管による沈線がある。37は半隆起線文の下に半截竹管による沈線が不規則に施されている。38～40は縦位の沈線と横位の沈線とが組合わさって文様を構成している。38、39は頸部と考えられ、38は内面に横方向の調整痕が見られる。39は上端に半隆起線文をもつ。

1類i（41）　口縁すぐ下に撚糸文をもつものである。円筒形の深鉢になると考えられる。外面に炭化物の付着が見られる。

1類j（42・43）　爪形文をもつものである。42は横走する半隆起線文を持つ。43は縦位に施され、その横には細沈線が見られる。

1類k（44～48）　撚糸文をもつ胴部をまとめた。46～48は木目状撚糸文である。46は割れ口に炭化物が付着している。

1類l（49～57）　各種の文様が施された胴部と底部1点をまとめた。49は斜格子目文をもつもので

ある。施文具は半截竹管と考えられる。50はU字文のなかに撚糸文が施されている。51はX字状に垂下する半隆起線文と細沈線が見られる。52はU字文と細沈線が見られる。細沈線はかなり先端のとがった工具が用いられたと考えられる。53はB字状文をもつものである。左半分は無文で、炭化物が少量付着している。54は半截竹管による太めの沈線と三角の刻みが施されている。やや厚めの土器である。55は縦位に半截竹管あるいはヘラ状工具による沈線が見られる。56は半截竹管による沈線である。57は櫛代痕が観察される底部である。

第Ⅱ群1類の土器は、北陸の新保Ⅲ期［加藤1986］から新崎式期［山田1986］にかけてのものと考えられる。a～lに細分した中で、a・b・hは巻町豊原遺跡第Ⅵ群第2類［小野ほか1988］に見られるものと、cは湯沢町岩原Ⅰ遺跡第Ⅴ群1類F［北村1990］とそれぞれ類似しており、新保Ⅲ期に併行するものである。d～gは安田町中道遺跡12類［家田1980］に類似するものを見ることができるが、本遺跡においても、細片であり、それぞれ散点の出土しかないために不明な部分が多い。しかし、ほぼ同時期のものと考えられる。i～kは時期幅をもって使用される文様である。lは全体の器形、文様構成の不明のものを集めたが、B字状文など新崎式期併行の文様を持つものを含んでいる。

2類（58・59） 中期前葉から中葉にかけての在地系のものと考えられる。58は明赤褐色で半截竹管で文様を描いた後沈線を深くなぞっている。59は基隆帯による文様を持つものである。

3類（60） 五領ヶ台式系統の土器である。比較的古い段階のものと考えられる。深い半隆起線文で区画した中に沈線による山形文、円形文があり、横位の短沈線が施されている。

（3）第Ⅲ群土器（61～64）

後期に属すると考えられるものである。61は口縁部で外面には微隆起線文が2本見られる。丁寧に磨かれている。62は胴部と考えられる。内外面ともに丁寧に磨かれている。63、64は櫛歯状工具による条線が見られるもので63は三条一単位、64は五条一単位になっている。64は内面を丁寧に磨いている。

（4）第Ⅳ群土器（65～83）

晩期に属すると考えられる粗製の土器をまとめて扱った。65～68は小千谷バイパス第一次調査No.51トレンチ第Ⅱ層からの出土である。69～76、78～81、83はD地区の第Ⅱ層の黒褐色土から出土したもので、縄文時代草創期の土器が出土した層と赤褐色土層をはさんだ上の層にあたる。65～68は同一個体で地文LRが見られる。69～76も同一個体であり、櫛歯状工具によると考えられる条線が全体に見られ、ハケ目のような感じになっている。69は口縁に近い部分であると思われるが、結節縄文が施されている。77はおそらく口縁部で、口縁すぐ下に平行沈線が2本めぐり、その下に結節縄文が施され、地文LRが見られる。78～81は同一個体であり、78と79が口縁部である。口縁すぐ下に平行沈線が2本めぐり、その下は結節縄文のみを転がしている。81に地文LRが見られることから、下半部分には縄文を施していたと推定される。82はB区北西隅からまとまって出土したもので、口縁下には結節縄文、その下には羽状縄文が多段にわたって施されている。83は網目状撚糸文をもつものである。外面にススが少し付着している。

第Ⅳ群の晩期粗製土器で、結節縄文をもつもの（77～82）と網目状撚糸文（83）をもつものは、県内では大洞C1式期以降に見られるものである。特に信濃川中、下流域に多く用いられる傾向がある。［渡邊1992］

B．石 器 （図版33、写真図版65～66）

本遺跡から出土した石器は剥片類と合わせて84点である。剥片類の大半をガラス質安山岩が占めている。成品となるものは4点で縄文時代草創期の断面三角形の鏃が1点、所属時期の明確でない尖頭器1点、打製

石斧2点である。

（1）断面三角形の錐

1はC区第Ⅴ層上面から単独で出土した。珪質頁岩製で完形品である。長さ10.4cm、幅0.9cm、重さ8.0gである。基部の正面の最下部に素材剥片の主要剥離面と見られる箇所があるがその他はすべて調整剥離面により覆われている。側縁は細かく丁寧な調整がされている。使用痕らしきものは観察できない。

（2）尖頭器

2はB区農道脇の部分の第Ⅱ層から出土した。砂岩製である。基部あるいは先端部が欠損したものと考えられる。残存部の長さ3.4cm、幅1.9cm、厚さ1.5cm、重さ7.0gである。正面の欠損部の下の一部分に厚めの素材の剥片の腹面が見られる。

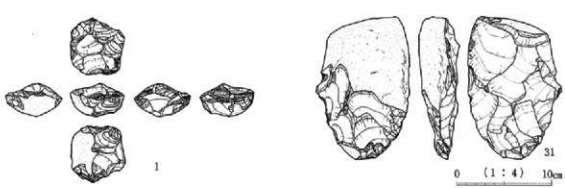
（3）打製石斧

3はC区第Ⅰ層からの出土である。粘板岩製である。両面に自然面を残すものである。短冊形で長さ8.8cm、幅3.9cm、厚さ1.6cm、重さ75.5gである。正面の自然面を残している部分に一部擦痕が見られ、裏面にも一部自然面を残した部分に擦痕が観察できる。擦痕は基部にも見られる。また片側縁の中央部付近に磨耗している部分があり、長軸に平行してわずかに擦痕が認められることから側縁を使用していた可能性がある。4はE区の第Ⅰ層から出土したもので粘板岩製である。基部が欠損しているが、横長剥片を素材とした短冊形のものと考えられる。長さ10.5cm、幅4.9cm、厚さ1.7cm、重さ98.4gである。表面の下部には擦痕があり、剥離面にも磨耗、ツブレが認められる。片側縁もわずかに磨耗している。裏面は直線的に調整されている。

C. 平成5年度第一次調査出土遺物について（第19図）

D区西側にあたるNo.29トレンチにおいて、縄文時代草創期の土器2点とともに多数の剥片が出土している。ここは二期線分にあたり、今後の調査は平成9年度以降になるため、参考資料として観察表と写真を掲載し、石核については実測、図化した。またその石材についても少し触れておく。

出土した剥片類は併せて38点である。数の最も多い石材がガラス質安山岩であり、16点の出土がある。そのうち1点は石核（1）で、重さ108.7gである。裏面は原石分割後に多方向から剥離をし、剥片剥離が行われた作業面となっている。また自然面の残る剥片は3点である。凝灰岩は14点で自然面を残さない剥片のみである。砂岩は6点でそのうち1点は石核（31）であり、重さ656.9g、裏面には一部素材の腹面が残っているのが観察できる。また自然面の残る剥片は1点である。頁岩は2点で自然面を残さない剥片のみである。こ



第19図　百塚西C遺跡　第一次調査出土石器

れらの多数の剥片類が出土したNo.29トレンチは、小千谷バイパス第一次調査の結果［(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団編 1994］から石器製作址の可能性があると報告されている地点である。これらの剥片類を観察したところでは草創期のものとは断定できないが、草創期の土器と共伴していることから、これらが同時期に属する可能性も考えられる。

7. 小　結

遺跡は信濃川左岸の小千谷面といわれる河岸段丘上に立地している。遺物の分布は極めて希薄である。遺跡の中心となる縄文時代の明確な遺構は検出されなかった。遺物は縄文時代草創期、中期を中心に後期、晩期までの土器が出土している。石器は成品、剥片類とも点数はすくない。遺跡の中心は縄文時代中期の土器を多数出土した、B区農道脇北東側の現在畑地となっているところと推定される。ここは段丘の先端部に当たる部分である。

小千谷市内で縄文時代草創期の土器が出土したのは本遺跡が最初である。石器の単品での出土は三仏生遺跡の丸鑿形石斧と尖頭器が表面採集されている例や、城之腰遺跡の局部磨製石斧、川井愛染堂遺跡の尖頭器、四ッ子山遺跡の有舌尖頭器などが知られている程度である［小熊ほか1993］。これらの多くは発掘調査によるものではない。この石器が出土したことによってこれらの遺跡を草創期の遺跡と位置付ける事は難しい。その意味から本遺跡の発掘調査で縄文時代草創期の土器・石器が出土したことは注目される。

隆起線文土器　県内で草創期の土器を伴う遺跡は、管見で本遺跡を含み25遺跡を数える。そのうち隆起線文土器を出土している遺跡は上川村小瀬が沢洞窟遺跡、中里村小丸山遺跡・千溝遺跡・壬遺跡・田沢遺跡・一里塚（B）遺跡、津南町屋敷田Ⅲ遺跡・正面C遺跡・釜堀川東遺跡の10遺跡である。小瀬が沢洞窟遺跡を除けばすべて津南町と中里村に限られ、信濃川水系の段丘上に立地している。

出土した土器は自然流路の底位付近から出土している。また平成5年度に行った第一次調査のNo.29トレンチからも多数の剥片類と共に土器が2点出土している。残念ながらNo.29トレンチ付近は二期線分に当たるため、第二次調査は平成9年度以降に実施する予定である。時期的には草創期の隆起線文土器期のⅣ期［大塚 1989］に相当すると考えられる。

断面三角形の錐　断面三角形の錐は縄文時代草創期にのみ特徴的にみられる石器である。上川村小瀬が沢洞窟遺跡で約300点出土しているのを始め、山形県日向洞窟遺跡や長岡市上の沢遺跡［小林 1992］で表面採集されているだけで、本遺跡が全国で4遺跡目である。小瀬が沢洞窟遺跡［中村 1960］では「棒状尖頭器（錐）」と呼称されている。これらの石器は山内清男氏によって渡来石器とされ「断面三角形の錐」と呼称されたことから現在はこの名称が一般的で、本遺跡もこの名称を使用した。小瀬が沢洞窟遺跡の「棒状尖頭器」を再検討された沢田敦氏は石器の機能、特徴を考慮すると「棒状尖頭器」と呼ぶほうが適切であるとしている［沢田 1993］。また、「断面三角形の棒状尖頭器」と呼ぶ例もある。残念ながら本遺跡の「断面三角形の錐」は隆起線文土器とは共伴していない。出土地点はかなり離れており、層位もまったく異なっている。この断面三角形の錐は表土と地山の2層の間から出土しているが、地山は昭和30年代の土地改良時に削平されており、表土は客土の可能性もある。このように出土状況は良くないが、隆起線文土器と時期的には一致すると考えられる。

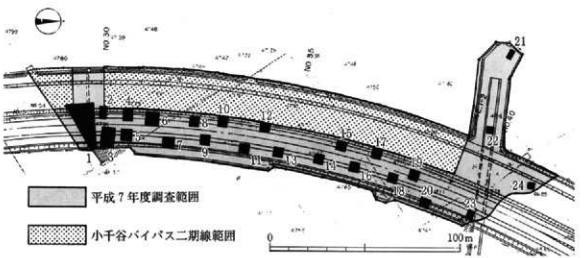
第Ⅶ章　割目B遺跡

1. 調査の方法

平成5年度の第一次調査では、全面から縄文時代、古代の遺物が出土した。しかし、割目B遺跡の中心は北西に位置し、中心より離れる縁辺部では遺構・遺物も少なかった。小千谷バイパス法線内では、耕作や圃場整備などにより、遺物包含層の堆積状態に地点差が見られ、包含層が認められなかったところが多い。また、同バイパス内の他の遺跡の第二次調査でも、良好な遺構・遺物が得られない地域も出ていたことから、割目B遺跡も同様のことが予想できた。遺物包含層は、今回の第二次調査対象外となる二期線側が良好であるが、今回の調査範囲内は、耕作による攪乱と第二次世界大戦中の東部52部隊施設による攪乱をかなり受けていると思われた。そこで、再度トレンチによる発掘法を行い、遺構・遺物の出土状況から調査範囲の拡大を再考する調査方法をとることとした。

2. 調査の経過

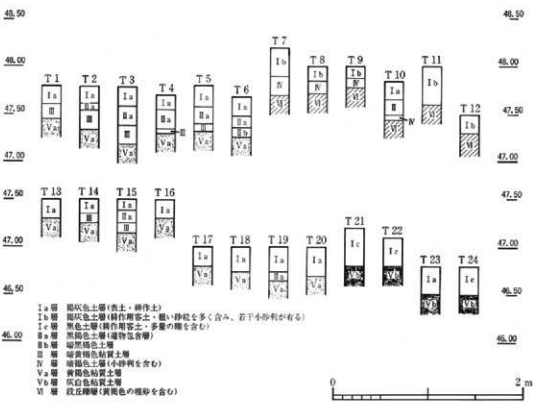
平成5年度の調査をもとにトレンチ（T1～24：トレンチ番号）を設定し、雑草・表土上面を取り除くため、バックフォーで20cm程度除去し、第Ⅱ層からは基本的に人力によるジョレンで堆積土を薄く掘削しながら遺物の検出に努めた。地山まで掘削が終了後、整面・底面での遺構の精査を行い、一部の遺構については半截・完掘を行った。遺構精査後、各トレンチの底面の写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った。遺物は出土層位を確認して収納した。



第20図　割目B遺跡　調査範囲図

3. 基本層序

割目B遺跡は、一見平坦な地形には見えるが地点別の比高は最大1.5m程度あり、微高地と低地からなっている。地山についても、黄褐色粘土層から段丘礫が露出しているところや、灰白色粘土層のところなど地形的・地質的にも均一ではない。第Ⅱa層の黒褐色土層もT2～6・10付近に堆積はしているが、遺物は検出されなかった。また、耕作土からすぐに地山となる地域もある。この耕作土も客土的なもので小礫や小砂利等が入っているものが多い。



第21図 割目B遺跡 基本層序

4. 遺　構

土坑4基、溝12条、ピット10基、性格不明遺構3基が検出された。遺構確認面は、地山と考えられる黄褐色粘土層又は灰色粘土層である。遺構別に見た分布の傾向としては、全体的に南側に偏っている。遺構の多くは出土遺物がないため、各遺構の年代については明確にしえない。しかし、位置的に東部52部隊兵舎施設内であり、隣接する金塚遺跡の兵舎跡の遺構覆土と類似している点を考えれば、遺構の多くは第二次世界大戦前後の現代の遺構と判断できる。以下、代表的な遺構について記述する。

P9　南側に位置し、T1内にある。確認面は地山で、遺存状況は良好である。平面形は楕円形で長径48cm、短径32cm、深さ46cmである。掘り込みはしっかりしており、底部で段丘礫に当たっている。覆土は黒褐色土の単層で、遺構らしい覆土ではあるが、遺物は出土していない。

SD11　南側に位置し、T3内にある。確認面は地山で、遺存状況は良好である。平面形は全体を確認して

ないが、鍵型をし、枝を持つ溝である。幅112cm、深さ52cmである。壁の掘り込みはしっかりしており、断面は台形に近い。底部の凸凹はなく平坦である。覆土は単層で暗褐色土・黒色土・黄褐色粘質土の混合層である。遺物は出土していない。

SX12　南側に位置し、T6内にある。確認面は地山で、遺存状況は良好である。平面形は長方形で長辺121cm、短辺85cm、深さ63cmである。掘り込みはしっかりしており、底部は平坦である。覆土は褐色土の単層であるが、20～30cmの偏平な礫を含み、意図的に埋没したものと考えられる。中位から礫に混ざり、コンクリート片も出土している。

5. 遺　物

遺物はT1・8・20から合計8点の出土である。内訳は縄文土器6点、土師器1点、近世陶器1点である。縄文土器は中期のもので、縦位に撚糸（RL）を回転させた撚糸文、半截した竹管による文様があるものも出土している。しかし、表土の第Ⅰ層や耕作用客土と思われる第Ⅰb層、現代の遺構と判断されるSXの覆土から出土するなど出土状態はよくない。遺跡の性格を知る手掛かりに結びつけることはできない。

6. 小　結

今回の割目B遺跡の第二次調査範囲は、ある程度の攪乱を受けていることが予想されたため、当初から全面を調査対象とせず、トレンチによる発掘法を行った。その結果によりトレンチ範囲の拡大を実施する予定であったが、検出した遺構・遺物を検討し、希薄な遺跡と結論づけ調査を終了した。

小千谷バイパス法線は、南東に流れる信濃川の河岸段丘小千谷面に位置する。しかし、同じ小千谷面ではあるが、小栗田原面との間には後背湿地にあたる段差があり、また信濃川へ流れ出る流路と思われる段差もあり、一見平坦に見える地形も微高地や低地と比高を持つ。また、圃場整備や耕作用客土の搬入など、層序はところにより異なる。第一次調査で遺物の多くが第Ⅰ層より出土していた地域であるが、第Ⅰa・Ⅰb層の下に黄褐色粘土層や段丘礫が露出している地域もあり、遺物包含層は圃場整備等で既に削平されていると考える。今回の調査範囲内では、良好な遺構・遺物などの資料は得ることができなかった。今回の調査範囲は割目B遺跡の縁辺部に当たると推測される。しかし、遺跡の中心部側の遺物包含層は良好に現存すると考えられることから、遺構・遺物の保存状況も良好と期待される。

第一次調査の遺物出土数や遺構の確認が第二次調査実施の検討材料になるが、機械的なトレンチの設定だけでは、今回のように地形的・地質的な差異が大きい場合では、判断が困難となる。今後、圃場整備等による大規模な攪乱が予想される場合には、土層観察等による詳細な遺跡の状況把握が不可欠となる。

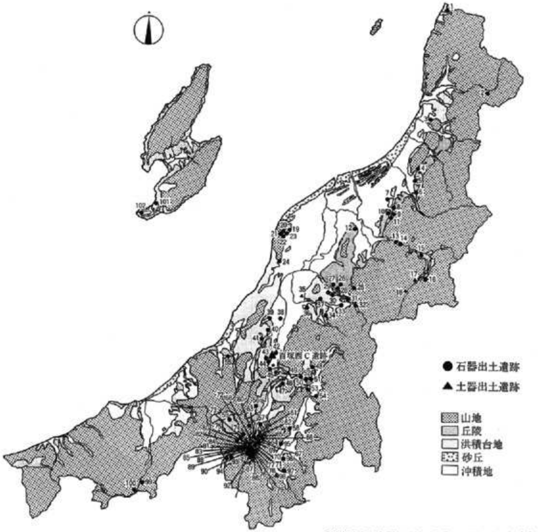
第Ⅷ章　ま と め

本報告の堂付遺跡・百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・割目B遺跡は、信濃川左岸の小千谷面と呼ばれる河岸段丘上に立地している。この段丘の形成期は6,000～10,000年前で、信濃川によって形成された段丘のなかでも比較的新しい段丘と推定されている［吉越1992］。いずれの遺跡も現地形は平坦であるが、調査の結果、旧地形と遺跡の立地はかなり複雑な様相を呈していることが判明した。図版36は昭和21年に撮影された航空写真であるが、三仏生集落周辺では幾つかの信濃川の後背湿地や沢地がやや黒ずんで散見される。現在その多くは土地改良などによって水田化されている所が多いが、縄文時代はもっと多くの沢などが複雑に入り込んだ地形であることが容易に想定できる。また、堂付遺跡では調査区のⅠⅠ52グリッドを境にして東西で約1mの比高が確認され、東側の低位面では第Ⅱ・Ⅲ層前後に洪水堆積層が認められた。つまり、縄文時代中期ないし後期においても、東側の低位面は信濃川河床との比高があまりなく常に不安定な状況にあったことが推測される。

三仏生集落周辺の縄文時代の遺跡については、希薄な遺構・遺物出土状況を呈する遺跡と三仏生遺跡のように住居跡などが検出され遺跡の中心若しくはその周辺に位置する遺跡が存在し、これらの遺跡間の有機的な関係は把握されていない。堂付遺跡では早期中葉から前期末葉、中期前葉から中葉、そして後期初頭から中葉、百塚東E遺跡では早期前葉から後葉、前期初頭、中期初頭から前葉、後・晩期、百塚西C遺跡においては草創期、中期初頭から前葉、後・晩期へとそれぞれ断続的な土器の出かたを呈し、まとまった遺構は検出されなかった。

第22図は県内の縄文時代草創期の遺跡分布図であるが、草創期の遺跡は小瀬が沢洞窟遺跡や室谷洞窟遺跡などの山岳地帯の洞窟遺跡を除くと、特に津南町や中里村などに遺跡が密集していることが知られる。土器を伴う遺跡も同様の傾向を示している。これらの遺跡は信濃川や魚野川、清津川の合流点などの河川流域の段丘上の水辺近くに立地する傾向が指摘されている［佐藤ほか1993］。百塚西C遺跡の隆起線文土器は標高46mの信濃川中流域の低位段丘面の自然流路の底位から出土している。自然流路の南側は沢に向かい湾曲して急角度で傾斜している。しかしながら、流路の両岸の礫層の礫の重なりは水量が豊富な時期には南から東へ流れていたことを示唆している。草創期の遺跡の立地の在り方を考えた場合、このような低位の段丘面において草創期の遺跡が存在したことは注目される。また、土器とは離れた地点で出土した断面三角形の鏃は全国的にも出土例が極めて限られた石器である。小瀬が沢洞窟遺跡のように300点余り出土した例はその中でもまた極だっている。日向洞窟遺跡、上の沢遺跡そして百塚西C遺跡のように断片的に出土する例がほとんどであり、今回のように完形のものも少ないため貴重な資料となるであろう。

百塚東D遺跡、堂付遺跡、百塚東E遺跡、百塚西C遺跡など一連の小千谷バイパス関係の発掘調査によって縄文時代草創期から早期の遺物が小千谷面の三仏生集落周辺から出土することが確認され、なかでも約12,000年～10,000年前と推定される縄文時代草創期の土器が出土したことで小千谷段丘面の離水・陸化した時期もさらに遡る可能性がある。今回調査した遺跡は、いずれも遺構・遺物とも希薄で散発的出土状況にあり、今後遺跡の立地や性格についても充分に検討していかなければならない。また、当地周辺の調査に当るときはこれらのことを考慮しながら発掘調査の方法を考えていく必要がある。



『新潟県史通史編1原始・古代』の図1を一部改変

No.	遺跡名	所在地	土器	石器	遺構・その他
1	上山	山北町		○	
2	樽口	朝日村		○	
3	平林	神林村		○	
4	坂山	新発田市		○	
5	川東地区	新発田市		○	
6	上車野D	新発田市		○	
7	石仏	笹神村		○	
8	岩倉A	笹神村		○	
9	畑江	笹神村		○	
10	村杉	笹神村		○	
11	薬師平A	笹神村		○	
12	卯平	新津市		○	
13	吉ケ沢B	三川村		○	
14	上ノ平A	三川村		○	ブロック1カ所
15	鹿瀬	津川町		○	
16	八田窪	上川村		○	
17	小瀬ケ沢洞窟	上川村	○	○	骨器　獣骨
18	室谷洞窟	上川村	○	○	獣骨
19	福島馬渡	巻町		○	
20	ケカチ窪	巻町		○	
21	稲井	巻町		○	
22	新谷	巻町		○	
23	御手洗山	巻町		○	
24	有馬崎	分水町		○	
25	千ケ沢B	加茂市		○	
26	中ケ原B	下田村		○	
27	荒町	下田村		○	
28	江口A	下田村		○	
29	藤平A	下田村		○	
30	黒山	下田村		○	
31	荒沢	下田村		○	ブロック1カ所
32	長板	下田村		○	
33	梅野荻北	栃尾市		○	
34	金沢	栃尾市		○	
35	耳取窪A	見附市	○		
36	[illegible]	見附市		○	
37	峠	見附市		○	
38	藤橋乾新田	長岡市		○	
39	上の沢	長岡市		○	
40	電子打場	長岡市		○	
41	山屋	越路町		○	
42	三仏生	小千谷市		○	
43	真人原A	小千谷市		○	
44	城之腰	小千谷市		○	
45	陣ケ子山	小千谷市		○	
46	川井家後宮	小千谷市		○	
47	川井本田	小千谷市	○		
48	松ケ峰	広神村		○	
49	荒屋	川口町	○	○	土坑
50	木下屋敷	川口町		○	
51	清水上	堀之内町		○	
52	権現平	堀之内町		○	礫群3カ所
53	新堀平D	堀之内町		○	
54	長者林	小出町		○	
55	大原	柏崎市		○	
56	国府原	川西町		○	
57	伊達八幡館	十日町市		○	
58	釜蓋	六日町		○	
59	原	松代町		○	
60	上原	中里村		○	
61	小丸山	中里村	○	○	
62	おざか清水	中里村	○	○	
63	風倉	中里村		○	
64	干溝	中里村	○	○	
65	[illegible]	中里村		○	
66	原木尾	中里村		○	
67	向田	中里村		○	
68	壬	中里村	○	○	ブロック複数
69	田沢	中里村	○	○	
70	中林	中里村		○	
71	一里塚(旧)	中里村	○	○	
72	島	津南町		○	
73	泉坂り	津南町		○	
74	下宿	津南町	○	○	
75	大屋敷	津南町		○	
76	屋敷田Ⅰ・Ⅱ	津南町	○	○	
77	屋敷田Ⅲ	津南町	○	○	
78	駒返り	津南町	○	○	
79	宮内田	津南町	○		
80	卯ノ口	津南町		○	
81	卯ノ木南	津南町	○	○	フラスコ状土坑
82	卯ノ木	津南町	○	○	
83	本ノ木	津南町	○	○	
84	鍋ノ木平	津南町		○	
85	前原	津南町		○	
86	鷺沢	津南町		○	
87	小坂平	津南町		○	
88	朝日野	津南町	○	○	
89	正面C	津南町	○	○	
90	道下	津南町		○	
91	壁ノ堀	津南町		○	
92	栗原旧宿	津南町	○	○	
93	つぐね	津南町		○	
94	宮ノ脇	津南町		○	
95	荒ノ末平	塩沢町		○	
96	五丁歩	塩沢町		○	
97	岩原Ⅰ	湯沢町		○	
98	大刈野	湯沢町	○	○	ブロック14土坑
99	前田	妙高村	○		
100	大洞	妙高高原村	○		
101	八升ケ平	羽茂町		○	
102	長者ケ平	小木町		○	

◇1994年までに刊行された文献に基づいて作成した。主なものは
①小熊博史・立木宏明「新潟県における旧石器時代・縄文時代草創期研究の現状(2)」『長岡市立科学博物館研究報告 No. 29』1994
②佐藤雅一ほか「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『環日本海における土器出現期の様相』日本考古学会1993年度
③広田永二・中澤幸男「津南町の縄文時代草創期遺跡」『新潟考古第5号』1994
である。
◇遺跡番号は原則としては北から南へ配列したが、市町村で統一している。
◇遺跡は102カ所あるが中には写真のみ、また表面採集により確認されたものも含む。

第22図　県内の縄文時代草創期の遺跡分布図

要　約

堂付遺跡

1. 堂付遺跡は小千谷市大字高梨字堂付609－2番地ほかに位置する。信濃川左岸の河岸段丘・小千谷面上（百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・割目B遺跡も同じ）に位置し、標高は約42mである。
2. 下記の3遺跡と同様に、調査原因は国道17号線小千谷バイパス建設である。調査期間は平成6年7月12日～12月2日である。調査面積は9,500㎡である。
3. 調査の結果、縄文時代後期中葉を中心とした遺跡であることが判明した。検出された遺構は土坑9基、溝3条、焼土4基、集石遺構1基、配石遺構1基のほかピットである。
4. 出土遺物は、縄文時代早期から晩期にわたるが、主体は後期中葉の三仏生式併行の土器である。石器は、打製石斧の出土割合が高く52点出土している。また、一組ではあるが完形の打製石斧と打製石斧が接合できた資料があり、石器の製作工程を考える上で注目される。

百塚東E遺跡

1. 百塚東E遺跡は小千谷市大字三仏生字千谷1,860番地ほかに位置し、標高は約48mである。
2. 調査期間は平成6年7月6日～8月24日である。調査面積は700㎡である。
3. 調査の結果、縄文時代中期前葉を中心とした遺跡であることが判明した。遺構は検出されていない。
4. 出土遺物のうち、主体となる中期前葉の土器は北陸系の新崎式土器である。ほかに早期前葉の押型文土器も出土している。

百塚西C遺跡

1. 百塚西C遺跡は小千谷市大字三仏生字蟹ケ崎2,114番地ほかに位置し、標高は約46mである。
2. 調査期間は平成7年4月17日～8月22日である。調査面積は7,500㎡である。
3. 調査の結果、縄文時代草創期と中期前葉を中心とした遺跡であることが判明した。遺構は溝38条、性格不明遺構42基と自然流路が一筋検出された。
4. 出土遺物のうち、草創期では隆起線文土器と断面三角形の錐が出土している。主体となる中期前葉の土器は北陸系の新保Ⅲ期の土器である。

割目B遺跡

1. 割目B遺跡は小千谷市大字三仏生字金塚5,103－2番地ほかに位置し、標高は約48mである。
2. 調査期間は平成7年5月26日～6月30日である。調査対象面積は8,700㎡である。
3. 調査は、第一次調査の結果等からトレンチによる部分的調査を実施し、遺物や遺構が検出された地区は調査範囲を拡張する方法をとった。
4. 調査の結果、戦前の陸軍東部52部隊の施設があったため遺跡はかなり攪乱を受けていた。遺構は土坑4基、溝12条、ピット10基、性格不明遺構3基が検出された。
5. 遺物は僅かに縄文時代中期の土器6点、土師器1点、近世陶器1点の合計8点である。

引用・参考文献

ア 甘粕　健ほか　1983『新潟県史』資料編1　新潟県

イ 家田順一郎ほか　1980『中道遺跡』 安田町教育委員会

池田　亨　1982『竜ケ池観音堂塚群緊急発掘調査報告書』 小千谷市教育委員会

1983『竜ケ池観音堂塚群緊急発掘調査報告書』 小千谷市教育委員会

石坂圭介ほか　1994『小丸山遺跡・おざか清水遺跡』 中里村教育委員会

ウ 鳥沼無口　1916「越後に於ける有史以前の住民及び其の遺物」『国學院雑誌』22巻12号

上原甲子郎ほか　1958『大平遺跡』 小千谷市教育委員会

エ 遠藤孝司　1989『婆々懐遺跡発掘調査報告書』 小千谷市教育委員会

1990『市内遺跡詳細分布調査報告書』 小千谷市教育委員会

遠藤　佐ほか　1987『能右エ門山遺跡』 小千谷市教育委員会

江口友子ほか　1995『百塚東D遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

オ 大塚達朗　1989「草創期の土器」『縄文土器大観1　草創期　早期　前期』 小学館

小熊博史　1989「縄文時代早期終末における絡条体圧痕文土器の一様相」『信濃』第41巻　第4号　信濃史学会

小熊博史・前山精明 1993「新潟県小瀬が沢洞窟遺跡出土遺物の再検討」『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジュウム1環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学協会新潟大会実行委員会

小熊博史・立木宏明 1993「新潟県における旧石器・縄文時代草創期の現状 (1)」『長岡市立科学博物館研究報告』第28号

1994「新潟県における旧石器・縄文時代草創期の現状 (2)」『長岡市立科学博物館研究報告』第29号

小千谷市史編修委員会　1969『小千谷市史』通史編　上巻

小野　昭ほか　1987「巻町布目遺跡の調査」『巻町史研究Ⅲ』 巻町

1988「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究Ⅳ』 巻町

1992『真人原遺跡Ⅰ』 真人原遺跡発掘調査団

大泉久四郎　1915「越後國に於ける石器時代遺跡・遺物」『人類学雑誌』第30巻　第2号

大野延太郎　1900「越後旅行見聞録（石器時代古物遺跡の部）」『東京人類学会雑誌』第16巻第176号

カ 橿原考古学研究所編 1994「一万年前を掘る」 吉川弘文館

加藤三千雄　1986「第6章縄文時代の遺物、第1節土器、第8群土器　新保式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

可児通宏　1989『押型文系土器様式』『縄文土器大観1　草創期　早期　前期』 小学館

片岡　肇　1983『押型文土器』『縄文文化の研究3縄文土器』 雄山閣

キ 北村　亮　1990『岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』 新潟県教育委員会

ク 國島　聡　1988「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について」『新潟考古学談話会会報』第4号新潟考古学談話会

コ 小林達雄ほか 1980『壬遺跡』 国學院大学文学部考古学研究室
1982『壬遺跡 1982』 国學院大学文学部考古学研究室
1983『壬遺跡 1983』 国學院大学文学部考古学研究室
1987『壬遺跡 1987』 国學院大学文学部考古学研究室
1992『長岡市史資料編1 考古』 長岡市
駒形敏朗ほか 1987「新潟県における縄文時代早期・前期の基礎的研究（4）」『長岡市立科学博物館研究報告』第22号
1992「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』 国立歴史民俗博物館
サ 埼玉考古学会 1986『埼玉考古－埼玉考古学会30周年記念シンポジュウム資料－』
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団編 1994「小千谷バイパス関係一次調査の概要」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
佐藤政英ほか 1982『三仏生のあゆみ』 新潟県小千谷市三仏生地区
佐藤雅一ほか 1988『西倉遺跡』 川口町教育委員会
佐藤雅一ほか 1993「信濃川水系における縄文時代草創期遺跡の様相」『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジュウム1 環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
斎藤秀平 1937『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第7輯』 新潟県
沢田 敦 1993「F.樋状尖頭器（断面三角形の槍）」『日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム1 環日本海における土器出現期の様相』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
シ 品田高志ほか 1985『刈羽大平・小丸山』 柏崎市教育委員会
品田高志 1996「新潟県における縄文時代後期中葉の土器群」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
ス 鈴木道之助 1991『図録 石器入門辞典 縄文』 柏書房
鈴木保彦 1983「草創期の土器形式」『縄文文化の研究3 縄文土器』 雄山閣
セ 芹沢正雄 1981「真木山製鉄遺跡の一考察」『真木山製鉄遺跡』 豊浦町教育委員会
芹沢長介ほか 1990『荒屋遺跡』 東北大学文学部考古学研究室 川口町教育委員会
タ 玉口時雄ほか 1984『土師器・須恵器の知識』 東京美術
高橋 保 1989「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
高橋 保ほか 1992『五丁歩遺跡』 新潟県教育委員会
高橋 保・鈴木俊成 1985『タテ遺跡』 新潟県教育委員会
田中耕作 1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館
谷藤保彦ほか 1987『三原田城遺跡』『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財報告書第13集』 群馬県教育委員会
テ 寺崎裕助 1988「新潟県長者ケ原遺跡出土の縄文土器」『新潟考古学談話会会報』第2号
1995「新潟県における縄文時代中期初頭の土器」『第8回縄文セミナー縄文中期初

頭の様相』 縄文セミナーの会
ト 田海義正ほか 1990『清水上遺跡』 新潟県教育委員会
戸沢充則ほか 1994『縄文時代研究事典』 東京堂出版
ナ 長野県 1988『長野県史 考古資料編 全一巻（4）遺構・遺物』
中川成夫・岡本 勇ほか 1962『信濃川中流域の遺跡遺物－新潟県小千谷市内における考古学的調査』 立教大学文学部史学研究室
中村孝三郎ほか 1957『三仏生』 長岡市立科学博物館
中村孝三郎ほか 1966『先史時代と長岡の遺跡』 長岡市立科学博物館
中村孝三郎 1960『小瀬が沢洞窟』 長岡市立科学博物館
1978『越後の石器』 学生社
中村 浩 1990『研究入門須恵器』 柏書房
ニ 日本の地質（中部地方Ⅰ）編集委員会 1988『日本の地質4 中部地方Ⅰ』 共立出版
ハ 畠山 昇ほか 1981『表館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集 青森県教育委員会
芳賀英一ほか 1994「塩喰岩陰遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』25 福島県教育委員会
フ 藤巻正信 1985『両新田遺跡』 新潟県教育委員会
藤巻正信ほか 1991『城之腰遺跡』 新潟県教育委員会
文化財保護委員会 1963『埋蔵文化財要覧』三
マ 馬目順一ほか 1975『大畑貝塚調査報告』 福島県いわき市教育委員会
前山精明 1994「新谷遺跡」『巻町史 資料編1. 考古』 巻町
ム 室岡 博ほか 1960『鍋屋町遺跡』 柿崎町教育委員会
1984『長峰遺跡Ⅱ』 吉川町教育委員会
ヤ 八幡一郎 1937「越後中魚沼郡竽坂の土器略報」『人類学雑誌』第51巻第12号
八木光則 1976「いわゆる「特殊磨石」について－中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起－」『信濃』第28巻 第4号 信濃史学会
山口逸弘ほか 1989『房谷戸遺跡Ⅰ』「関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第27集』 群馬県教育委員会
山田芳和 1986「第6章縄文時代の遺物、第1節土器、第9群土器 新崎式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
ヨ 吉越正勝 1992『大地から学ぶ越路町のおいたち（X）』 新潟第四紀グループ
ワ 若林勝邦 1893「越後国三島西蒲原両郡石器出所地名表」『東京人類学会雑誌』第8巻 第88号
渡辺三省ほか 1984『年表 小千谷』 小千谷市文化財協会
渡邊朋和 1992「新潟県における縄文時代晩期初頭～中葉の土器群」『第5回縄文セミナー縄文晩期の諸問題』 縄文セミナーの会

遺物観察表

別表凡例
堂付遺跡観察表のうち、出土地点の(土)記号は土器集中区、(焼)記号は焼土の略である。
色調で(内)は内面、(外)は外面、等に表記のないものは内外面である。
石器観察表の長さ・幅・厚さ・重さの(　)の数値は残存部の数値である。

別表1　堂付遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次地成	備考
1	1G-98-8	IV	深鉢	0.6	I 群1a	2本一単位の平行沈線 内面はナデ調整	繊維 砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色		1～5は同一個体 地成良好
2	1G-98-8	III	深鉢	0.7	〃	2本一単位の平行沈線	繊維 砂粒	にぶい黄橙色		1～5は同一個体
3	1G-99-14	IV	深鉢	0.7	〃	2本一単位の平行沈線	繊維 砂粒	にぶい黄橙色		1～5は同一個体
4	1G-98-14	IV	深鉢	0.7	〃	2本一単位の平行沈線	繊維 砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色		1～5は同一個体
5	1G-98-8	III	深鉢	0.7	〃	2本一単位の平行沈線	繊維 砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色		1～5は同一個体
6	2G-6-2	III	深鉢	0.8	I 群1b	沈線文 内面は丁寧なナデ調整	繊維 砂粒	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		
7	2G-6-7	III	深鉢	0.7	〃	沈線文	繊維 砂粒やや粗	にぶい黄橙色		
8	2G-6-7	III	深鉢	0.8	〃	沈線文	繊維 砂粒	にぶい黄橙色		
9	3G-6-2	III	深鉢	0.6	〃	沈線文 内面に条痕	繊維 やや密	にぶい黄橙色		
10	2G-6-7	III	深鉢	0.7	I 群2a	沈線文 区画内に刺突文 内面は丁寧なナデ調整	繊維 砂粒	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		
11	2G-6-2	IV	深鉢	0.7	I 群1b	沈線文 内面に条痕	繊維 やや密	にぶい黄橙色		
12	1G-89-2	III	深鉢	0.6	I 群2b	(内)丁寧なナデ調整 (外)沈線と刺突	砂粒を多く含む 石英粒	(内)灰黄褐色 (外)褐灰色	有	地成良好
13	1G-89-2	III	深鉢	0.7	〃	(内)丁寧なナデ調整 (外)沈線と刺突	砂粒を多く含む 石英粒	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		地成良好
14	1G-89-2	III	深鉢	0.6	〃	(内)丁寧なナデ調整 (外)沈線と刺突	砂粒を多く含む 石英粒	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		地成良好
15	1H-91-7	III	深鉢	0.5	I 群2c	(内)口唇部に刻目 (外)沈線と刺突	やや密	(内)黒褐色 (外)にぶい黄褐色	有	内面は丁寧なナデ調整
16	1G-78-3	III	深鉢	0.6	〃	(内)口唇部に刻目 (外)沈線と刺突	やや密	(内)明黄褐色 (外)にぶい黄褐色	有	内面は丁寧なナデ調整
17	1G-100-8	III	深鉢	0.7	〃	外面に沈線と刺突	やや密	(内)黒褐色 (外)にぶい黄褐色		内面は丁寧なナデ調整
18	2G-7-6	IV	深鉢	0.6	I 群3	斜格子状の沈線文 口唇部に刻目	小礫	黒褐色		
19	2G-7-6	III	深鉢	0.6	〃	斜格子状の沈線文 口唇部に刻目	小礫	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		
20	2G-7-6		深鉢	0.7	〃	斜格子状の沈線文	小礫 (繊維)	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		
21	2G-7-10	IV	深鉢	0.6	I 群4	口唇に刻目 内面はナデ調整	繊維	黄橙色		地成良好
22	1G-89 1G-89-13	IV III	深鉢	0.8	〃	口唇に孔	繊維	暗褐色		地成良好
23	1G-89-9	III	深鉢	0.6	〃	横位の連続刺突	小礫	黒褐色		地成やや良
24	1G-99-7	III	深鉢	0.7	〃	横位の刺突	砂粒を多く含む	にぶい黄橙色	一部黒褐	地成やや良
25	1G-89-23	III	深鉢	0.6	〃	条痕の施こない刺突	繊維を若干含む	(外)にぶい黄褐色	(内)スス	地成良好
26	1G-70-7	III	深鉢	0.6	〃	口唇に楕状圧痕 丸い刺突(二段平行)	密	灰黄褐色		地成良好
27	1G-96-22	IV	深鉢	0.6	I 群5	(内)横の条痕 (外)縦の条痕	ガラス質の細粒	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		地成良好
28	2G-7-14	III	深鉢	0.6	〃	(内)横の条痕 (外)縦の条痕部位の条痕	繊維を若干含む	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		地成やや良
29	1G-89-4	III	深鉢	0.8	I 群6	口唇に刻目 内面はナデ調整	繊維 小礫	にぶい黄橙色	(外)煤	地成良好
30	1H-61-25	IV	深鉢	1.0	〃	口唇に基準圧痕 内面に条痕	小礫	にぶい黄橙色		地成良好
31	1G-96-20	III	深鉢	0.8	〃	内面に条痕		にぶい黄橙色		
32	1G-70-8	III	深鉢	0.9	〃	内面に条痕	繊維	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色		
33	1G-88-7	IV	深鉢	0.8	〃	内面に条痕	小礫 繊維	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄橙色		
34	1G-70-7	IV	深鉢	0.9	〃	内面に条痕	小礫 繊維	にぶい黄橙色		
35	1G-96-17	IV	深鉢	0.8	〃	内面に条痕	小礫	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄褐色		
36	1G-79	IV	深鉢	1.4	〃	指かき痕文 内面はナデ調整	繊維	にぶい黄橙色		地成良好
37	1G-98-1	III	深鉢	0.9	I 群7	口唇部隆起に指為圧痕 内面に条痕		黒褐色		
38	1H-73-23	III	深鉢	0.5	I 群8	無文	繊維を若干含む 白色粒	にぶい黄褐色		地成良好
39	1H-73-23	III	深鉢	0.6	〃	(内)条痕 (外)無文	繊維を若干含む 白色粒	(内)にぶい黄褐色 (外)褐色		地成良好
40	1H-71-15	IV	深鉢	0.5	〃	(内)条痕 (外)無文	繊維を若干含む 白色粒	にぶい黄褐色		地成良好
41	1H-73-23	III	深鉢	0.7	〃	無文	繊維を若干含む 白色粒	(内)にぶい黄橙色 (外)暗褐色		地成良好

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
42	2G-8-1	Ⅲ	深鉢	底部 1.2 胴部 0.7	Ⅰ群8	乳房状の土器底部	繊維　白色細砂粒	にぶい黄褐色		
43	1I-32-16・25	Ⅲ	深鉢	0.7	Ⅰ群9	撚糸文(R)	繊維を多量に含む	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色		焼成良好
44	1I-32-25 1I-42-4	Ⅱ Ⅲ	深鉢	0.8	〃	撚糸文(R)	繊維を多量に含む	(内)褐灰色 (外)にぶい黄橙色	(外)一部に黒斑有	焼成良好
45	1I-42-15	Ⅳ	深鉢	0.7	〃	撚糸文(R)	繊維を多量に含む	(内)褐灰色 (外)灰黄褐色	(外)一部に黒斑有	焼成良好
46	1I-32-20	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	撚糸文(R)　沈線	繊維を多量に含む	(内)褐灰色 (外)にぶい黄橙色		焼成良好 底部に近い破片
47	1I-32-25	Ⅱ	深鉢	1.2	〃	沈線　底部中央に有孔	繊維を多量に含む	(内)褐灰色 (外)にぶい黄橙色		底部
48	1I-32-25	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	撚糸文(R)	繊維を多量に含む	にぶい黄橙色	(外)一部に黒斑有	焼成良好
49	1H-74-16	Ⅲ	深鉢	1.0	Ⅱ群1	原体圧痕	繊維	(内)にぶい黄橙色 (外)灰黄褐色		焼成良好
50	1I-35-2 1I-25	Ⅲ'	深鉢	0.5	Ⅱ群2	(内)ナデ調整 (外)羽状?	金雲母 繊維　小礫	褐色		
51	1H-64-6	Ⅲ	深鉢	0.5	Ⅱ群3	ループ文		(内)褐灰色 (外)灰褐色	(内)スス	焼成良好
52	1H-84-17	Ⅲ	深鉢	0.6	〃	ループ文		(内)にぶい黄褐色 (外)灰黄褐色		焼成良好
53	1G-96-10 1G-96-9	Ⅲ	深鉢	0.6	Ⅱ群4	羽状縄文	繊維を多量に含む ガラス質の細粒	褐色	(外)スス	焼成やや不良 もろい
54	2G-6-23	Ⅳ	深鉢	0.7	〃	羽状縄文	繊維を多量に含む ガラス質の細粒	褐色		焼成やや不良 もろい　内面は黒化が著しい
55	2G-7-5	Ⅲ	深鉢	0.7	〃	羽状?　縄文	繊維を多量に含む ガラス質の細粒	暗褐色	スス	焼成やや不良　二次的な火を受けもろい
56	1G-96-9	Ⅲ	深鉢	0.7	〃	縄文	繊維を多量に含む ガラス質の細粒	暗褐色		焼成やや不良 もろい
57	1G-96-9	Ⅲ	深鉢	0.8	〃	羽状縄文	繊維を多量に含む ガラス質の細粒	(内)灰黄褐色 (外)黄褐色	(内)スス	
58	1G-79-4	Ⅳ	深鉢	0.9	Ⅱ群5	(外)刺突 (内)格子状沈線	緻密	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		焼成やや良 59と同一個体
59	1G-87-23	Ⅳ	深鉢	0.9	〃	刺突		(内)にぶい黄褐色 (外)にぶい黄橙色		焼成やや良 58と同一個体
60	1G-70-19	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	外面は列点	やや密	にぶい黄橙色		
61	2G-7-5	Ⅲ	深鉢	0.7	Ⅱ群6	半截竹管による平行沈線とコンパス文	白色小礫を多く含む	(内)黒褐色 (外)にぶい黄褐色	(内)スス	焼成良好
62	2G-8-1	Ⅲ	深鉢	0.7	〃	半截竹管による平行沈線とコンパス文	白色小礫を多く含む	にぶい黄褐色		焼成良好
63	2G-7-10	Ⅲ	深鉢	0.8	〃	半截竹管による平行沈線とコンパス文　胴部縄文	白色小礫を多く含む	にぶい黄褐色		焼成良好
64	1H-74-18	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅱ群7	細い半截竹管文と爪形文		浅黄橙色		焼成やや不良
65	1H-69-18	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅱ群8	細い半截竹管文	小礫　白色細粒を若干含む	(内)にぶい黄橙色 (外)灰黄褐色	(内)おこげ	
66	1H-94-4	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅲ群1	沈線　三角形陰刻	やや密	褐色		焼成良好
67	1H-84-23	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	環状突起　隆帯　沈線	やや密　砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)黄褐色		焼成良好
68	1G-80-11	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅲ群2	隆帯の貼付け	やや粗	褐灰色		焼成良好
69	1G-79-15	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	隆帯の貼付け	やや粗	にぶい黄橙色		焼成良好
70	1I-35-11	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅲ群3a	半截竹管文と竹管による爪形文	やや粗	にぶい黄橙色	(外)おこげ	焼成やや不良
71	1I-33-20	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	半截竹管文と竹管による爪形文　縄文	やや粗	にぶい黄橙色	(内)おこげ	
72	1I-55-14	Ⅱ	浅鉢	1.0	〃	半截竹管文と竹管による爪形文	粗	浅黄橙色	おこげ	焼成良好
73	1I-44-22	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	半截竹管文と竹管による爪形文	やや粗	(内)にぶい橙色 (外)にぶい褐色	(外)おこげ	焼成やや不良
74	1I-44 (土3) No.28, 36		深鉢	1.1	Ⅲ群3b	半截竹管文と縄文(RL)	やや粗　小礫	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色	おこげ	焼成良好
75	1H-50-15	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	横位の半截竹管文 縄文(RL)	やや粗	にぶい黄褐色	(外)スス	
76	1I-33-21	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	細い半截竹管文と撚糸文	やや粗	にぶい黄褐色	(内)炭化物	
77	1I-44 (土3)No.24		深鉢	0.9	〃	半截竹管文と縄文(LR)	やや粗　白色砂粒	明黄褐色	(内)おこげ	焼成やや不良 78と同一個体
78	1I-44 (土3)No.24		深鉢	0.9	〃	半截竹管文と縄文(LR)	やや粗　白色砂粒	明黄褐色		焼成やや不良 77と同一個体
79	1I-44 (土3)No.34		深鉢	0.8	〃	半截竹管文	やや粗　白色砂粒	(内)明黄褐色 (外)にぶい黄褐色	(外)スス	80と同一個体
80	1I-44 (土3)No.34		深鉢	0.9	〃	半截竹管文	やや粗　白色砂粒	(内)明黄褐色 (外)にぶい黄褐色	(外)スス	79と同一個体
81	1I-62-10	Ⅰ	深鉢	1.0	〃	半截竹管文と縄文(LR)	やや粗　小礫	橙色	(外)おこげ	焼成やや不良
82	1H-59-17	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	半截竹管文と三角形陰刻	やや密　小礫	にぶい橙色		焼成良好
83	1G-73-15	Ⅲ	深鉢	0.7	Ⅲ群3c	半截竹管文　逆B字状文 縄文	やや粗	(内)褐灰色 (外)浅黄橙色	(外)おこげ	焼成やや不良
84	1G-87-10	Ⅲ	深鉢	0.6	〃	半截竹管文　逆B字状文 縄文	やや粗	浅黄橙色		焼成やや不良
85	1I-34-17	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅲ群3d	半截竹管文	やや粗	にぶい褐色	(外)おこげ	焼成やや不良
86	1I-15-18		深鉢	0.8	Ⅲ群3b	縄文地に半截竹管文	金雲母　白色細粒 緻密	(内)褐色 (外)明褐色		焼成良好

別表1　堂付遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	粘土・含有物	色調	二次焼成	備考
87	1I-44 (土3)No.38		深鉢	0.8	Ⅲ群3d	縄文地に半截竹管文 ワラビ状四単位の小突起	やや粗	(内)にぶい橙色 (外)橙色	おこげ	
88	1H-60-7・ 13	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅲ群4	キャリパー形隆帯文 刺突文	やや密　砂粒	にぶい黄橙色	おこげ	焼成良好　口径 17.0cm　器高20.5cm
89	1G-87-25	Ⅲ	深鉢	0.9	Ⅲ群5	内面はミガキ	緻密	(内)黒褐色 (外)にぶい黄橙色	口縁に炭化物	焼成良好
90	1G-87-20	Ⅲ	深鉢	0.8	〃	隆帯文　内面はナデ調整	やや粗	(内)黒褐色 (外)にぶい黄橙色	(内)スス	焼成良好
91	1G-87-20	Ⅲ	深鉢	0.8	〃	隆帯文　内面はナデ調整	やや粗	(内)黒褐色 (外)にぶい黄橙色	(内)スス	焼成良好
92	1I-61-7	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	隆帯文　内面はナデ調整	やや密	(内)灰黄褐色 (外)明褐色	(内)おこげ	焼成やや良
93	1G-87-20	Ⅲ	深鉢	0.7	〃	内面はナデ調整	小礫	にぶい黄橙色	おこげ	焼成やや良
94	1I-15-24 No.17		深鉢	1.1	Ⅲ群6	四単位の山形口縁隆帯 胴部懸すい文	やや粗	黄橙色	おこげ	口径26.5cm
95	1I-34-23	Ⅱ	深鉢	1.5	Ⅳ群1	橋状把手　刺突文	やや粗	明褐色	(外)有	口径17.5cm
96	1G-80-10	Ⅱ	小型鉢	0.5	〃	四単位の橋状把手 所謂突瘤文	やや粗	にぶい黄橙色	二次的な火を受け 胴部は赤味	
97	1G-96-9	Ⅲ	深鉢	0.9	〃	頸部に隆帯を貼付け (キザミのある)	やや粗	浅黄橙色		焼成良好
98	1H-54 (土1) No.153		深鉢	0.5	Ⅳ群2	櫛歯状工具による波状文	砂粒を多量に含む	にぶい黄橙色	(内)おこげ	焼成良好
99	1H-54 (土1) No.132, 134		深鉢	0.6	〃	櫛歯状工具による波状文 内面は丁寧なナデ調整	やや密	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色	おこげ	焼成良好
100	1I-25-13・ 14	K2	深鉢	0.6	〃	櫛歯状工具によるハケ目 内面はナデ調整	やや密	(外)にぶい黄橙色	(外)おこげ	焼成やや良
101	1I-25-13 (土5)No.12		深鉢	0.6	〃	櫛歯状工具によるハケ目 内面はナデ調整	小礫　やや粗	(内)灰黄褐色 (外)にぶい黄橙色	おこげ	焼成やや良
102	1I-35-13	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	櫛歯状工具によるハケ目	小礫　やや粗	(内)浅黄橙色 (外)にぶい褐色	(外)スス	焼成不良
103	1I-25-13	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	櫛歯状工具によるハケ目 内面は丁寧なナデ調整	やや密	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		焼成やや良
104	1I-25-9 (土5)No.11	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	6－13本が一単位の櫛歯状工具によるハケ目 内面はナデ調整	砂粒　やや粗	(内)橙色 (外)にぶい褐色	赤味	焼成良好
105	1I-25-19 (土5)		深鉢	1.0	〃	櫛歯状工具によるハケ目 内面はミガキ	やや粗	(内)橙色 (外)黒褐色	おこげ	
106	1I-25-9 (土5)No.17		深鉢	0.8	〃	櫛歯状工具による曲線的なハケ目 内面は丁寧なナデ調整	砂粒を多く含む やや粗	橙色		焼成やや良
107	1I-25-9 (土5)No.12		深鉢	0.7	〃	櫛歯状工具による曲線的なハケ目 内面は丁寧なナデ調整	砂粒　やや粗	明黄褐色		焼成やや不良
108	1I-25-9 (土5)No.10		深鉢	0.6	〃	直線的なハケ目 内面はナデ調整	小礫を多く含む やや粗	(内)灰褐色 (外)橙色	(外)有	焼成良好
109	1I-25-9 (土5)No.11		深鉢	0.6	〃	櫛歯状工具による直線的なハケ目	やや粗	にぶい褐色	(外)有	焼成良好　110と同一個体　内面は劣化し一部剥落
110	1I-25-8 (土5)		深鉢	0.7	〃	櫛歯状工具による直線的なハケ目	やや粗	(内)橙色 (外)にぶい黄褐色		焼成良好　内面は劣化し一部剥落
111	1I-15-24 (土6)No.10		深鉢	0.6	Ⅳ群3	人耳状把手　平行沈線文	小礫　やや粗	(内)橙色 (外)にぶい黄褐色	(外)スス	
112	1I-25-8	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	隆帯の貼付け	細砂粒　やや密	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色	おこげ	焼成良好
113	1I-25-3	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	隆帯の貼付け(剥落)　平行沈線間を縦に「S」字状の粘土紐貼付け　ミガキ	細砂粒　やや密	にぶい黄橙色	おこげ	焼成良好
114	1I-25-8	K1	深鉢	0.6	Ⅳ群4	隆帯の貼付け　ミガキ	やや粗	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	(外)おこげ	
115	1H-54 (土1)No.78		深鉢	0.5	〃	口縁部は無文帯	やや密	褐灰色	(外)スス	焼成良好
116	1I-25-9 (土5)No.11		浅鉢	0.5	Ⅳ群5	ゆるやかな波状口縁 丁寧なナデ調整	白色細粒　やや密	暗褐色		焼成良好
117	1I-46-2	Ⅲ	浅鉢？	0.7	〃	外面は丁寧なミガキ	やや密	(内)橙色 (外)黒褐色		焼成良好
118	1I-35-17	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	沈線文	やや密	にぶい黄橙色	(外)スス	焼成良好
119	1I-35-11	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅳ群6	2本一単位の平行沈線間に縄文(LR)	砂粒を多く含む やや粗	(内)にぶい黄橙色 (外)にぶい黄褐色	(外)スス	
120	1I-25-20	Ⅱ	鉢？	0.5	〃	内面は丁寧なナデ調整 胴部縄文(胴部下半)	緻密	にぶい黄橙色	(外)スス	焼成良好
121	1I-25-9 (土5)	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	(胴部上半)沈線文	やや粗　砂粒	(内)にぶい橙色 (外)灰褐色	(外)スス	
122	1I-46-6	Ⅱ	鉢	0.7	〃	縄文地に平行沈線 内面は丁寧なナデ調整		(内)明黄褐色 (外)黒褐色	スス	焼成良好
123	1I-25-9・ 12・24 No.11, 12		深鉢	0.6	〃	(胴部上半)沈線文 (胴部下半)ナデ調整	やや密	(内)黒褐色 (外)にぶい褐色	スス	
124	1I-25-5 (土6)No.1		深鉢	0.6	〃	丁寧なナデ調整　沈線	緻密	黒褐色		焼成良好
125	1I-25-9 (土5)No.10		浅鉢？	0.6	〃	半截竹管文？上に縄文と沈線	小礫　やや粗	明黄褐色	(内)おこげ	
126	1H-54 (土1)No.52		浅鉢	0.4	〃	縄文地に平行沈線による区画	やや密	黒褐色	おこげ	焼成良好
127	1I-25-9 (土5)No.11		浅鉢？	0.7	〃	「L」字状短沈線により横位の平行沈線を区切る	やや密	にぶい黄橙色		

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	粘土・含有物	色調	二次焼成	備考
128	1I-44 (土3)No.28		深鉢	1.0	〃	「S」字状短沈線により横位の平行沈線を区切る	小礫 やや粗	(内)にぶい橙色 (外)にぶい黄橙色		焼成やや良
129	1I-25-4 (土6)No.4		深鉢	0.7	〃	「L」字状短沈線で区切る 内面はミガキ	小礫 やや粗	黒褐色		
130	1I-34-15	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	口縁部は無文帯 頸部沈線を「つ」字状の短沈線で区切る	緻密	にぶい黄橙色	(内)おこげ	焼成良好
131	1I-25-19	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	「S」字状短沈線	小礫 やや粗	(内)橙色 (外)褐色	(外)スス	
132	1I-25-9	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	「S」字状短沈線により平行沈線を区切る	やや粗	(内)黄橙色 (外)橙色	(外)スス	焼成やや不良 内側剥落が著しい
133	1I-25-13 (土5)No.12		深鉢	0.4	〃	「つ」字状短沈線	小礫 やや粗	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	おこげ	
134	1I-25-19	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	「S」字状短沈線	砂粒 やや粗	(内)明褐色 (外)褐灰色		
135	1I-25-4	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	「S」字状短沈線	やや粗	(内)橙色 (外)褐灰色		焼成良好 外面は劣化して器面は荒れている
136	1I-35-6	Ⅱ	小型鉢	0.5	〃	「つ」字状短沈線により区切る	緻密	(内)明黄褐色 (外)にぶい褐色	(内)おこげ	
137	1I-33-19・20	Ⅱ	鉢	0.6	〃	縄文地に平行沈線 スタンプ文	砂粒を多く含む やや密	(内)明黄褐色 (外)灰黄褐色	おこげ	焼成良好
138	1I-46-3	Ⅱ	注口	0.6	Ⅳ群7	6本一単位の沈線 渦巻状沈線	やや粗	(内)にぶい褐色 (外)褐色		焼成やや良
139	1I-46-3	Ⅱ	注口	0.6	〃	沈線と渦巻文	やや粗	にぶい褐色		
140	1I-46-3	Ⅱ	注口	0.7	〃	7本一単位の沈線	やや粗	(内)橙色 (外)にぶい褐色		
141	1I-46-3	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅳ群8	平行沈線間に斜位の沈線を充填	砂粒 やや密	(内)明褐色 (外)褐色		焼成やや良 142と同一個体
142	1I-46-3	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	平行沈線間に斜位の沈線を充填	砂粒 やや密	(内)褐色 (外)灰褐色		焼成やや良 141と同一個体
143	1H-54 (土1) No.98, 40		浅鉢	0.4	Ⅳ群9	内面に平行沈線4本とその間に刻目	緻密	(内)にぶい黄褐色 (外)灰黄褐色	(内)おこげ	焼成良好
144	1H-54 (土1)No.38		浅鉢	0.5	〃	内面に平行沈線4本とその間に刻目	緻密	黒褐色		焼成良好
145	1H-54 (土1)No.37		浅鉢	0.6	〃	内面に沈線と刻目	緻密	(内)黒褐色 (外)にぶい黄褐色		焼成良好
146	1H-54 (土1)No.34		浅鉢	0.7	〃	内面に平行沈線 隆帯部に刻目 ミガキ	緻密	黒色		焼成良好
147	1H-54 (土1)No.41		浅鉢	0.6	〃	内面に平行沈線 隆帯部に刻目 ミガキ	緻密	黒褐色		焼成良好
148	1H-54 (土1)No.36		浅鉢	0.6	〃	内面に平行沈線 隆帯部に刻目 ミガキ	緻密	(内)にぶい橙色 (外)褐灰色		焼成良好
149	1H-54 (土1)No.39		浅鉢	0.6	〃	内面に平行沈線 隆帯部に刻目 ミガキ	緻密	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色		焼成良好
150	1H-54 (土1)No.35		浅鉢	0.6	〃	内面に沈線	緻密	黒褐色		焼成良好
151	1H-54 (土1)No.91		浅鉢	0.4	〃	内面に平行沈線3本	やや密	にぶい黄橙色		焼成良好 剥落が著しい
152	1H-54 (土1) No.100		浅鉢	0.5	〃	内面に平行沈線3本	やや密	(内)明黄褐色 (外)黒褐色		焼成良好 剥落が著しい
153	1H-71-21	Ⅲ	浅鉢	0.6	〃	(外)4本一単位の平行沈線 (内)幅広の沈線	緻密	(内)にぶい黄褐色 (外)黒褐色	スス	焼成良好
154	1H-54 (土1)No.18		深鉢	0.6	Ⅳ群10	沈線文と縄文 内面は丁寧なナデ調整	緻密	(内)にぶい橙色 (外)にぶい黄橙色	(外)おこげ	焼成良好
155	1H-54 (土1) No.22, 23		深鉢	0.6	〃	一条の沈線で区画する 無文帯は丁寧なナデ調整	緻密	にぶい黄橙色	口縁内側におこげ	焼成良好
156	1H-54 (土1)No.16		深鉢	0.6	〃	縄文(RL) 内面はナデ調整	緻密	にぶい黄橙色		焼成やや不良
157	1I-44-18	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅳ群11	内面はナデ調整	やや粗	(内)明黄褐色 (外)黒褐色	(外)スス	焼成やや不良
158	1H-71-8		深鉢	0.5	〃	縄文地に直線や曲線の沈線文	砂粒 やや密	にぶい褐色		焼成良好
159	1H-71-10	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	縄文地に直線や曲線の沈線文	砂粒 やや密	(内)にぶい赤褐色 (外)褐色		焼成良好
160	1H-47	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	横位の沈線文 (内)丁寧なナデ調整 (外)無文はナデ調整	砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		焼成良好 163と同一個体
161	1H-57	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	横位の沈線文 くずれたコンパス文	砂粒	(内)にぶい黄橙色 (外)黒褐色		焼成良好
162	SX1(4)		深鉢	0.5	Ⅳ群12	縄文地に細い棒状工具による沈線	砂粒 やや粗	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色	(外)おこげ	焼成やや不良
163	1G-95-10	Ⅱ	甕形	0.6	〃	縄文地に細い沈線	やや粗	にぶい黄橙色		焼成やや不良 160と同一個体
164	1I-45-9	Ⅱ	注口		Ⅳ群13	磨消縄文 「S」字状突起	緻密	淡黄色	(外)スス	口径8.5cm、器高12.5cm、底径5.2cm
165	1H-45 (土3)No.30		深鉢	1.2	〃	山単位の波状口縁 縄文のみ(RL)	砂粒を多く含む やや粗	(内)にぶい黄橙色 (外)浅黄橙色	有	焼成やや不良 口径32.0cm、器高48.5cm、底径13.5cm
166	1H-64-12	Ⅱ	深鉢	0.4	Ⅴ群1	口縁内側に横位の沈線 浮線文	緻密	橙色	(外)スス	焼成良好
167	1H-74-8	Ⅱ	深鉢	0.4	〃	浮線文	緻密	(内)にぶい黄橙色 (外)褐色		焼成良好

別表1　堂付遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
168	1I-43-22	K1	深鉢	0.6	V群2	口縁部横位の網目状撚糸文　口縁小突起	緻密	にぶい黄橙色		焼成良好 168～171は同一個体
169	1I-43-22	K1	深鉢	0.7	〃	口縁部横位の網目状撚糸文　口縁小突起	緻密	にぶい黄橙色		168～171は同一個体
170	1I-43-22	K1	深鉢	0.6	〃	横位の網目状撚糸文	緻密	にぶい黄橙色		焼成良好 168～171は同一個体
171	1I-43-22	K1	底部	1.1	〃	無文	緻密	にぶい黄橙色		焼成良好 168～171は同一個体 底径11.0cm
172	1I-25-18	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅵ群1a	縄文(LR) 内面は丁寧なナデ調整	やや密	(内)明黄褐色 (外)にぶい橙色	有	
173	1I-25-13 (12)		深鉢	0.6	〃	縄文(LR) 内面は丁寧なナデ調整	やや密	(内)明黄褐色 (外)灰黄褐色		
174	1H-54 (75)		深鉢	0.7	〃	原体の太い(LR)	小礫	(内)褐灰色 (外)にぶい橙色	有	
175	1H-54 (81)		深鉢	0.6	〃	原体の太い(LR)	小礫	にぶい黄橙色	有	
176	1I-25-13 (17)		深鉢	0.7	〃	縄文(LR) 内面は丁寧なナデ調整	小礫	(内)にぶい黄橙色 (外)褐灰色		
177	1H-54		深鉢	0.5	〃	縄文	白色細粒	にぶい黄橙色	(外)スス	
178	1I-25-9	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	縄文(LR)	やや粗	橙色	有	口縁部やや肥厚
179	1I-46-9	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	縄文(LR) 内面はミガキ	白色細粒	にぶい褐色		口縁部内側に沈線
180	1I-44-3	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	縄文(RL)　口唇部肥厚	小礫　やや粗	黒褐色		
181	1I-35-9	Ⅲ	深鉢	0.6	〃	縄文(RL)　口縁部に1本の平行沈線	やや粗	にぶい黄橙色	有	劣化し、もろい
182	1H-49-10	Ⅱ	深鉢	0.6	Ⅵ群1b	撚糸文　口縁部は横ナデによる無文帯	やや粗	にぶい黄橙色		
183	1I-25-14		深鉢	0.6	〃	撚糸文施文後、口縁部はナデによる無文帯	小礫	(内)褐灰色 (外)にぶい褐色	有	
184	1I-25-9 (土5)No.11		深鉢	0.8	〃	無文	小礫　やや粗	(内)明黄褐色 (外)にぶい黄褐色		
185	1I-25-14 (13)		深鉢	0.6	〃	撚糸文	小礫	(内)にぶい赤褐色 (外)暗赤褐色		
186	1I-25-18 (土5)No.13		深鉢	0.7	〃	撚糸文	やや粗	にぶい褐色		
187	1I-36-6	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	折り返し口縁 口縁部肥厚	小礫　粗	にぶい黄橙色		
188	1I-46-6	Ⅱ	深鉢	1.2	〃	折り返し口縁 口縁部肥厚	小礫	にぶい黄橙色		
189	1H-70	Ⅱ	深鉢	0.6	Ⅵ群1c	綾絡文	小礫	にぶい黄橙色		
190	1H-70	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	綾絡文	小礫　やや粗	にぶい黄橙色		
191	1H-54・55 (土1)No.88		深鉢	0.7	Ⅵ群1d	無文	小礫　粗	(内)橙色 (外)灰褐色		
192	1H-55・55 (土1)No.88		小型鉢	0.6	〃	ハケ目施文後ナデ調整	小礫　やや粗	(内)にぶい橙色 (外)にぶい褐色	(外)スス	口径推定17.0cm
193	1I-25-9 (15)		底部	1.2	Ⅵ群2	笹の葉痕	小礫	にぶい橙色		底径12.0cm
194	1I-43-15	Ⅱ	底部	0.8	〃	網代痕と笹の葉痕	やや粗	浅黄橙色		底径10.2cm
195	1I-25-14 (19)		底部	1.8	〃	網代痕？	小礫　粗	(内)橙色 (外)明黄褐色		底径9.0cm
196	1I-46-1 (焼3)		底部	1.4	〃	網代痕	小礫　やや密	橙色	(内)おこげ	底径12.6cm
197	1I-25　(焼4)		底部	1.1	〃	網代痕　胴部は撚糸文	やや粗	(内)橙色 (外)にぶい黄橙色	(外)スス	底径10.1cm
198	1I-25-13 (21)		底部	1.3	〃	ゴザ痕？	やや粗	(内)褐灰色 (外)黄橙色	(内)スス	底径13.0cm
199	1H-25-14 (117)		底部	0.9	〃	網代痕	小礫　粗	(内)にぶい橙色 (外)橙色		底径9.8cm
200	1I-25-18 (13)		底部	1.5	〃	網代痕	やや密	にぶい黄橙色		底径13.0cm
201	1H-52-25	Ⅱ	底部	0.6	〃	網代痕	やや密	にぶい黄橙色		底径8.2cm
202	1I-40-13	Ⅱ	底部	2.1	〃	無文	やや密	黄橙色		底径10.6cm
203	2G-7-4	Ⅲ	土製円板	0.7		縄文	小礫	浅黄橙色		やや劣化気味で文様不明
204	1G-69-16	Ⅲ	土製円板	0.9		縄文地に幅広の沈線	小礫	にぶい黄橙色		
205	1I-45-8 (41)		土偶	2.7		側面に五条の連続刺突文	小礫	灰黄褐色		
206	1H-63-17		高台？	1.2		無文	やや密	橙色		
207	1I-34-11 (38)		注口	1.0		無文　丁寧なナデ調整	小礫　やや密	にぶい橙色		注口土器の注口部
208	1G-79-11		甕	0.6		格子目状叩き目 内面は同心円文	やや粗	褐灰色		須恵器

別表２　堂付遺跡出土石器観察表

No.	器　種	出土地点	分類	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石　材	状態	備　考
1	石鏃	1 H－64－2	A	Ⅱ	(2.1)	1.4	0.4	(1.3)	チャート	欠	先端欠損
2	石鏃	1 I－43－1	＋	Ⅱ	2.2	1.6	0.3	1.0	ガラス質安山岩	完	
3	石鏃	1 I－45－5	＋		2.6	1.1	0.2	0.6	頁岩	完	
4	石鏃	1 G－96－5	A	Ⅲ	2.6	1.4	0.4	0.9	緑色凝灰岩	完	
5	石鏃	1 H－54－20	B	Ⅲ	(4.3)	1.6	0.5	(2.6)	凝灰岩	欠	先端・脚部欠損
6	石鏃	1 I－45－5	＋	Ⅲ	2.3	1.6	0.4	0.9	黒曜石	完	
7	石鏃	1 G－98－25		Ⅲ	3.2	2.4	0.6	3.9	ガラス質安山岩	完	
8	石鏃	1 G－96－7		Ⅲ	4.7	2.9	1.9	14.0	ガラス質安山岩	完	
9	石鏃	1 G－86－22		Ⅳ	3.5	(2.1)	0.8	(5.7)	頁岩	欠	右1/3欠損
10	石鏃	1 G－96－11		Ⅲ	4.7	3.0	1.0	12.5	頁岩	完	
11	ピエス・エスキーユ	1 G－89－1		Ⅳ	2.6	1.9	0.6	3.3	珪若英	?	
12	ピエス・エスキーユ	1 H－61－20		Ⅲ	4.7	4.1	1.2	21.7	珪若英	?	
13	ピエス・エスキーユ	1 G－96－10		Ⅲ	2.7	1.5	0.7	4.9	珪若英	?	
14	打製石斧	1 H－72－6	A	Ⅲ	5.1	3.4	1.2	21.6	頁岩	完	
15	打製石斧	1 G－98－8	＊	Ⅲ	5.8	3.5	1.3	26.1	チャート	完	
16	打製石斧	1 I－25－10	＊	Ⅲ	7.1	4.7	1.2	49.0	頁岩	完	
17	打製石斧	2 G－6－12	＊	Ⅲ	7.3	6.2	1.6	59.0	ガラス質安山岩	完	
18	打製石斧	1 H－57－11	＊	Ⅲ	11.9	6.2	2.3	135.9	砂岩岩	完	使用痕(磨耗)有
19	打製石斧	1 I－44－10	＊	Ⅲ	9.2	5.3	2.8	155.8	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
20	打製石斧	2 G－6－21	＊	Ⅲ	7.6	4.5	2.2	81.5	ホルンフェルス	完	
21	打製石斧	1 H－46－24	＊	Ⅲ	11.6	7.5	2.8	187.7	頁岩	基完	
22	打製石斧	1 I－35－6	＊	Ⅲ	10.4	5.5	2.1	108.8	硬質砂岩	完	
23	打製石斧	1 G－78－3	＊	Ⅲ	7.1	5.1	2.2	87.5	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
24	打製石斧	1 H－69－12	＊	Ⅲ	8.1	4.5	2.1	89.8	粘板岩	完	使用痕(磨耗)有
25	打製石斧	1 I－55－12	＊	Ⅲ	9.1	4.7	1.4	73.2	頁岩	完	
26	打製石斧	1 G－97－9	＊	Ⅲ	7.7	5.6	3.4	156.6	頁岩	完	
27	打製石斧	1 H－46－24	＊	Ⅲ	(10.4)	7.1	(3.6)	(192.1)	頁岩	欠	刃部欠損
28	打製石斧	1 H－66－25	＊	Ⅱ	10.9	4.5	1.7	100.4	緑色頁岩	完	
29	打製石斧	1 G－97－14	＊	Ⅲ	10.8	4.7	1.2	70.3	頁岩	完	
30	打製石斧	1 I－45－1	＊	Ⅲ	11.4	5.0	1.5	91.9	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
31	打製石斧	1 I－45－6	＊	Ⅲ	11.2	4.7	1.9	100.9	ホルンフェルス	完	使用痕(磨耗)有
32	打製石斧	1 I－53－10	＊	Ⅲ	12.8	6.2	2.1	194.9	安山岩	完	
33	打製石斧	1 I－45－9	＊	Ⅲ	12.9	6.0	2.5	195.6	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
34	打製石斧	1 I－35－23	＊	Ⅲ	13.4	4.6	2.1	173.2	安山岩	破	
35	打製石斧	1 I－35－22	＊	Ⅲ	13.1	6.0	2.3	183.6	粘板岩	完	
36	打製石斧	1 I－53－8	＊	Ⅲ	13.4	5.4	2.3	210.3	粘板岩	完	使用痕(磨耗)有
37	打製石斧	1 I－54－2	B	Ⅲ	9.9	5.7	1.9	102.5	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
38	打製石斧	1 I－53－10	＊	Ⅲ	9.6	6.1	1.7	101.9	硬質砂岩	破	
39	打製石斧	1 I－62－2	＊	Ⅲ	(11.3)	5.2	0.9	(47.4)	頁岩	欠	刃部欠損 磨痕
40	打製石斧	1 I－35－16	＊	Ⅲ	10.8	5.9	3.2	177.7	結晶片岩	完	
41	打製石斧	1 I－53－8	＊	Ⅲ	12.4	5.8	2.9	166.7	頁岩	破	
42	打製石斧	1 I－34－25	＊	Ⅲ	18.8	8.2	4.3	603.4	粘板岩	破	
43	打製石斧	1 I－35－9	Cb	Ⅲ	(8.1)	(4.2)	1.3	(45.3)	粘板岩	欠	刃部欠損 磨痕
44	打製石斧	1 I－45－22	＊	Ⅱ	(8.7)	(4.7)	1.8	(60.9)	頁岩	欠	刃部欠損
45	打製石斧	1 I－53－8	Cb	Ⅲ	12.5	7.8	3.0	240.6	頁岩	破	
46	打製石斧	1 I－34－10	Ca	Ⅲ	11.0	4.1	2.0	116.8	頁岩	完	使用痕(磨耗)有
47	打製石斧	1 K－60	＊	Ⅲ	13.5	6.0	2.6	223.2	粘板岩	完	使用痕(磨耗)有
48	打製石斧	1 I－34－15	＊	Ⅲ	9.8	6.3	2.0	136.0	花崗岩	完	
49	打製石斧	1 H－66－25	＊	Ⅱ	12.8	5.8	2.1	191.6	安山岩	完	
50	打製石斧	1 I－53－8	＊	Ⅲ	15.8	6.7	3.8	415.5	頁岩	破	
51	打製石斧	1 K－64－22	＊	Ⅱ	11.4	5.1	1.9	131.4	粘板岩	完	
52	打製石斧	1 I－25－4	Cb	Ⅲ	7.9	6.2	2.1	93.3	安山岩	完	
53	打製石斧	1 I－35－11	＊	Ⅲ	9.8	5.3	2.1	113.6	頁岩	完	
54	打製石斧	1 I－35－7	＊	Ⅲ	10.7	5.0	1.6	87.0	粘板岩	完	使用痕(磨耗)有
55	打製石斧	1 G－80－16	＊	Ⅱ	9.3	4.9	1.6	79.8	粘板岩	完	
56	打製石斧	1 I－34－15	＊	Ⅲ	9.9	6.2	2.0	101.4	花崗岩	完	
57	打製石斧	1 H－51－10	＊	Ⅲ	10.8	5.2	1.9	100.5	安山岩	完	
58	打製石斧	1 K－76－8	Cb	Ⅱ	(9.7)	6.4	2.1	(134.3)	粘板岩	欠	刃部欠損
59	打製石斧	1 I－35－16	＊	Ⅲ	9.3	5.3	2.3	109.1	黒色頁岩	完	
60	打製石斧	1 I－45－6	＊	Ⅲ	12.0	6.7	3.5	278.6	ガラス質安山岩	完	使用痕(磨耗)有
61	打製石斧	1 I－53－20	D	Ⅲ	14.0	6.5	2.9	424.5	安山岩	完	
62	打製石斧	1 G－89－1	＊	Ⅲ	(14.3)	5.2	2.1	(175.5)	硬質砂岩	欠	刃部欠損
63	打製石斧	1 K－81－30	＊	Ⅲ	11.2	4.7	1.9	163.4	花崗岩	完	
64	打製石斧	1 G－97－25	＊	Ⅲ	22.9	9.6	4.0	1,450.0	閃緑岩	完	
65	打製石斧	1 G－88－19	＊	Ⅲ	20.4	10.4	3.7	1,190.0	硬質砂岩	完	
66	敲石石斧	1 I－43－10		Ⅲ	3.7	0.8	0.5	3.1	輝緑岩	完	
67	敲石石斧	1 G－96－11		Ⅳ	12.3	6.3	3.3	397.7	ガラス質安山岩	完	

別表3　百塚東E遺跡出土土器観察表

No.	器種	出土地点	分類	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	状態	備考
68	磨製石斧	1G−86−17		Ⅲ	(11.6)	(8.1)	(3.8)	(492.8)	安山岩	欠	1/2欠損
69	磨製石斧	1H−76−16		Ⅲ	10.5	5.0	2.3	199.5	蛇紋岩	完	
70	磨製石斧	1G−86−20		Ⅲ	(8.5)	(6.2)	(2.9)	(226.7)	安山岩	欠	1/2欠損
71	磨製石斧	1G−96−9		Ⅲ	15.1	6.5	2.6	334.1	安山岩	略完	
72	両面加工石器	1H−58		Ⅱ	8.5	6.6	3.4	201.8	ガラス質安山岩		使用痕(磨耗)有
73	両面加工石器	1G−99		Ⅲ	8.6	7.3	3.6	231.7	頁岩		
74	不定形石器	1I−53−8		Ⅲ	11.3	4.8	1.6	74.8	ホルンフェルス		
75	不定形石器	1G−69−14		Ⅲ	5.9	5.1	1.7	44.8	ガラス質安山岩		
76	不定形石器	1G−86−25		Ⅲ	5.1	4.8	1.7	39.9	頁岩		
77	不定形石器	1G−96−6		Ⅲ	4.8	3.0	1.4	14.5	頁岩		
78	不定形石器	1I−53−22		Ⅲ	9.4	4.0	2.2	72.1	ガラス質安山岩		
79	不定形石器	1G−87−22		Ⅲ	6.8	5.3	1.3	26.8	頁岩		
80	不定形石器	1I−53−23		Ⅱ	7.1	5.8	1.5	67.8	ガラス質安山岩		
81	不定形石器	1H−60−23		Ⅱ	7.4	5.9	1.4	58.9	頁岩		
82	剥片	1H−55−21		Ⅲ	6.9	4.6	1.4	43.5	頁岩		
83	不定形石器	1G−80−19		Ⅲ	7.7	5.8	2.0	63.4	頁岩		
84	不定形石器	1G−80−16		Ⅱ	17.1	7.0	2.8	284.0	粘板岩		
85	剥片	1I−34−16		Ⅲ	14.1	4.7	2.0	127.1	安山岩		
86	不定形石器	1I−53−12		Ⅲ	7.4	4.8	1.7	45.6	頁岩		
87	不定形石器	1G−79−11		Ⅲ	8.7	5.4	1.5	70.8	頁岩		
88	石錘	1G−96−1		Ⅲ	8.0	5.7	2.3	139.7	砂岩	完	
89	石錘	1G−89−14		Ⅳ	6.8	5.6	1.8	104.2	花崗岩	完	
90	石錘	2G−7−5		Ⅲ	7.3	6.3	2.1	130.5	安山岩	完	
91	石錘	1G−88−2		Ⅲ	8.1	6.7	2.3	151.7	砂岩	完	
92	石錘	1G−97−22		Ⅲ	9.7	7.8	2.6	309.0	安山岩	完	
93	石錘	1H−53−23		Ⅱ	9.4	8.9	2.2	386.3	安山岩	完	
94	石錘	1H−57−6		Ⅱ	10.2	8.1	3.4	416.0	安山岩	完	
95	石錘	1I−35−18		Ⅲ	10.1	9.3	2.8	373.4	安山岩	完	
96	石錘	1H−60−17		Ⅱ	12.2	9.7	2.2	399.3	安山岩	完	
97	石錘	1G−89−11		Ⅲ	10.0	8.7	2.5	314.6	安山岩	完	
98	石錘	1G−87−22		Ⅲ	10.2	7.1	3.0	263.6	安山岩	完	
99	石錘	2G−7−2		Ⅲ	(6.9)	7.0	2.6	(142.2)	安山岩	欠	
100	石錘	1G−70−4		Ⅲ	(5.0)	5.2	1.7	(61.9)	安山岩	欠	
101	剥片	1G−70−11		Ⅲ	8.4	4.2	1.9	46.0	頁岩		
102	剥片	1H−74−10		Ⅲ	6.6	3.1	1.3	23.5	頁岩		
103	剥片	1G−69−9		Ⅲ	6.3	5.8	1.4	32.3	頁岩		
104	剥片	1G−96−4		Ⅲ	5.8	5.2	1.3	38.8	頁岩		
105	剥片	1G−96−19		Ⅲ	8.7	6.1	1.8	82.1	頁岩		
106	磨石類	1G−79−17	A	Ⅲ	13.5	5.6	5.8	664.7	砂岩	完	
107	磨石類	1I−45−22	〃	Ⅲ	14.0	(10.5)	3.5	(813.4)	安山岩	欠	1/2欠損　被熱
108	磨石類	1I−25−14	〃	Ⅲ	19.8	16.9	4.4	2,040.0	安山岩	完	
109	磨石類	1G−89−11	〃	Ⅲ	26.7	16.0	3.5	2,470.0	安山岩	完	
110	磨石類	1H−70−15	B	Ⅱ	10.2	8.9	5.3	608.5	安山岩	完	
111	磨石類	1I−61−7	C	Ⅱ	10.7	9.5	4.8	715.2	安山岩	完	
112	石皿	1I−25−18		Ⅲ	20.3	(19.5)	5.2	(2,770.0)	花崗岩	欠	1/2欠損

別表3　百塚東E遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
1	16B-62-20	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.9	Ⅰ-1-a	楕円押型文	やや粗　繊維 金雲母	(外)暗褐色 (内)褐色	(外)炭化物	1−3は同一個体
2	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	楕円押型文	やや粗　繊維 金雲母	(外)暗褐色 (内)褐色	(外)炭化物	1−3は同一個体
3	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	楕円押型文	やや粗　繊維 金雲母	(外)暗褐色 (内)褐色	(外)炭化物	1−3は同一個体
4	16B-52-20	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	楕円押型文	やや粗	褐色	(外)炭化物少量	
5	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	楕円押型文　1−4より 楕円がやや小さい 内面調整丁寧	やや粗　繊維	(外)橙色 (内)黒褐色	(外)炭化物少量	5−8は同一個体
6	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	楕円押型文　1−4より 楕円がやや小さい 内面調整丁寧	やや粗　繊維	(外)橙色 (内)黒褐色		外面磨耗・剥落 5−8は同一個体
7	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	楕円押型文	やや粗　繊維	(外)橙色 (内)黒褐色		外面剥落 5−8は同一個体
8	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	楕円押型文	やや粗　繊維	(外)橙色 (内)黒褐色		5−8は同一個体
9	16B-33-16	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅰ-1-b	ネガティブ菱目押型文 幅1.7cmの原体を横位に 回転	密　砂粒子	(外)にぶい橙色 (内)褐色		10と同一個体
10	16B-62-20	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	ネガティブ菱目押型文	密　砂粒子	(外)暗褐色 (内)褐色	(外)スス少量	9と同一個体
11	16B-44-18	Ⅰ	深鉢	0.8	Ⅰ-2-a	沈線　貝殻腹縁文	粗　繊維　砂礫	(外)暗褐色 (内)橙色		

No.	出土地点	層　位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色　調	二次焼成	備　考
12	16B-34-17	Ⅰ'	深鉢 口縁部	0.6	Ⅰ-2-b	擬似縄文 背竹管状工具による沈線	密	(外)褐灰色 (内)浅黄橙色		
13	16B-72-4	Ⅲ	深鉢	0.6	Ⅰ-3	沈線　貝殻腹縁文 内面指頭痕有　調整丁寧	密　砂礫　石英	(外)にぶい橙色 (内)黒褐色	(内)スス	
14	16B-53-7	Ⅲ	深鉢 口縁部	0.6	Ⅱ-1	非結束羽状縄文 内面指頭痕有	密	(外)黒褐色 (内)にぶい黄褐色	(外)スス (内)炭化物	14～17は同一個体
15	16B-53-7	Ⅲ	深鉢	0.5	Ⅱ-1	非結束羽状縄文 内面指頭痕有	密	(外)にぶい黄橙色 (内)黒褐色	(内)炭化物	14～17は同一個体
16	16B-53-7	Ⅲ	深鉢	0.4	〃	非結束羽状縄文 内面指頭痕有	密	(外)にぶい黄橙色 (内)黒褐色	(外)スス	14～17は同一個体
17	16B-53-8	Ⅲ	深鉢	0.5	〃	非結束羽状縄文 内面指頭痕有	密	(外)にぶい黄橙色 (内)黒褐色	(外)炭化物	14～17は同一個体
18	16B-63-2	Ⅰ	深鉢 口縁部	0.8	Ⅲ-1	半隆起線文　U字・菱目文　縄文　三角形陰刻	密　褐色粒子	褐灰色		18～20は同一個体
19	16B-52-5	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	B字・逆B字状文　縄文 半隆起線文	密　褐色粒子	褐灰色		18～20は同一個体
20	16B-53-17	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	半隆起線文　縄文	密　褐色粒子	(外)にぶい橙色 (内)灰褐色		18～20は同一個体
21	16B-43-24	Ⅰ'	深鉢 口縁部	0.9	〃	半隆起線文　縄文 半隆起線上に爪形を連続して施文	密	にぶい橙色		22と同一個体
22	16B-53-12	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	半隆起線文　格子目文 三叉文	密　灰色粒子	灰褐色		21と同一個体
23	16B-62-24		深鉢	0.9	〃	沈線　半隆起線文	密	灰褐色		
24	16B-53-12	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	三角形陰刻　縄文	密	にぶい橙色	(外)スス	
25	16B-P下	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.7	〃	三角形陰刻　縄文 半隆起線文	やや粗	にぶい橙色		
26	16B-62-18	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.0	Ⅲ-2-a	爪形文　半隆起線文 横位の無文帯 口縁部突起	やや粗	黄橙色		
27	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	爪形文　小突起 半隆起線文	やや密	黄橙色		
28	16B-62-4	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	半隆起線文　爪形文 縄文	やや密	黄橙色		
29	小千谷BP 確認175トレンチ	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文　縄文	粗	にぶい黄橙色	(外)スス	
30	16B-43-22	Ⅲ	深鉢	0.9	〃	半隆起線上に爪形を連続して施文　縄文	やや密	灰黄褐色		
31	16B-62-9	Ⅲ	深鉢	0.9	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい橙色		
32	16B-63-11	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい橙色		
33	16B-72-19	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	橙色		
34	16B-63-21	Ⅰ'	深鉢	0.8	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい黄橙色		
35	16B-63-2	Ⅰ	深鉢	0.8	〃	爪形文　半隆起線文 内面調整丁寧	やや密	にぶい黄橙色		
36	16B-62-18	Ⅲ	深鉢	0.9	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい黄橙色		
37	16B-P下	Ⅲ	深鉢	0.7	〃	爪形文　半隆起線文 横位無文帯	やや密	(外)にぶい黄橙色 (内)褐灰色		
38	16B-63-11	Ⅰ'	深鉢	0.8	〃	爪形文　半隆起線文	密	橙色		
39	16B-53-2	Ⅲ	深鉢 口縁部	1.2	〃	爪形文　半隆起線文	粗　褐色粒子を多く含む	(外)黒褐色 (内)褐灰色		
40	16B-62-20	Ⅰ'	深鉢	1.0	〃	縄文　沈線	やや粗	にぶい黄橙色	(外)スス	
41	16B-72-8	Ⅲ	深鉢	1.1	〃	縄文　沈線	やや密	にぶい橙色		
42	16B-72-3	Ⅲ	深鉢	0.8	〃	三叉文　半隆起線文 縄文　格子目文	やや粗	橙色		
43	16B-P下	Ⅲ	深鉢	1.2	〃	半隆起線文　格子目文	やや粗	にぶい黄橙色		
44	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	半隆起線文　爪形文 格子目文	やや粗	(外)黄橙色 (内)灰褐色	(内)スス少量	
45	16B-53-1	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	半隆起線文　爪形文 格子目文	やや密	黄橙色		
46	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	B字状文　半隆起線文 縄文	やや密	にぶい橙色		
47	16B-72-18	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	斜格子目文　半隆起線文	やや密	(外)にぶい橙色 (内)灰褐色		
48	16B-53-18	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	半隆起線文　爪形文 突起　縄文	やや粗	黄色		
49	16B-52-18	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.1	〃	三叉文　口縁部突起 半隆起線文　爪形文	やや粗	(外)黄色 (内)橙色		
50	16B-53-8	Ⅰ	深鉢	1.2	〃	半隆起線文　爪形文 突起	やや粗	黄色		
51	16B-52-10	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	斜格子目文	やや粗	浅黄橙色		
52	16B-72-8	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.6	〃	玉抱き三叉文	粗	にぶい黄橙色		
53	16B-63-2	Ⅰ	深鉢 口縁部	1.2	〃	三叉文　半隆起線文	やや粗　橙色粒子	にぶい黄橙色		
54	16B-52-20	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.8	〃	三叉文の裏面に未貫通孔 半隆起線文　爪形文	粗	(外)橙色 (内)黄橙色		55と同一個体
55	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	突起　半隆起線文　縄文	粗	(外)橙色 (内)黄橙色		54と同一個体
56	16B-P下	Ⅲ	深鉢	0.9	〃	縄文　半隆起線文	粗　砂粒子	橙色		
57	16B-59-22	Ⅲ	深鉢	1.0	〃	幅広の横位無文帯 半隆起線文	やや粗　橙色粒子	(外)橙色 (内)にぶい橙色		

別表3　百塚東E遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
58	小千谷BP確認175トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	玉抱き三叉文 半隆起線文　縄文	やや密　橙色粒子	にぶい黄橙色		
59	16B-62-22	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	無文帯　半隆起線文 縄文	やや密　橙色粒子	にぶい黄橙色		
60	16B-53-8	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.2	〃	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい黄橙色		
61	16B-53-11	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	〃	半隆起線文　縄文？	やや密　金雲母 石英　砂粒子	にぶい黄橙色		
62	16B-53-8	Ⅰ	深鉢	0.8	〃	爪形文　半隆起線文	密	橙色		キャリパー形
63	16B-63-22	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.6	Ⅲ-2-a	縄文　半隆起線文	密	橙色		
64	16B-72-19	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.1	〃	半隆起線文	密	(外)褐色 (内)橙色		
65	16B-72-3	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.0	〃	半隆起線文　縄文	密	(外)黒褐色 (内)にぶい黄橙色	(外)スス多量	
66	16B-62-8	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	縄文　沈線	粗　砂粒子	にぶい黄橙色		
67	16B-63-11	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	半隆起線文	粗　橙色粒子	褐灰色		
68	16B-72-4	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文　縄文	やや粗	明赤褐色		
69	16B-72-8	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	半隆起線文	密　大粒褐色粒子	(外)浅黄橙色 (内)黒褐色		
70	16B-P下	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文　縄文 内面調整丁寧	やや粗	黄色		
71	16B-53-23	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	半隆起線文	密	にぶい黄橙色		
72	16B-52-19	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	V字状はりつけ隆帯上に竹管で押圧　半隆起線文	やや粗	にぶい黄橙色		
73	16B-P下	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.4	〃	口縁部突起頂上部に沈線	やや粗	にぶい黄橙色		
74	16B-52-24	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	半隆起線文　粗製	粗	黄色		
75	16B-62-24	Ⅰ	深鉢	1.1	〃	半隆起線文にキザミ	粗	黄色		76と同一個体
76	16B-43-24	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文にキザミ	粗	黄色		75と同一個体
77	16B-52-19	Ⅱ	浅鉢	1.0	〃	半隆起線文　縄文 内面調整丁寧　赤彩	密	(外)黄色 (内)赤彩		78と同一個体
78	16B-53-6	Ⅱ	浅鉢	0.8	〃	半隆起線文　縄文 内面調整丁寧　赤彩	密	(外)黄色 (内)赤彩		77と同一個体
79	16B-52-10	Ⅱ	深鉢	1.5	〃	縄文　内面調整丁寧 赤彩	密	(外)淡黄色 (内)赤彩		磨耗が著しい
80	16B-62-8	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	Ⅲ-2-b	小突起　半隆起線文　結束羽状縄文(両翼状施文)	密	橙色		80～83は同一個体
81	16B-62-8	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	結束羽状縄文 (両翼状施文)	密	橙色	(外)スス	80～83は同一個体
82	16B-62-8	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	結束羽状縄文 (両翼状施文)	密	橙色		80～83は同一個体
83	16B-62-8	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	結束羽状縄文 (両翼状施文)	密	橙色		80～83は同一個体
84	16B-72-12	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	結束羽状縄文 (両翼状施文)	やや密	(外)にぶい黄褐色 (内)橙色	(外)スス	
85	16B-72-8	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅲ-2-c	先の丸い棒状工具で山形文に沈線で施文	密　金雲母	明褐色		
86	16B-62-23	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	〃	背竹管押し引き 内面調整丁寧	やや密	(外)橙色 (内)暗赤褐色	(外)スス	
87	16B-52-5	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	背竹管押し引き	やや密　金雲母	明赤褐色		88と同一個体
88	16B-72-9	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	沈線にキザミ	やや密	にぶい橙色		87と同一個体
89	16B-62-18	Ⅱ	深鉢	1.5	〃	隆帯貼付け 半隆起線上に浅い爪形文	やや粗　金雲母	橙色		
90	16B-43-23	Ⅱ	深鉢	1.1	〃	隆帯貼付け	やや粗	赤褐色		
91	16B-62-19	Ⅱ	深鉢	1.6	〃	隆帯貼付け 内面調整丁寧　三叉文	やや粗　金雲母	橙色		
92	16B-52-10	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	隆帯貼付け　三叉文 半隆起線文	やや粗　金雲母	明褐色		
93	16B-62-17		深鉢	1.3	〃	隆帯貼付け　三叉文 半隆起線文	やや粗　石英	(外)明赤褐色 (内)灰褐色		94と同一個体
94	16B-52-5	Ⅱ	深鉢 底部	1.1	〃	無文	やや粗　石英 砂粒子	(外)明褐色 (内)灰褐色		93と同一個体
95	16B-72-9	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	沈線　縄文	やや粗　石英	(外)にぶい赤褐色 (内)橙色		96と同一個体
96	16B-72-14	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	沈線　縄文　半隆起線文	やや粗　金雲母	(外)暗褐色 (内)明褐色		95と同一個体
97	16B-72-5	Ⅰ	深鉢	0.9	Ⅲ-2-b	半隆起線文　爪形文 内面調整丁寧	粗	(外)明褐色 (内)黒褐色		
98	16B-72-9	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅲ-2-c	縄文	密　金雲母	褐色		
99	16B-72-2	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	幅3mmの細い半隆起線文	やや密	明褐色		
100	16B-53-16	Ⅰ～Ⅱ	深鉢 底部	1.0	Ⅲ	縄文　底部に網代痕か	やや密	橙色		底部直径11.3cm
101	16B-43-21	Ⅱ	深鉢 底部	1.2	〃	縄文　底部に網代痕	やや粗	橙色		底部直径14.5cm
102	小千谷BP確認175トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅳ	小突起　垂下する隆帯 縄文	やや粗	橙色		
103	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.5	Ⅴ	網目状撚糸文　粗製	粗　砂粒子	(外)橙色 (内)黒褐色	(内)炭化物	103～106は同一個体
104	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	網目状撚糸文　粗製	粗　砂粒子	(外)橙色 (内)灰黄褐色	(内)炭化物	103～106は同一個体

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
105	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	網目状撚糸文　粗製	粗　砂粒子	(外)橙色	(内)炭化物	103～106は同一個体
106	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	網目状撚糸文　粗製	粗　砂粒子	(外)黄橙色 (内)灰黄褐色	(内)炭化物	103～106は同一個体
107	小千谷BP確認175トレンチ	Ⅱ	深鉢	1.1	Ⅵ	刺突文　沈線	やや粗	黄橙色		
108	16B-72-8	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	撚糸文	密	黄橙色		
109	表面採集		深鉢 口縁部	0.9	〃	撚糸文	密　白色粒子	橙色		
110	16B-72-3	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	〃	連続列点刺突	密　胎土精良	明黄褐色		
111	16B-63-2	Ⅰ	深鉢	0.9	〃	(外)無文 (内)条痕文　粗製	粗　石英	(外)橙色 (内)黒褐色		111～114は同一個体
112	16B-P下	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	(外)無文 (内)条痕文　粗製	粗　石英	(外)橙色 (内)黒褐色		111～114は同一個体
113	16B-72-15	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	(外)無文 (内)条痕文　粗製	粗　石英	(外)橙色 (内)黒褐色	(内)スス	111～114は同一個体
114	16B-52-20	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	(外)無文 (内)条痕文　粗製	粗　石英	(外)橙色 (内)黒褐色		111～114は同一個体

別表4　百塚東E遺跡出土土製品観察表

No.	出土地点	層位	種別	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
115	16B－52－5	Ⅱ	手捏土器	0.5	時期不明	無文　手捏	やや粗	浅黄橙色		
116	16B－62－11	Ⅱ	土偶	0.5	縄文中期	沈線で手の指を表現　貫通孔	やや粗	橙色		右手か？
117	16B－52－19	Ⅱ	土偶	1.2	縄文中期		やや密	橙色		板状土偶の手
118	16B－72－13	Ⅱ	土偶	1.9	縄文中期	胴部前に沈線	やや密	橙色		
119	16B－44－23	Ⅱ	土偶	2.5	縄文中期	胴部隆帯 背・腰に沈線で施文	やや密　繊維	橙色		右胴部
120	16B－53－8	Ⅱ	耳飾	0.8	縄文中期	滑車形	密	橙色		
121	小千谷BP確認175トレンチ	Ⅱ	土製円盤	0.8	時期不明	無文　周囲を面取り	密	淡黄色		

別表5　百塚東E遺跡出土須恵器観察表

No.	出土地点	層位	種別	器種	厚さcm	手法	胎土・含有物	色調	焼成	備考
122	16B－53－21	Ⅱ	須恵器　口縁部	横瓶	0.8	ロクロナデ	密	褐灰色	堅い	
123	16B－34－21	Ⅱ	須恵器　口縁部	甕	0.8	ロクロナデ	密	褐灰色	普通	自然釉
124	16B－53－16	Ⅰ	須恵器　口縁部	甕	0.8	ロクロナデ	密	灰色	堅い	
125	16B－33－25	Ⅱ	須恵器	不明	1.3	内面調整は粗雑	密	褐灰色	普通	
126	16B－P下	Ⅱ	須恵器	不明	1.3	ロクロナデ	密	褐灰色	普通	
127	表面採集		須恵器	甕	1.4	ロクロナデ	密	灰色	堅い	自然釉
128	16B－63－6	Ⅰ	須恵器	甕	1.7	右側面と上側面に接痕が認められる　ロクロナデ	密	灰黄色	堅い	128～130は同一個体
129	16B－53－11	Ⅰ	須恵器	甕	1.4	ロクロナデ	密	灰黄色	堅い	自然釉 128～130は同一個体
130	16B－62－15	Ⅲ	須恵器	甕	2.4	外面タタキ 内面にあて布の繊維痕	やや密	灰色	堅い	大形の甕 128～130は同一個体
131	16B－43－16	Ⅰ'	須恵器	不明	1.4	外面タタキ	密	灰色	堅い	
132	16B－63－19	Ⅰ'	須恵器	不明	0.9	外面タタキ	やや密	灰色	普通	
133	表面採集		須恵器	不明	0.9	外面タタキ	やや密	灰色	普通	
134	表面採集		須恵器	不明	1.0	外面タタキ	やや密	灰色	普通	

別表6　百塚東E遺跡出土石器観察表

No.	出土地点	層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	備考
1	16B－53－30	Ⅰ	石鏃	1.8	1.8	0.3	0.5	ガラス質安山岩	
2	16B－43－16	Ⅱ	尖頭器	9.4	3.3	0.7	36.0	頁岩	
3	16B－62－21	Ⅱ	円形掻器	6.4	5.1	4.6	99.7	鉄石英	光沢有
4	16B－P下	Ⅱ	打製石斧	9.0	4.0	2.5	77.1	砂岩	風化が著しい
5	16B－62－3	Ⅱ	打製石斧	9.0	5.0	1.6	65.0	頁岩	
6	16B－43－5	Ⅱ	打製石斧	9.4	5.6	1.7	95.2	頁岩	
7	16B－53－22	Ⅱ	打製石斧	9.8	4.4	1.7	87.1	頁岩	
8	16B－53－22	Ⅱ	打製石斧	10.0	3.8	1.6	62.6	黒色頁岩	風化が著しい
9	16B－43－21	Ⅱ	打製石斧	10.5	5.2	2.3	150.4	安山岩	風化が著しい
10	16B－63－1	Ⅱ	打製石斧	11.7	5.9	2.9	219.5	黒色頁岩	光沢有(二面)
11	16B－53－21	Ⅱ	打製石斧	6.5	5.1	2.7	105.6	ガラス質安山岩	
12	確認トレンチ175	Ⅱ	打製石斧	7.5	5.0	2.5	119.0	砂岩	風化が著しい
13	16B－43－9	Ⅱ	磨製石斧	8.5	4.5	2.0	109.9	蛇紋岩	
14	16B－72－8	Ⅱ	両面加工石器	6.1	5.4	2.1	93.6	粘板岩	光沢有
15	16B－63－11	Ⅱ	不定形石器	5.1	7.0	1.5	50.6	頁岩	
16	16B－52－19	Ⅱ	不定形石器	5.7	6.6	1.8	59.0	頁岩	
17	16B－63－16	Ⅰ	不定形石器	5.1	8.4	1.6	68.2	頁岩	

No.	出土地点	層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石材	備考
18	16B-62-10	Ⅱ	不定形石器	5.8	3.1	1.0	15.0	黒岩	
19	16B-53-5	Ⅱ	不定形石器	6.3	5.1	2.0	33.5	黒岩	
20	16B-53-18	Ⅱ	磨石	10.8	8.2	4.6	450.9	安山岩	
21	16B-1下	Ⅱ	磨石	10.9	7.7	4.7	534.7	安山岩	
22	16B-62-17	Ⅱ	磨石	16.2	6.6	4.5	763.6	安山岩	
23	16B-53-1	Ⅱ	磨石	13.7	7.3	4.1	621.1	安山岩	
24	16B-72-12	Ⅱ	磨石	13.0	6.0	5.1	584.8	安山岩	
25	16B-62-19	Ⅱ	石錘	8.7	6.0	1.6	105.6	安山岩	
26	16B-62-20	Ⅱ	石錘	8.4	5.8	2.0	131.9	安山岩	風化が著しい
27	16B-63-6	Ⅱ	石錘	7.7	7.7	2.2	187.6	安山岩	
28	16B-34-22	Ⅳ	石錘	9.2	8.4	1.2	197.3	安山岩	
29	16B-62-13	Ⅱ	石錘	8.8	7.0	2.4	197.6	安山岩	
30	16B-62-15	Ⅱ	石錘	8.4	8.5	2.4	258.2	安山岩	
31	16B-53-21	Ⅱ	石錘	10.8	8.3	2.3	298.9	安山岩	
32	16B-62-15	Ⅱ	石錘	9.7	8.0	2.7	265.2	安山岩	
33	16B-53-12	Ⅰ'	石錘	11.9	10.5	4.4	726.0	安山岩	
34	16B-63-1	Ⅱ	石錘	9.8	9.2	3.1	411.8	安山岩	

別表7　百塚西Ｃ遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次変成	備考
1	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢 口縁部	0.6	Ⅰ	隆起線文 横位側隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物	1→17は同一個体
2	3E-95-10	暗褐色土層	深鉢 口縁部	0.6	〃	隆起線文 横位側隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物	1→17は同一個体
3	3E-95-10	暗褐色土層	深鉢 口縁部	0.6	〃	隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物少量	1→17は同一個体
4	3E-95-10	暗褐色土層	深鉢 口縁部	0.6	〃	隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物少量	1→17は同一個体
5	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.5	〃	横位側隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
6	3E-95-10	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	横位側隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物少量	1→17は同一個体
7	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	横位側隆起線文　無文部 内面条痕状擦痕	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物少量	1→17は同一個体
8	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.5	〃	横位側隆起線文　無文部 内面条痕状擦痕	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
9	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.5	〃	横位側隆起線文　無文部 内面条痕状擦痕	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
10	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.5	〃	斜位側隆起線文　無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
11	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	斜位側隆起線文　無文部 内面条痕状擦痕	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
12	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	斜位側隆起線文　無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
13	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	斜位側隆起線文　無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
14	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
15	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
16	3E-95-15	暗褐色土層	深鉢	0.4	〃	無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
17	3E-95-9	暗褐色土層	深鉢	0.5	〃	無文部	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色		1→17は同一個体
18	29トレンチ	Ⅰ・Ⅱ		0.4	〃	斜位側隆起線文	密　金雲母　石英 白色不透明粒子	(外)灰黄褐色 (内)暗褐色	(内)炭化物少量	1→17と同一個体か
19	5D-31-16	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.3	Ⅱ-1-a	竹管文による波巻き文	やや密	にぶい褐色	(外)ススキ	
20	4E-30-3	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.5	Ⅱ-1-b	半隆起線文　連単文	やや粗	浅黄橙色		
21	5D-31-21	Ⅱ	深鉢	1.2	〃	半隆起線文　連単文	やや粗	明黄褐色		
22	5D-41-8	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.1	〃	半隆起線文 三角形版刺による連単文	やや密	にぶい黄橙色		
23	5D-42-7	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	〃	半隆起線文 三角形版刺による連単文	やや粗	明黄褐色		
24	5C-40-25	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.0	〃	半隆起線文 三角形版刺による連単文	やや密	橙色	(外)炭化物少量	
25	5D-42-13	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.0	〃	半隆起線文 三角形版刺による連単文	やや密	橙色	(外)炭化物少量	
26	5C-50-20	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.9	Ⅱ-1-b	半隆起線文 三角形版刺による連単文	密	橙色		
27	5D-53-4	Ⅱ	深鉢 口縁部	1.0	Ⅱ-1-c	半隆起線文 波状の半隆起線文	やや粗	にぶい橙色		
28	5D-42-17	Ⅱ	深鉢	1.1	Ⅱ-1-d	半隆起線文　無文帯	やや密	浅黄橙色		
29	5D-41-5	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅱ-1-e	半隆起線文　縄文 内面調整丁寧	やや密	にぶい橙色		
30	5D-41-8	Ⅳ	深鉢 口縁部	0.9	〃	半隆起線文　縄文 内面調整丁寧	やや密	(外)黒褐色 (内)にぶい黄橙色		

No.	出土地点	層位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色調	二次焼成	備考
31	5D-41-10	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	半隆起線文　縄文 内面横方向の調整痕顕著	やや密	暗褐色	(外)炭化物少量	
32	5D-41-10	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅱ-1-f	半截竹管による沈線 刺突文	やや粗	にぶい黄橙色	(外)炭化物少量	33と同一個体
33	5D-41-10	Ⅱ	深鉢 口縁部	0.8	〃	半截竹管による沈線 刺突文	やや粗	にぶい黄橙色	(外)炭化物少量	32と同一個体
34	5D-31-16	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅱ-1-g	半截竹管による沈線 撚糸文 内面横方向の調整痕顕著	密	にぶい黄褐色	(外)スス少量	
35	5D-42-7	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅱ-1-h	縦位の半隆起線文	やや粗	(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色		
36	5D-61-21	Ⅰ	深鉢	1.2	〃	縦位の沈線　半隆起線文	白色粒子やや多い	明黄褐色		
37	5D-42-25	SX75	深鉢	1.4	〃	半隆起線文　縦位の沈線	やや粗	にぶい橙色		
38	5C-40-19	Ⅱ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文　縦位の沈線 内面横方向の調整痕顕著	やや密	にぶい褐色		
39	5D-71-24	Ⅰ	深鉢	1.2	〃	半隆起線文　縦位の沈線	やや粗 白色粒子やや多い	明赤褐色		
40	5C-29-25	Ⅰ	深鉢	1.0	〃	半隆起線文　縦位の沈線	やや密	橙色		
41	5C-50-25	Ⅳ	深鉢 口縁部	0.9	Ⅱ-1-i	撚糸文	やや粗	にぶい黄橙色	(外)炭化物少量	
42	5D-42-16	Ⅱ	深鉢	1.0	Ⅱ-1-j	爪形文　半隆起線文	やや密	にぶい黄褐色	(外)炭化物	
43	5D-42-6	Ⅱ	深鉢	1.0	Ⅱ-1-j	爪形文　細沈線	白色粒子やや多い	にぶい黄橙色		
44	4E-22-11	Ⅰ	深鉢 胴部	0.8	Ⅱ-1-k	撚糸文	やや密	にぶい黄橙色		
45	5D-42-6	Ⅱ	深鉢 胴部	0.9	〃	撚糸文	やや密	(外)にぶい橙色 (内)灰黄褐色		
46	5C-40-19	Ⅱ	深鉢 胴部	1.2	〃	木目状撚糸文	やや密	にぶい黄橙色	(内)割れ口に炭化物	
47	5D-42-6	Ⅱ	深鉢 胴部	0.9	〃	木目状撚糸文	やや粗 白色粒子やや多い	にぶい褐色	(外)スス	
48	5D-41-10	Ⅱ	深鉢 胴部	0.9	〃	木目状撚糸文	やや粗	灰褐色	(外)スス	
49	5D-53-9	Ⅱ	深鉢	0.7	Ⅱ-1-l	斜格子目文	白色粒子やや多い	黄褐色		
50	5D-42-6	Ⅱ	深鉢 胴部	0.8	〃	U字文　撚糸文	やや密	にぶい黄橙色		
51	5D-41-10	Ⅱ	深鉢 胴部	0.9	〃	半隆起線文　細沈線	やや密 砂礫やや多い	にぶい黄橙色		
52	5C-29-12	Ⅰ	深鉢 胴部	0.8	〃	U字文　細沈線	やや密	にぶい黄橙色		
53	5D-41-10	Ⅱ	深鉢 胴部	0.9	〃	B字状文　沈線 内面調整丁寧	密	にぶい褐色	(外)炭化物少量	
54	5D-44-21	Ⅱ	深鉢	1.2	〃	太めの沈線　三角の刻み	やや粗	にぶい黄橙色		
55	5C-40-15	Ⅱ	深鉢 胴部	1.0	〃	沈線	やや粗	明黄褐色	(内)炭化物少量	
56	5D-53-5	Ⅱ	深鉢 胴部	1.1	〃	沈線	やや密	明黄褐色		
57	5D-62-6	Ⅰ	底部	1.1	〃	網代痕	やや粗	橙色		
58	5D-41-10	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅱ-2	隆帯	やや粗	明赤褐色		
59	5C-39-5	Ⅰ	深鉢 胴部	1.1	〃	基隆帯	やや粗	(外)橙色 (内)にぶい黄褐色	(内)炭化物	
60	5D-41-10	Ⅱ	深鉢	0.9	Ⅱ-3	太めの半隆起線文 山形文　円形文　細沈線	やや粗	にぶい黄橙色	(外)炭化物少量	
61	4E-22-63	Ⅰ	口縁部	0.6	Ⅲ	微隆起線文 内外面調整丁寧	密	にぶい黄褐色		
62	5D-41-5	Ⅳ	深鉢	0.8	〃	ミガキ　内外面調整丁寧	密	にぶい褐色		
63	4E-31-3	Ⅰ	深鉢	0.7	〃	櫛歯状工具による条線文 内外面調整丁寧 三条一単位	やや密	にぶい褐色		
64	4E-43-6	Ⅰ	深鉢	1.1	〃	櫛歯状工具による条線文 内外面調整丁寧 五条一単位	やや粗	黒褐色		
65	小千谷B.P. 確認51トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.8	Ⅳ	縄文	やや密	明黄褐色		65～68は同一個体
66	小千谷B.P. 確認51トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.7	〃	縄文	やや密	にぶい黄橙色		65～68は同一個体
67	小千谷B.P. 確認51トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.8	〃	縄文	やや密	橙色		65～68は同一個体
68	小千谷B.P. 確認51トレンチ	Ⅱ	深鉢	0.9	〃	縄文	やや密	橙色		65～68は同一個体
69	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.4	〃	条線文　結節縄文	やや粗	(外)にぶい黄橙色 (内)黒褐色		69～76は同一個体
70	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄橙色		69～76は同一個体
71	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄橙色		69～76は同一個体
72	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄橙色		69～76は同一個体
73	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄褐色		69～76は同一個体
74	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄褐色		69～76は同一個体
75	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.5	〃	条線文　結節縄文	やや粗	にぶい黄橙色		69～76は同一個体
76	4E-4-4	Ⅱ	深鉢	0.6	〃	条線文　結節縄文	やや粗	(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色		69～76は同一個体

別表８　百塚西Ｃ遺跡第一次調査出土剥片観察表

No.	出土地点	層　位	器種	厚さcm	分類	文様・調整	胎土・含有物	色　調	二次焼成	備　考
77	小千谷B.P.確認55トレンチ		深鉢	1.1	＋	沈線　結節縄文	やや粗	にぶい黄橙色		
78	3E-85-6	Ⅱ	深鉢口縁部	0.8	＋	沈線　結節縄文	やや粗 砂礫やや多い	にぶい黄橙色	(内)スス少量	78～81は同一個体
79	3E-85-6	Ⅱ	深鉢口縁部	0.8	＋	沈線	やや粗 砂礫やや多い	にぶい黄橙色		78～81は同一個体
80	3E-85-6	Ⅱ	深鉢	0.8	＋	結節縄文	やや粗 砂礫やや多い	にぶい黄橙色	(内)スス少量	78～81は同一個体
81	3E-85-6	Ⅱ	深鉢	0.8	＋	縄文	やや粗 砂礫やや多い	にぶい黄橙色		78～81は同一個体
82	4D-89-16	Ⅱ	深鉢	0.7	＋	結節縄文　羽状縄文	やや粗 砂礫やや多い	浅黄色		
83	小千谷B.P.確認43トレンチ斜木倒		深鉢	0.8	＋	羽目状燃糸文	やや粗 砂礫やや多い	橙色	(外)スス	

別表８　百塚西Ｃ遺跡第一次調査出土剥片観察表

No.	石　材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備　考
1	ガラス質安山岩	5.7	6.0	3.5	108.7	第19図　No.1
2	ガラス質安山岩	3.7	5.6	1.1	21.1	
3	ガラス質安山岩	3.6	5.7	0.8	17.0	
4	ガラス質安山岩	3.6	4.3	0.9	13.5	
5	ガラス質安山岩	3.8	3.4	0.7	9.9	
6	ガラス質安山岩	3.4	4.5	1.3	9.7	
7	ガラス質安山岩	3.0	4.6	0.4	4.1	
8	ガラス質安山岩	2.7	4.7	0.5	5.1	
9	ガラス質安山岩	2.7	3.3	0.6	3.8	
10	ガラス質安山岩	6.3	2.0	0.6	7.1	
11	ガラス質安山岩	6.2	2.6	1.2	17.0	
12	ガラス質安山岩	2.2	3.9	0.4	2.4	
13	ガラス質安山岩	2.2	3.3	0.4	3.1	
14	ガラス質安山岩	1.9	2.9	0.5	2.6	
15	ガラス質安山岩	1.6	2.7	0.6	2.0	
16	ガラス質安山岩	1.8	2.0	0.3	0.7	
17	頁岩	6.7	5.2	1.2	21.0	
18	頁岩	5.7	4.1	1.4	30.5	
19	頁岩	5.2	3.6	1.1	14.9	
20	頁岩	5.4	2.6	0.7	7.7	
21	頁岩	5.0	3.1	0.8	8.1	
22	頁岩	4.2	2.6	0.8	5.7	
23	頁岩	2.9	2.9	0.6	3.2	
24	頁岩	2.0	4.1	0.7	4.4	
25	頁岩	3.2	2.3	0.7	3.8	
26	頁岩	4.0	2.4	0.7	5.2	
27	頁岩	2.4	1.7	0.6	2.1	
28	頁岩	2.2	2.3	0.4	1.5	
29	頁岩	2.9	1.7	0.5	1.4	
30	頁岩	1.9	3.8	0.5	3.0	
31	砂岩	14.9	9.9	4.3	656.9	第19図　No.31
32	砂岩	6.2	10.8	3.2	186.7	
33	砂岩	3.8	5.3	0.2	9.9	
34	砂岩	3.5	3.2	0.9	8.2	
35	砂岩	2.2	2.4	0.2	0.9	
36	砂岩	2.5	1.6	0.4	1.3	
37	頁岩	3.5	5.9	0.9	11.1	
38	頁岩	2.6	1.8	0.6	2.3	

合　計				
1～16	ガラス質安山岩	16点	227.6	
17～30	頁岩	14点	112.5	
31～36	砂岩	6点	854.9	
37・38	頁岩	2点	13.4	

図　　版

凡　　例

1．遺構に付した記号は、溝(SD)・土坑(SK)・性格不明遺構(SX)・集石土坑(SS)・配石遺構(SH)・ピット(P)とし、種別毎に一連番号を付した。

2．遺物は、種別毎に一連番号を付し、写真もこれにしたがった。縄文土器で植物繊維を含んでいるものには断面に網目をかけ、須恵器は断面を黒塗りとした。

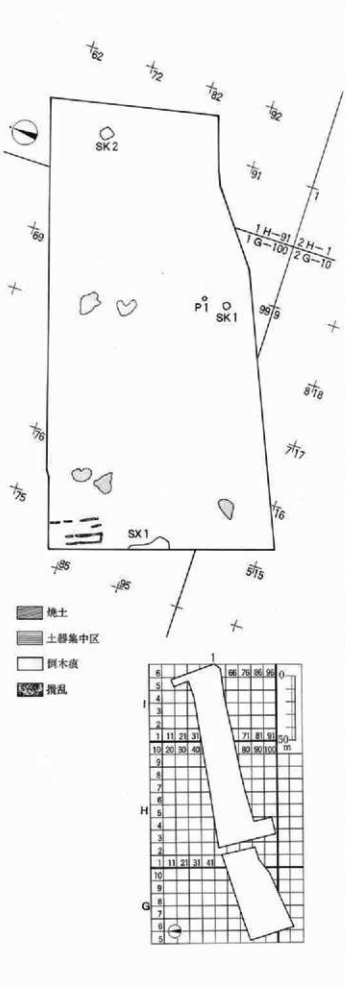
3．遺物の実測図及び写真の縮尺については各図版に示した。

4．石器実測図において、 は敲打痕、 は磨痕若しくは光沢を表現した。

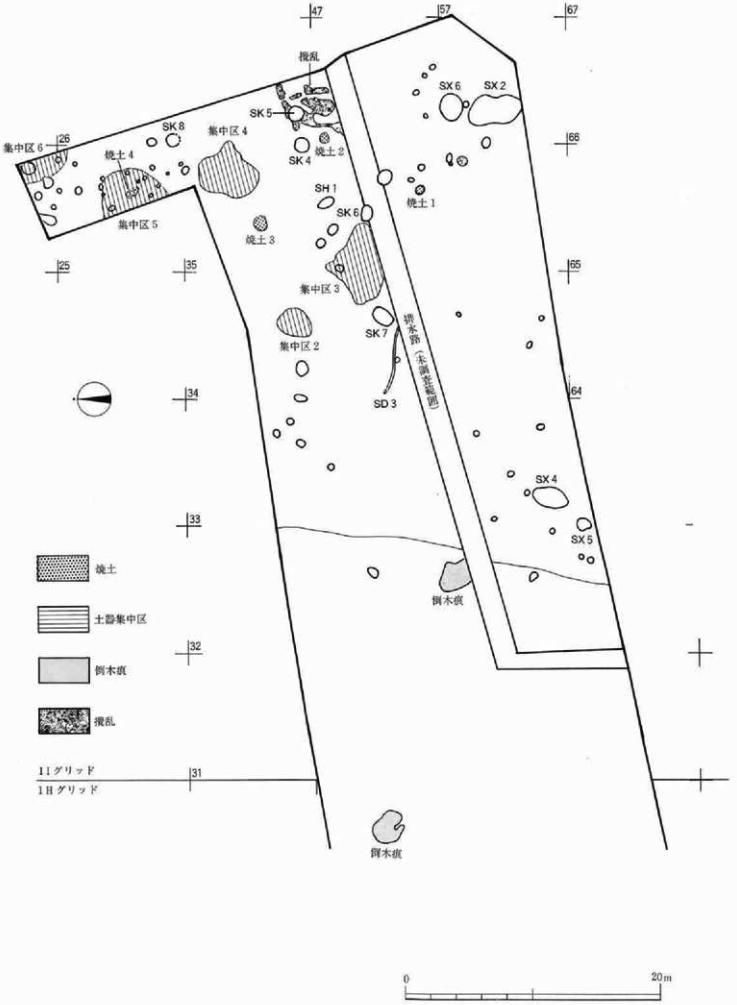
5．打製石斧の ⟷ はツブシの範囲で、不定形石器の ⟷ は刃部と考えられる範囲である。
　磨石類の ⟷ は磨面の範囲である。

6．金井遺跡図版4～6に掲載した土器は縮尺1/4で、番号は出土遺物の通し番号と一致する。

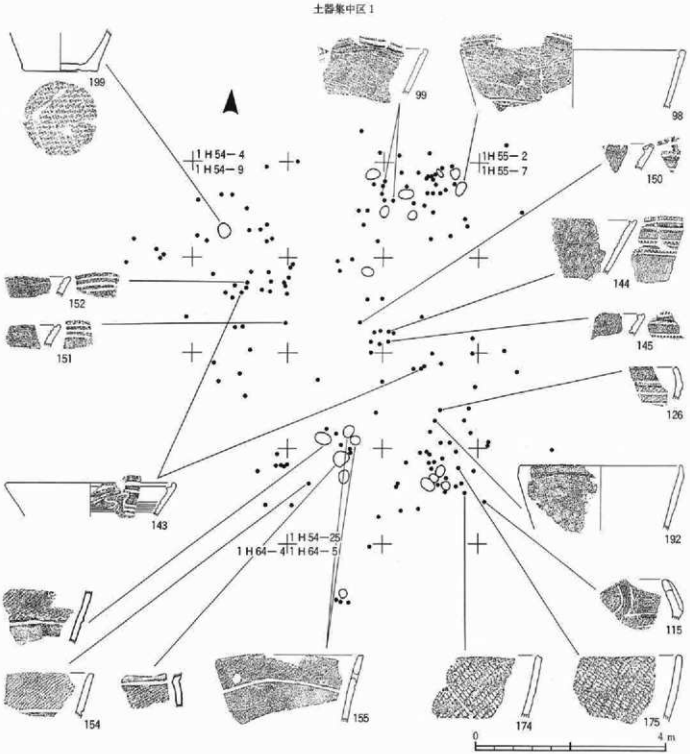
周辺の旧地形図


SK 2
P1
SK 1
SX 1
1 H−91
1 G−100
2 H−1
2 G−10
SK 8
SX 5
SX 6
SX 2
SX 4
SH 1
SK 7
SD 3
SX 4
SX 5
SD 2
SX 3
SD 1
SS 1
SK 3
SK 9
0
20m
焼土
土器集中区
倒木痕
撹乱

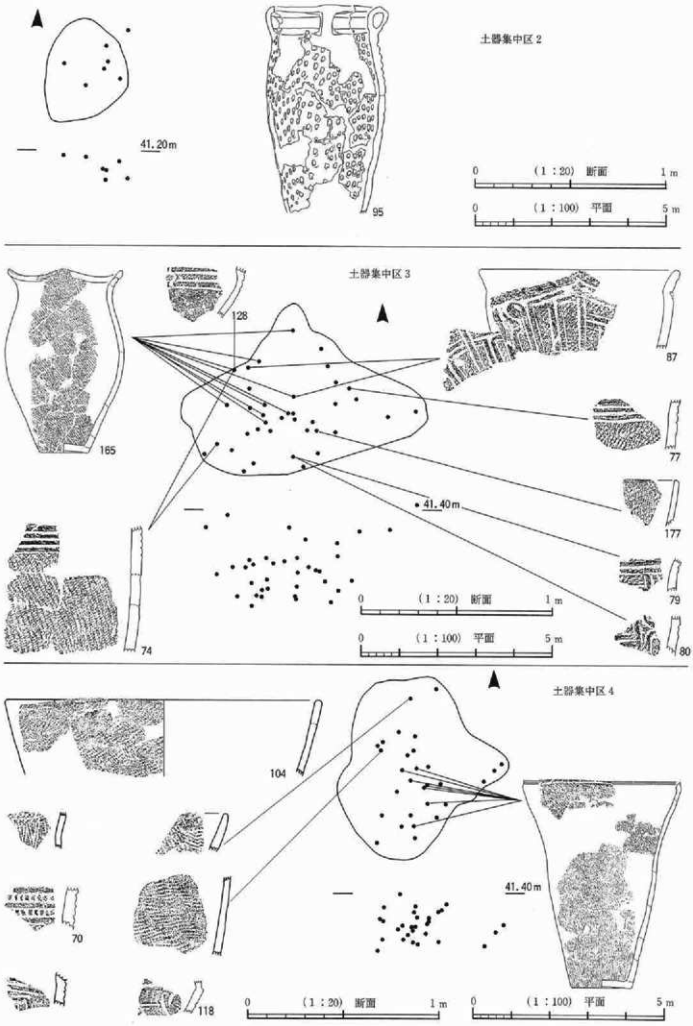
遺構全体図


47
57
67
26
66
25
35
65
34
64
33
32
31
攪乱
SK 5
SK 8
集中区 4
集中区 6
焼土 4
SK 4
焼土 2
SX 6
SX 2
SH 1
SK 6
焼土 1
集中区 5
焼土 3
集中区 3
SK 7
集中区 2
排水路（未調査範囲）
SD 3
SX 4
SX 5
焼土
土器集中区
倒木痕
攪乱
1Iグリッド
1Hグリッド
倒木痕
0
20m

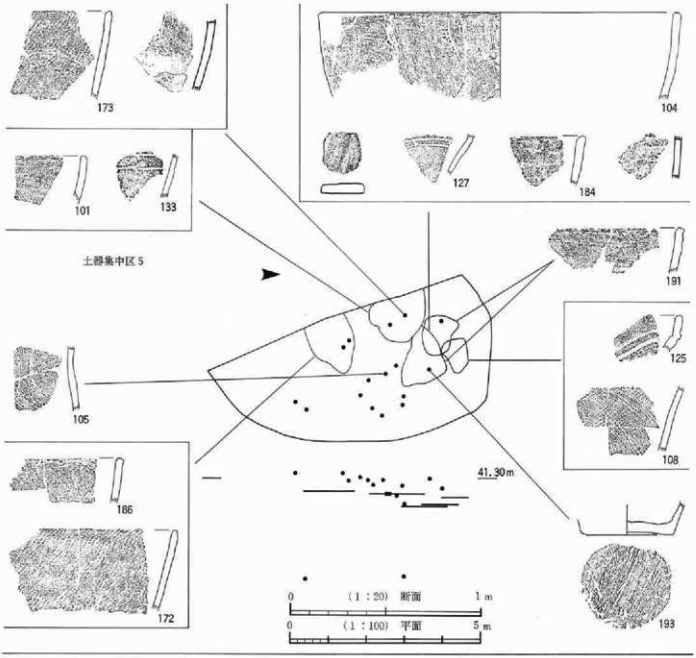
東地区遺構配置図

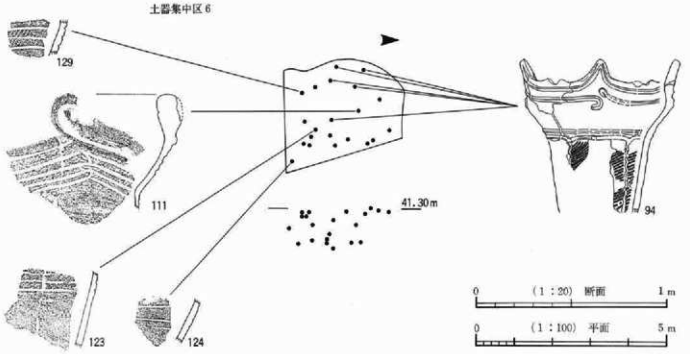

土器集中区 1
199
99
98
1 H 54－4
1 H 54－9
1H 55－2
1H 55－7
150
144
152
145
151
126
143
1 H 54－25
1 H 64－4
1 H 64－5
192
115
154
155
174
175
0
4 m

遺物分布図 1

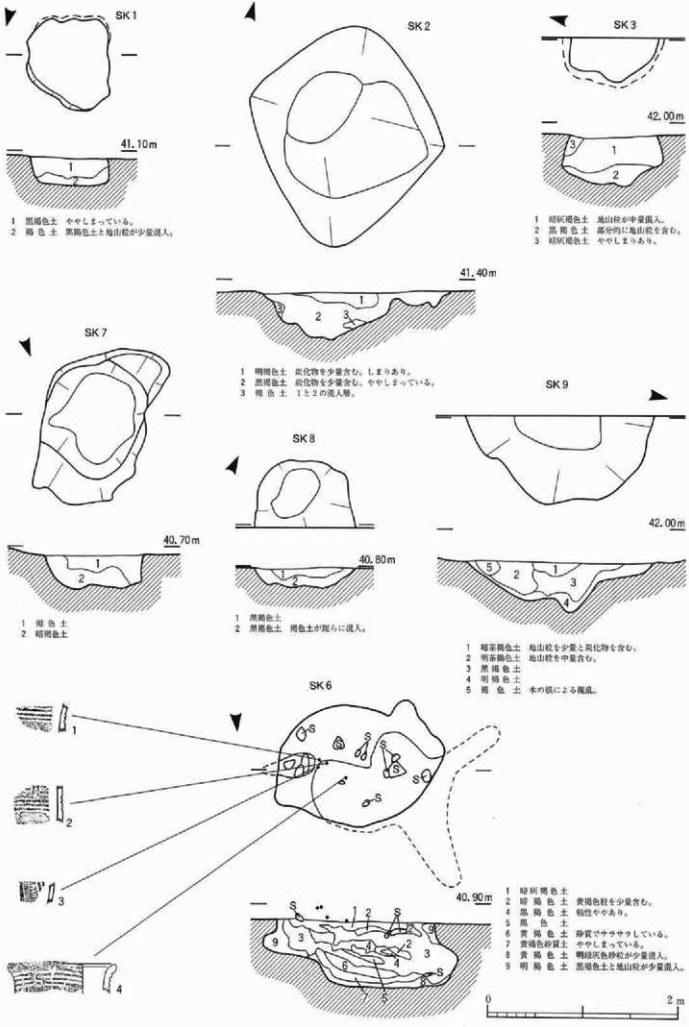

41.20m
95
土器集中区2
0 (1:20) 断面 1m
0 (1:100) 平面 5m
土器集中区3
165
128
87
77
177
79
80
74
41.40m
0 (1:20) 断面 1m
0 (1:100) 平面 5m
土器集中区4
104
70
118
41.40m
0 (1:20) 断面 1m
0 (1:100) 平面 5m

遺物分布図2


173
104
101
133
127
184
土器集中区5
191
125
105
108
186
41.30m
172
193
0　(1：20)　断面　1m
0　(1：100)　平面　5m

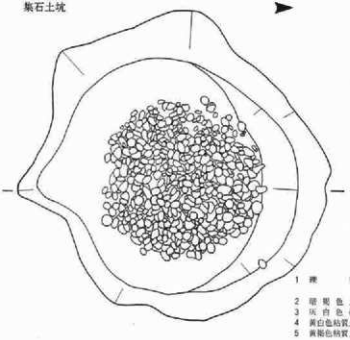

土器集中区6
129
111
41.30m
94
123
124
0　(1：20)　断面　1m
0　(1：100)　平面　5m

遺物分布図3

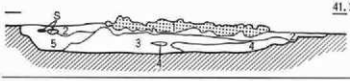

SK 1
41.10m
1 黒褐色土　ややしまっている。
2 褐 色 土　黒褐色土と地山粒が少量混入。
SK 2
41.40m
1 明褐色土　炭化物を少量含む。しまりあり。
2 黒褐色土　炭化物を少量含む。ややしまっている。
3 褐 色 土　1と2の混入層。
SK 3
42.00m
1 暗灰褐色土　地山粒が中量混入。
2 黒 褐 色 土　部分的に地山粒を含む。
3 暗灰褐色土　ややしまりあり。
SK 7
40.70m
1 褐 色 土
2 暗褐色土
SK 8
40.80m
1 黒褐色土
2 黒褐色土　褐色土が斑らに混入。
SK 9
42.00m
1 暗茶褐色土　地山粒を少量と炭化物を含む。
2 明茶褐色土　地山粒を中量含む。
3 黒 褐 色 土
4 明 褐 色 土
5 褐 色 土　木の根による攪乱。
SK 6
40.90m
1 暗灰褐色土
2 暗 褐 色 土　黄褐色粒を少量含む。
4 黒 褐 色 土　粘性ややあり。
5 黒　色　土
6 黄 褐 色 土　砂質でサラサラしている。
7 黄褐色砂質土　ややしまっている。
8 黄 褐 色 土　明緑灰色砂粒が少量混入。
9 明 褐 色 土　黒褐色土と地山粒が少量混入。
0
2m

遺構個別実測図 1

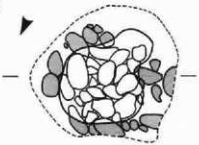
集石土坑

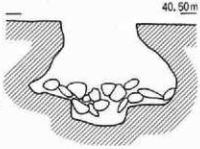


1　礫　　層　礫と礫の間には部分的に黒褐色土・炭化物が混入。
2　暗 褐 色 土
3　灰 白 色 砂　よくしまっている。
4　黄白色粘質土　地山と近似する。
5　黄褐色粘質土　地山と近似するがやや汚ない。

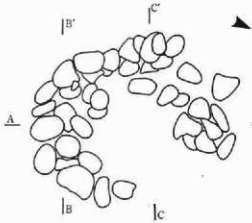


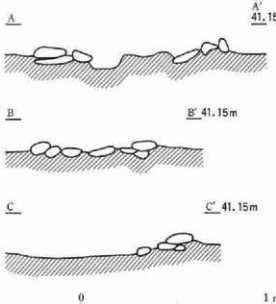
SX 5



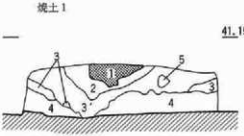


配石遺構



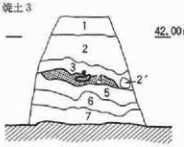


焼土 1



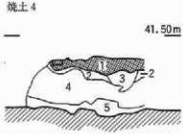
1　明赤褐色土　焼土・炭化物が5～7％程度混入。
2　暗赤褐色土　地土の粒子が若干混入し、やや赤味を呈している。
3　黒 褐 色 土　基本層序の I 層
3'　黒 褐 色 土　3よりもやや明るい。
4　明 褐 色 土　基本層序の II 層。
5　暗赤褐色土　砂質分が多い。洪水堆積ブロック。

焼土 3



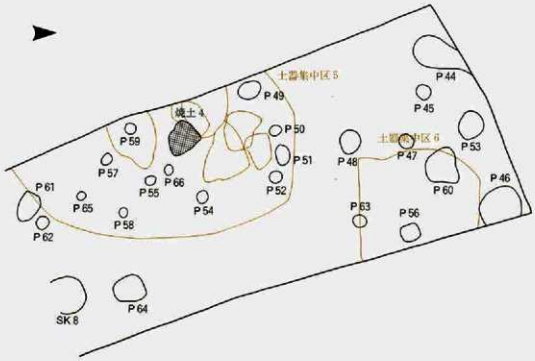
1　暗 褐 色 土　基本層序の I 層
2　黄 褐 色 土　上面はやや粗色の砂を多く含む。洪水堆積層である。
2'　黄 褐 色 土　2がブロック状に混種
3　暗灰褐色土　基本層序の II 層。
4　赤 褐 色 土　焼土。
5　暗灰褐色土　3よりやや明るく砂質である。洪水堆積層である。
6　黒 褐 色 土　基本層序の III 層。
7　明 褐 色 土　基本層序の IV 層。漸移層である。

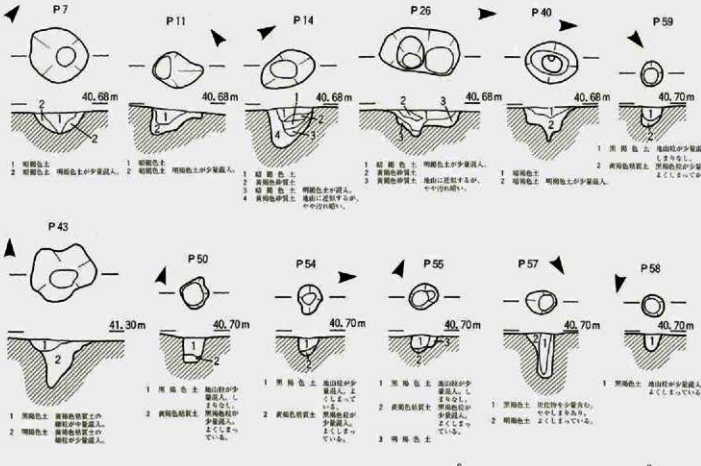
焼土 4



1　赤茶褐色土　焼土。炭化物を少量含む。
2　暗茶褐色土
3　明茶褐色土　焼土粒が少量混入。
4　黒 褐 色 土
5　明 褐 色 土

遺構個別実測図 2


土器集中区 5
土器集中区 6
焼土 4
P44
P45
P49
P50
P59
P57
P66
P55
P54
P51
P52
P48
P47
P53
P60
P46
P61
P65
P58
P62
P63
P56
SK 8
P64
0
5 m


P 7
40.68m
1 暗褐色土
2 暗褐色土 明褐色土が少量混入。
P 11
40.68m
1 暗褐色土
2 暗褐色土 明褐色土が少量混入。
P 14
40.68m
1 暗褐色土
2 黄褐色砂質土
3 暗褐色土 明褐色土が混入。地山に近似するが、やや汚れ暗い。
4 黄褐色砂質土
P 26
40.68m
1 暗褐色土 明褐色土が少量混入。
2 黄褐色砂質土
3 黄褐色砂質土 地山に近似するが、やや汚れ暗い。
P 40
40.68m
1 暗褐色土
2 暗褐色土 明褐色土が少量混入。
P 59
40.70m
1 黒褐色土 地山粒が少量混入。しまりなし。
2 黄褐色粘質土 黒褐色粒が少量混入。よくしまってかたい。
P 43
41.30m
1 黒褐色土 黄褐色砂質土の粒粒が中量混入。
2 明褐色土 黄褐色粘質土の細粒が少量混入。
P 50
40.70m
1 黒褐色土 地山粒が少量混入。しまりなし。
2 黄褐色粘質土 黒褐色粒が少量混入。よくしまっている。
P 54
40.70m
1 黒褐色土 地山粒が少量混入。よくしまっている。
2 黄褐色粘質土 黒褐色粒が少量混入。よくしまっている。
P 55
40.70m
1 黒褐色土 地山粒が少量混入。しまりなし。
2 黄褐色粘質土 黒褐色粒が少量混入。よくしまっている。
3 明褐色土
P 57
40.70m
1 黒褐色土 炭化物を少量含む。ややしまりあり。
2 明褐色土 よくしまっている。
P 58
40.70m
1 黒褐色土 地山粒が少量混入。よくしまっている。
0
2 m

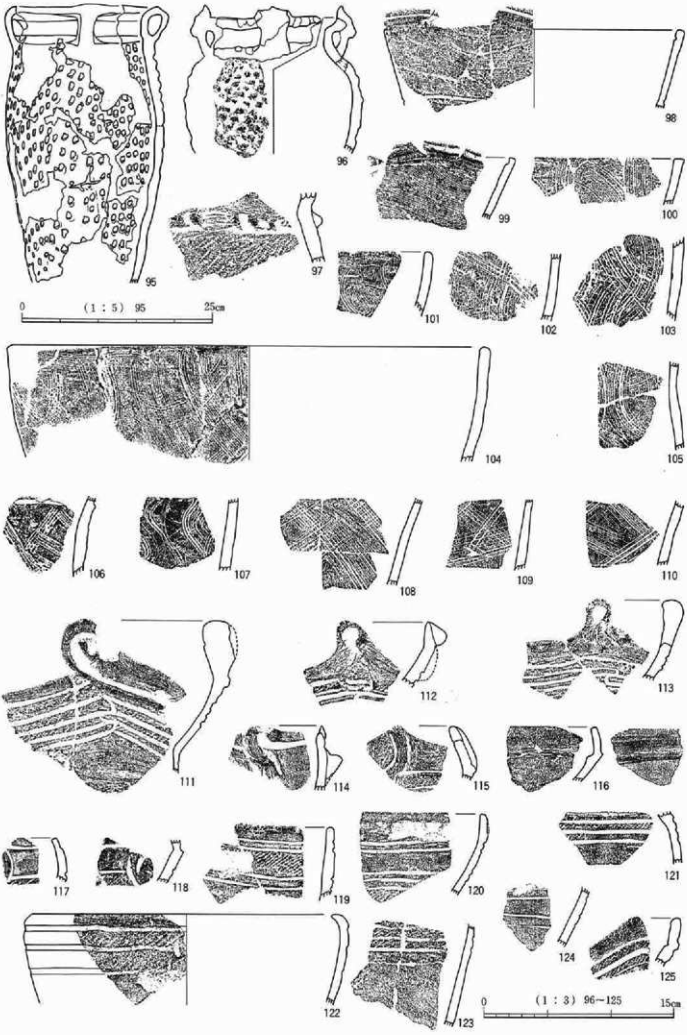
遺構個別実測図 3

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
(1:3)
15m

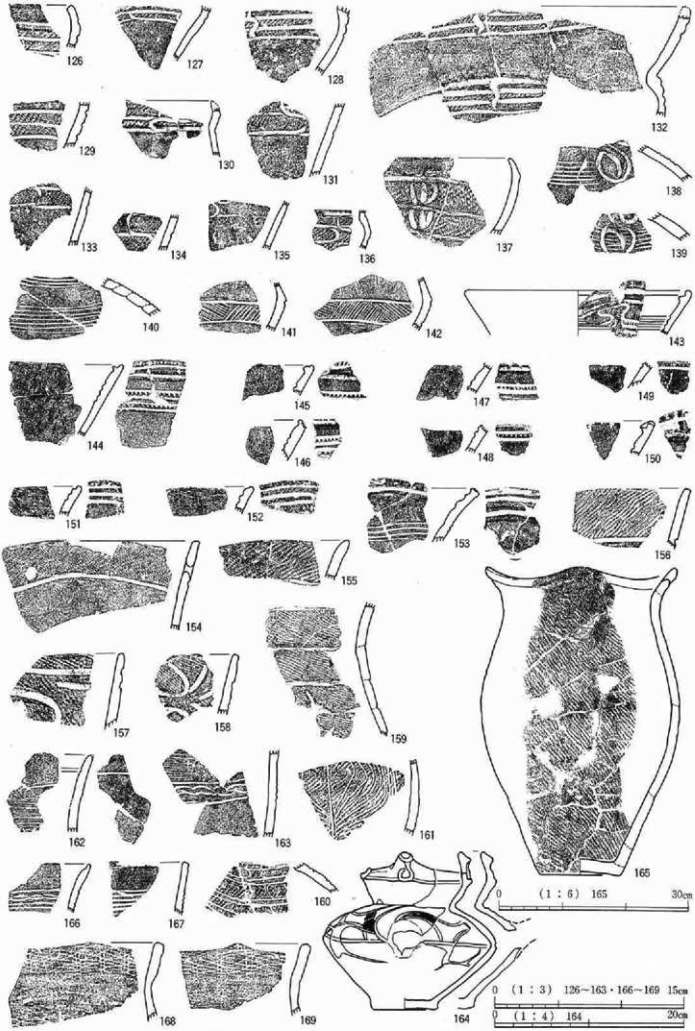
土器実測図1

60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
0 (1：3) 60～87・89～93 15cm
0 (1：5) 88・94 25cm

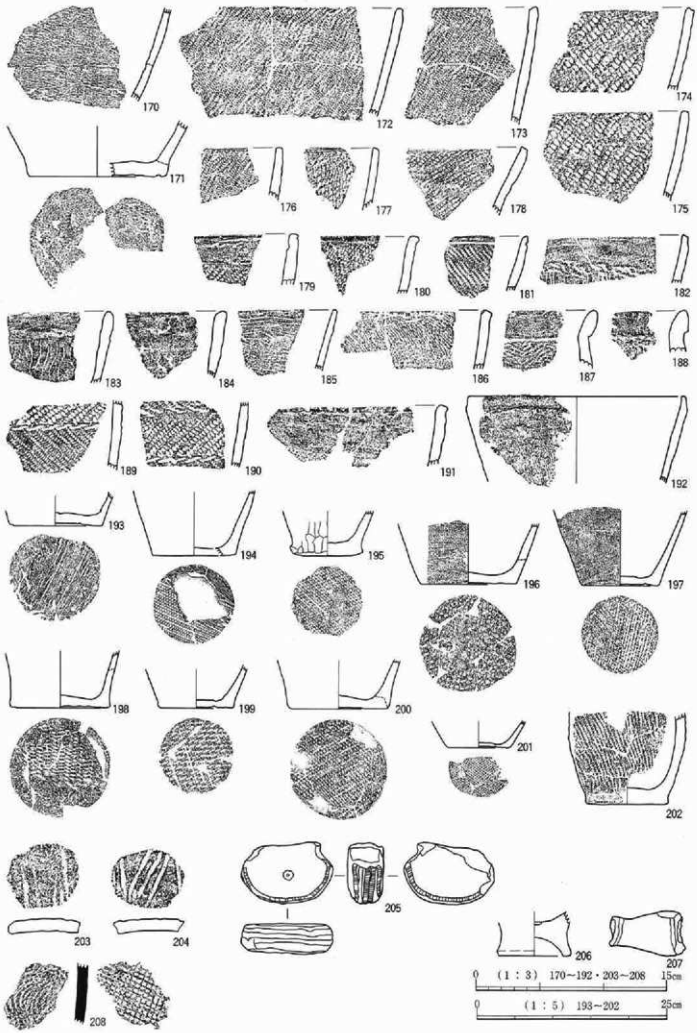
土器実測図2


95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
0 (1:5) 95 25cm
0 (1:3) 96~125 15cm

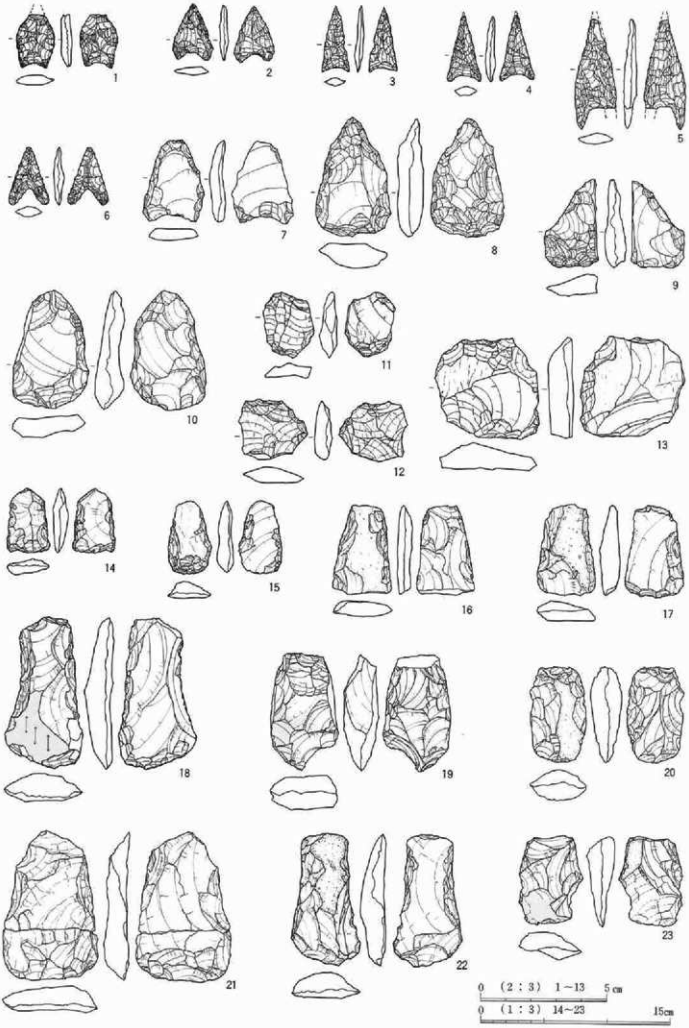
土器実測図3


126
127
128
132
129
130
131
138
133
134
135
136
137
139
140
141
142
143
144
145
147
149
146
148
150
151
152
153
156
154
155
157
158
159
165
162
163
161
166
167
160
164
168
169
0 (1:6) 165 30cm
0 (1:3) 126~163・166~169 15cm
0 (1:4) 164 20cm

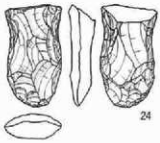
土器実測図 4

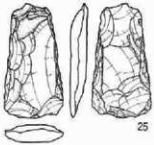

170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
0 (1:3) 170~192・203~208 15cm
0 (1:5) 193~202 25cm

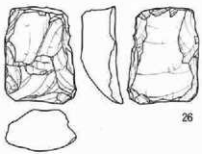
土器実測図5

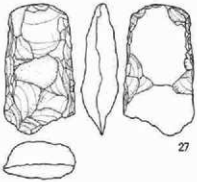

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0 (2:3) 1~13 5cm
0 (1:3) 14~23 15cm

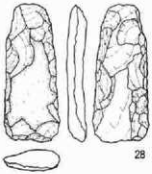
石器実測図1

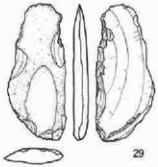


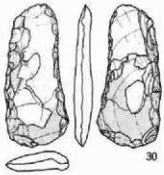


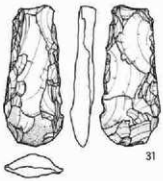


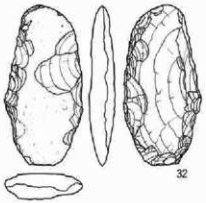


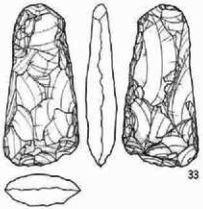


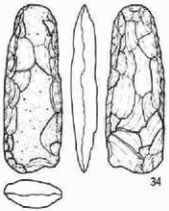


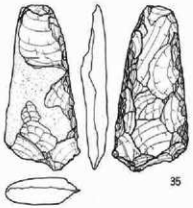


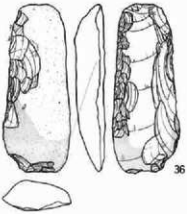


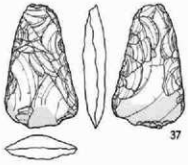


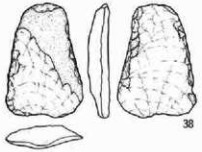




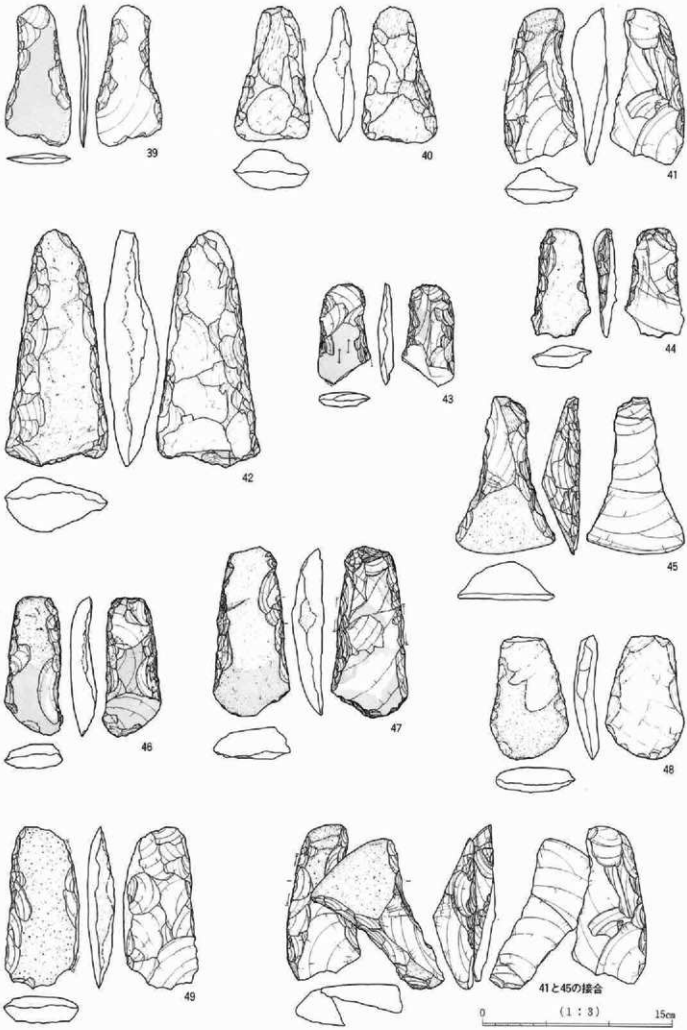




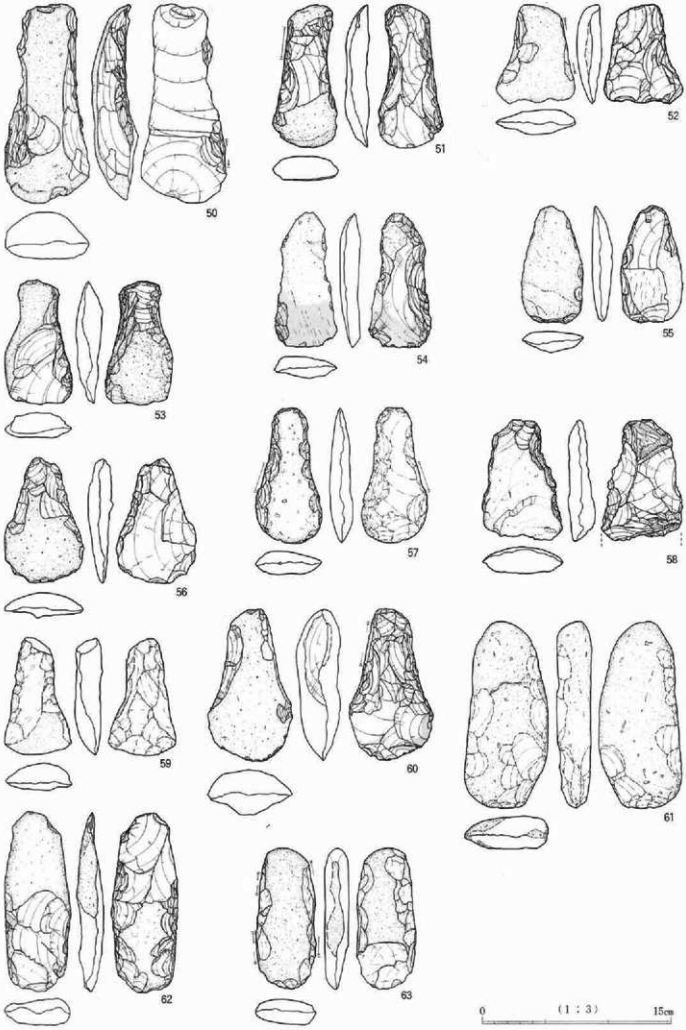




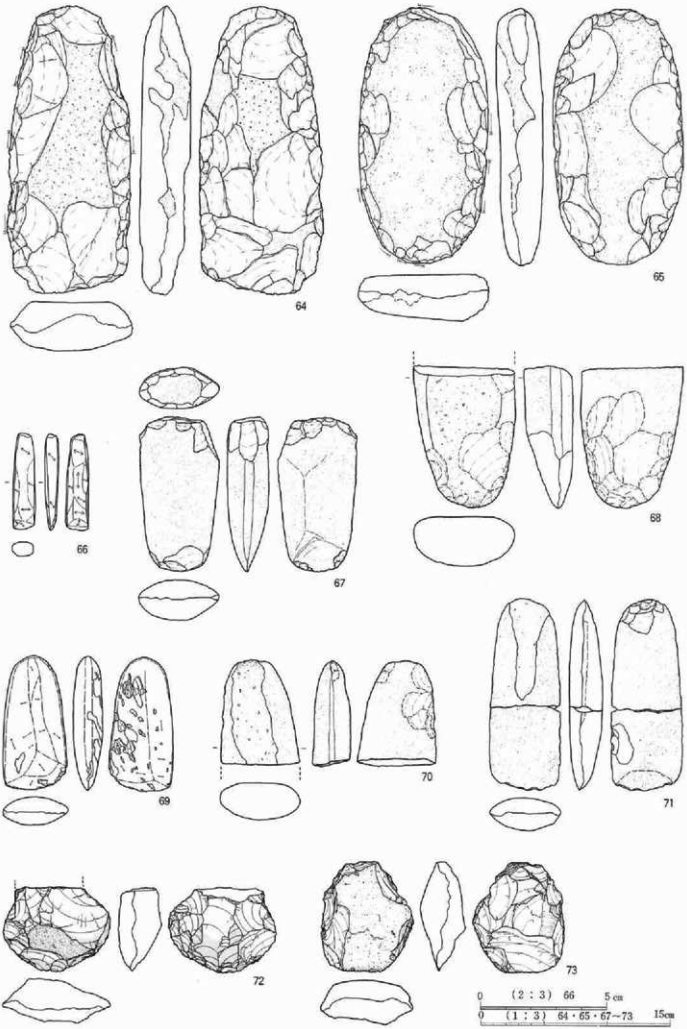
石器実測図 2



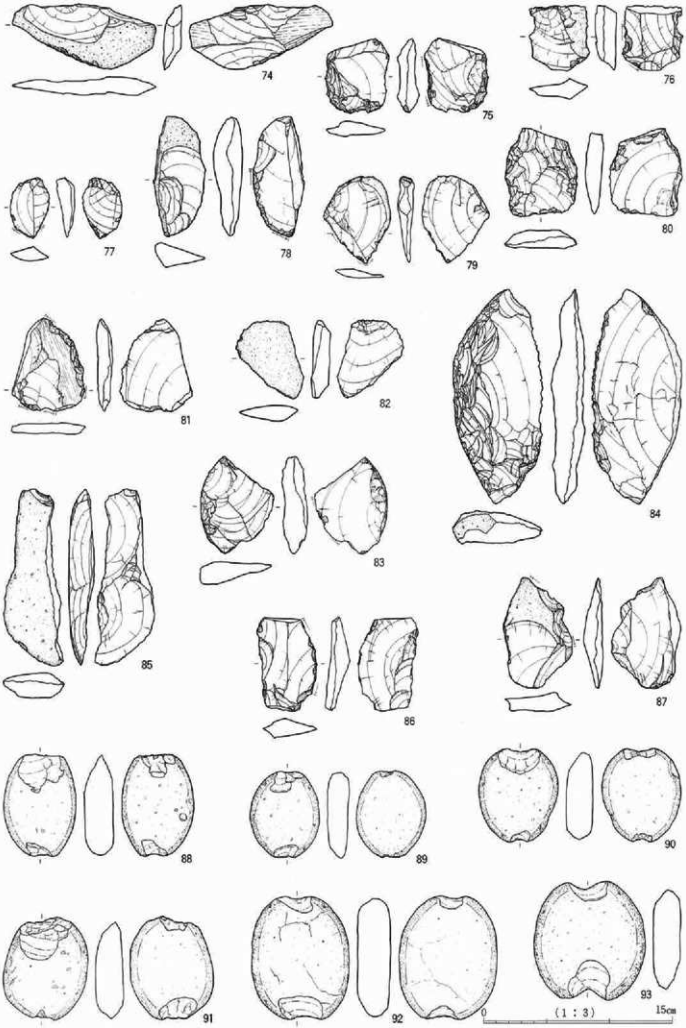
石器実測図3



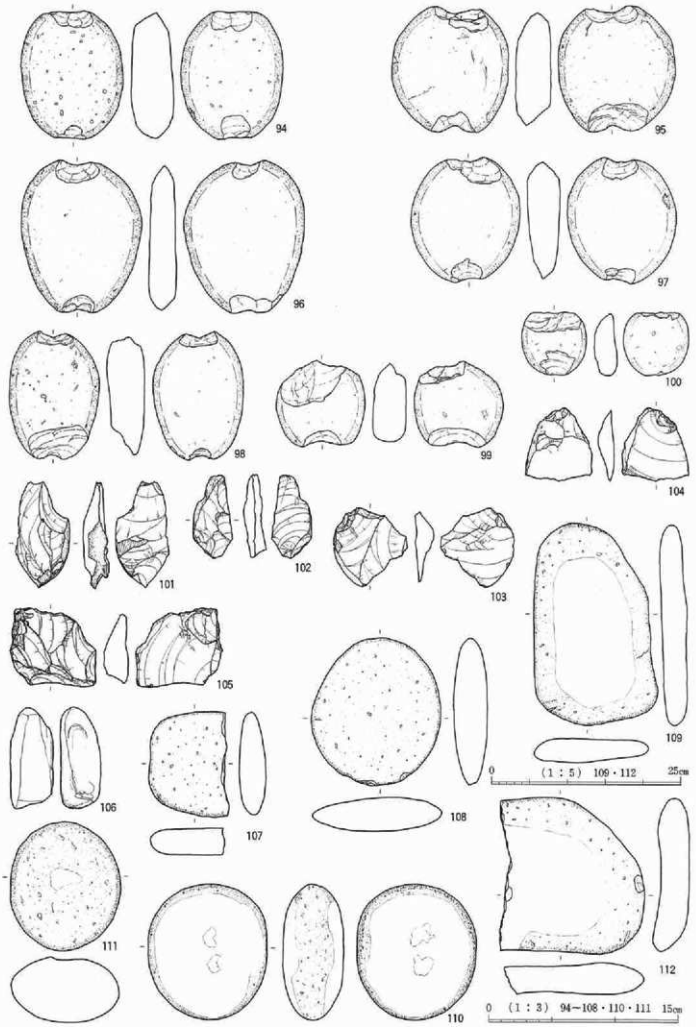
石器実測図4



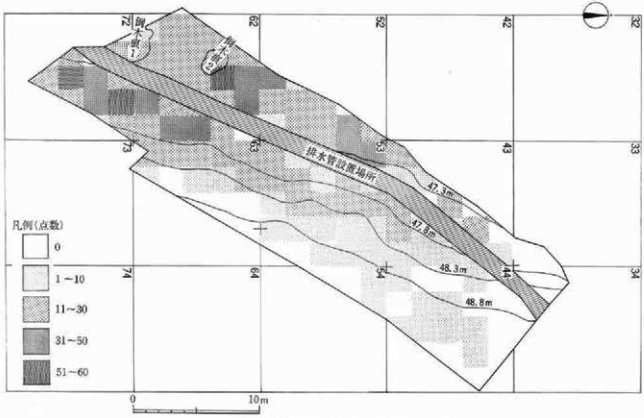
石器実測図5



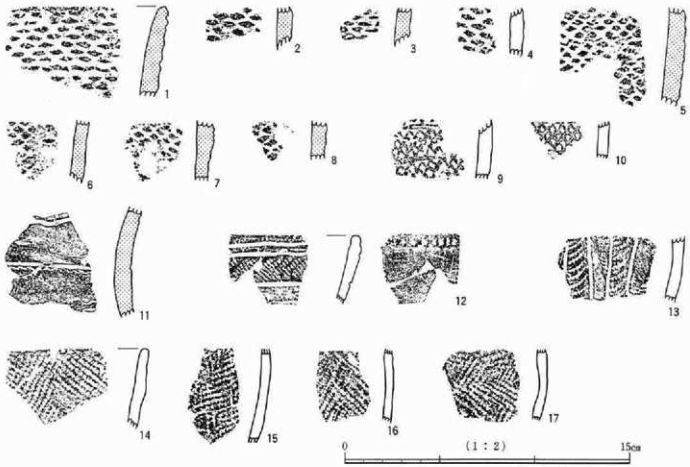
石器実測図6


94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
0 (1:5) 109・112 25cm
110
111
112
0 (1:3) 94～108・110・111 15cm

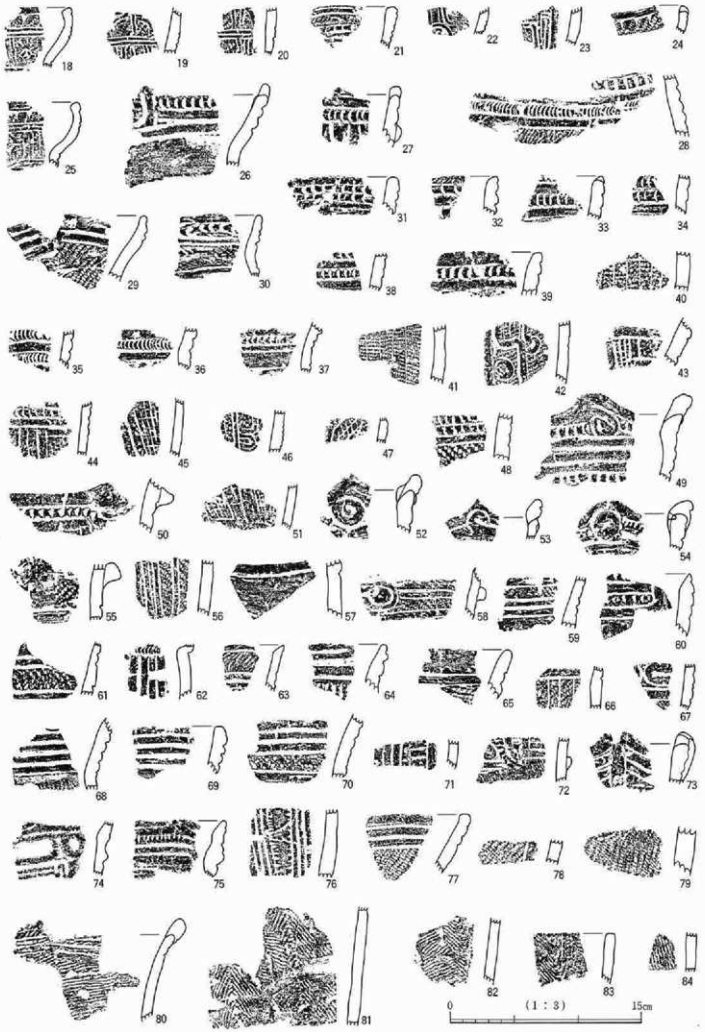
石器実測図7



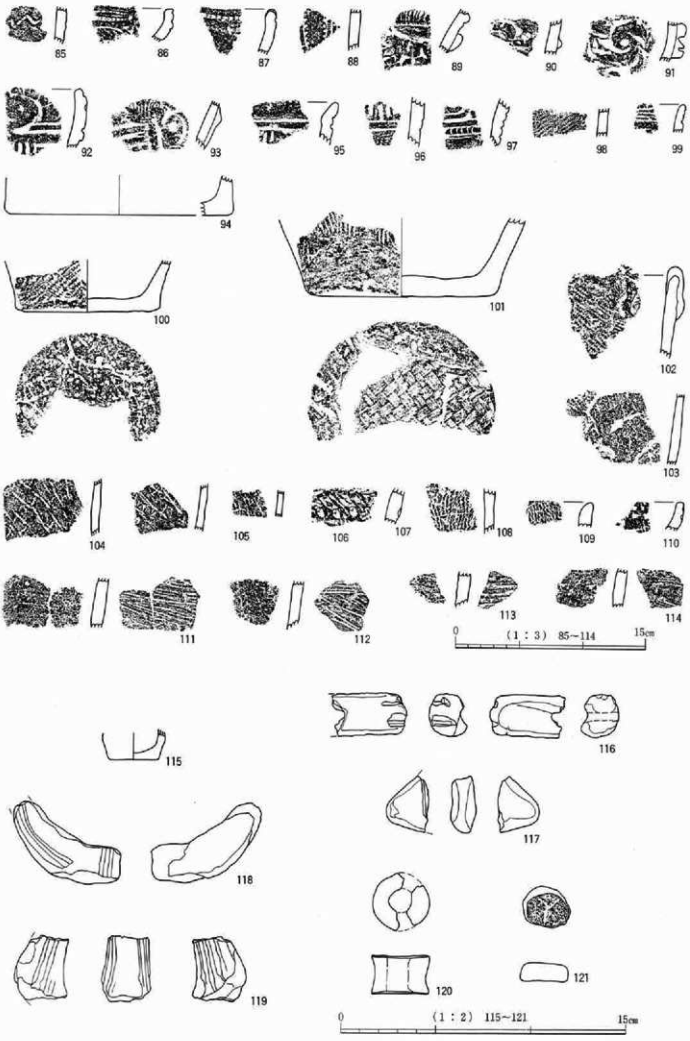
遺構全体図及び土器出土分布図



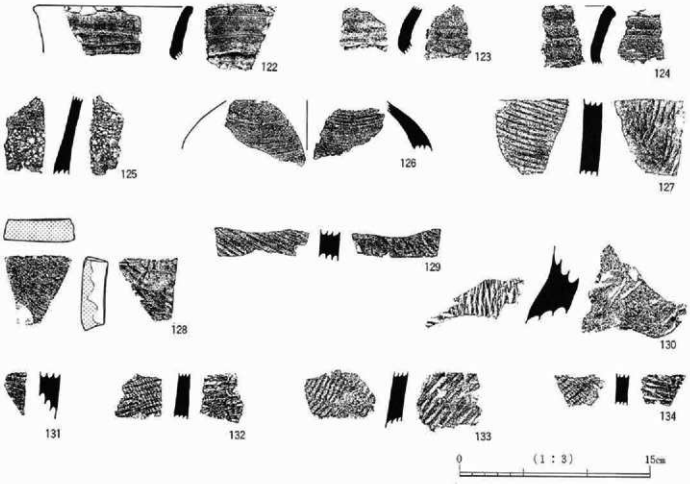
土器実測図1

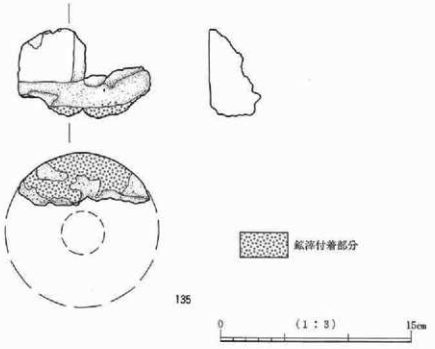

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
31
32
33
34
29
30
38
39
40
35
36
37
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
0
(1:3)
15cm

土器実測図 2

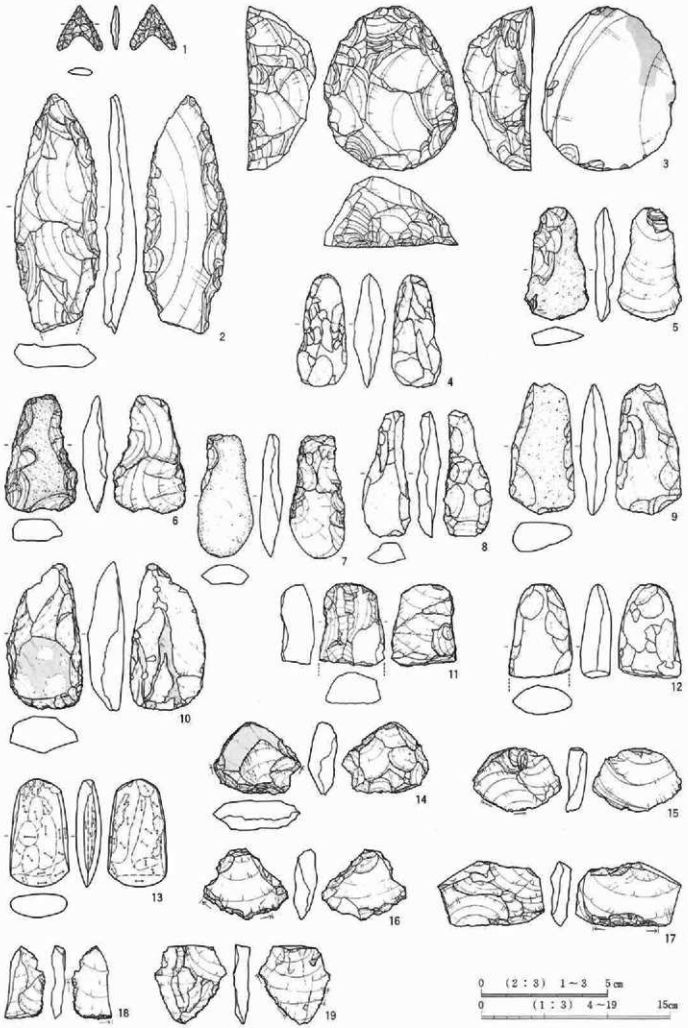

85
86
87
88
89
90
91
92
93
95
96
97
98
99
94
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0 (1:3) 85~114 15cm
115
116
117
118
119
120
121
0 (1:2) 115~121 15cm

土器実測図3

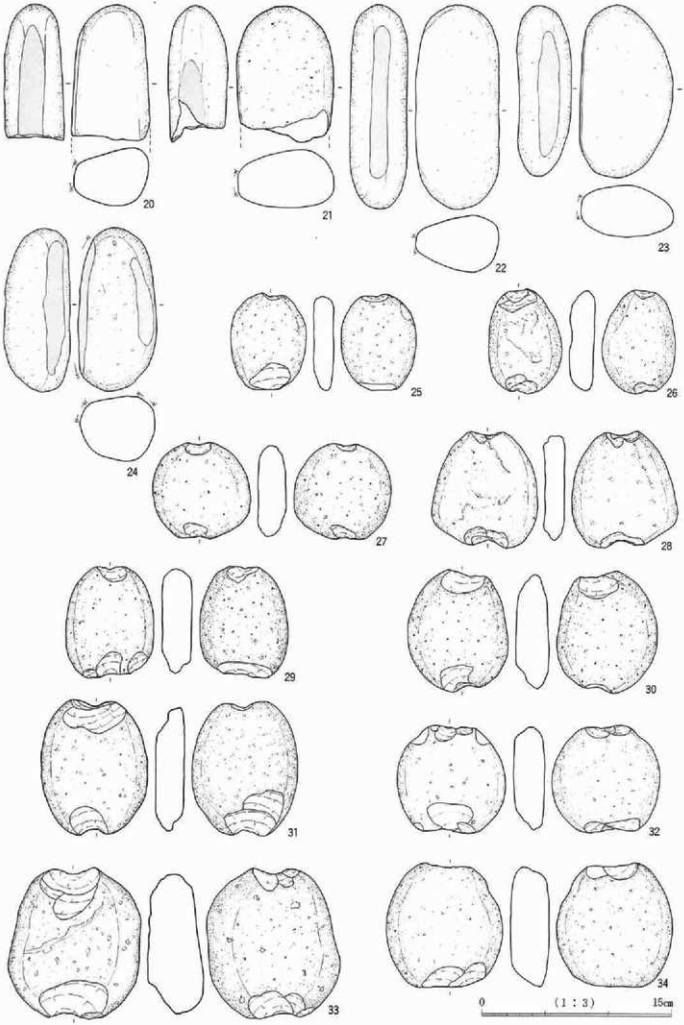

122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
0
(1:3)
15cm


135
鉱滓付着部分
0
(1:3)
15cm

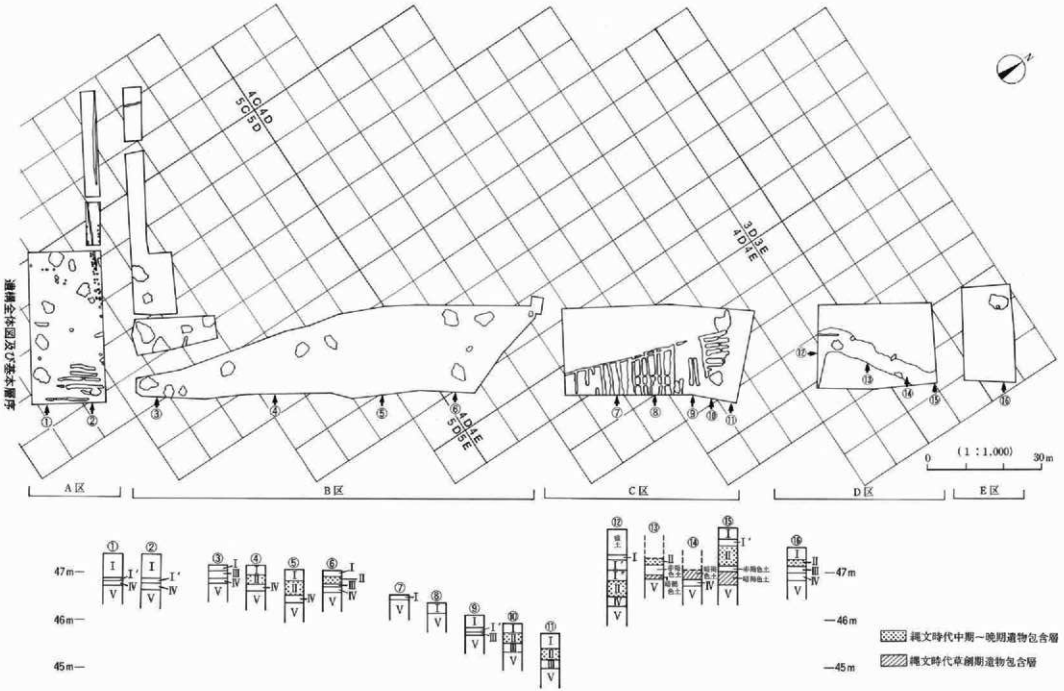
土器実測図4



石器実測図1

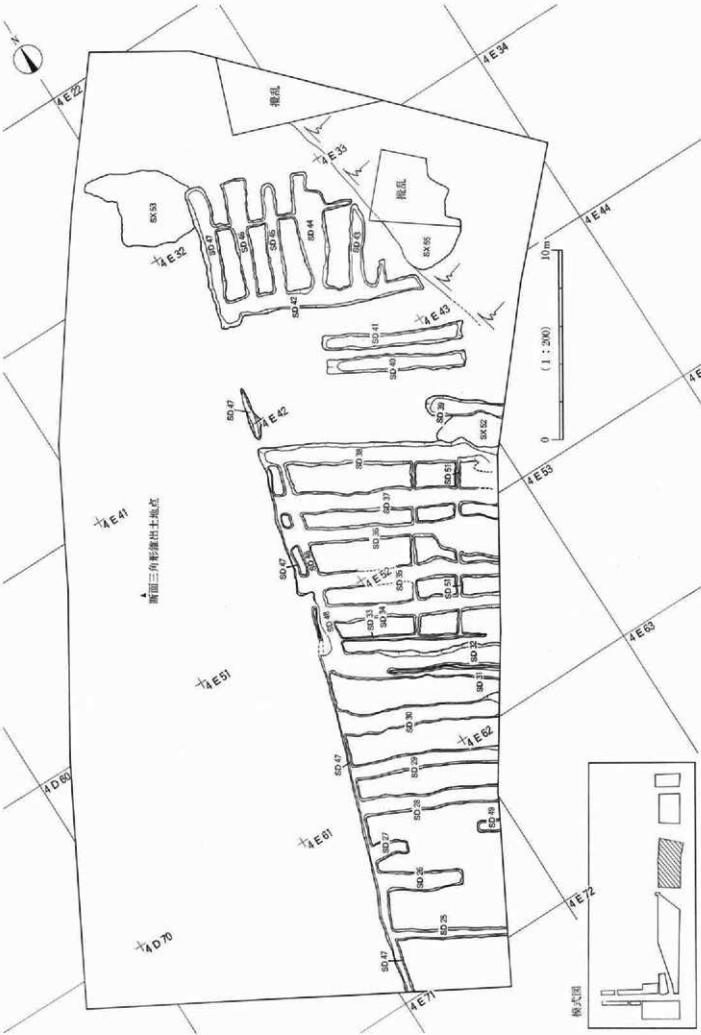


石器実測図 2

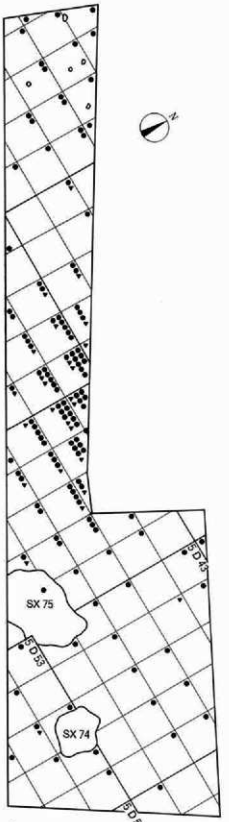

遺構全体図及び基本層序
4D4D
5D5D
3D3E
4D4E
4D4E
5D5E
A区
B区
C区
D区
E区
0
(1：1,000)
30m
47m
46m
45m
縄文時代中期～晩期遺物包含層
縄文時代草創期遺物包含層

3E84
3E85
3E86
3E87
3E94
3E95
3E96
4E3
4E4
4E5
4E6
4E13
4E14
4E15
4E16
4E24
SX 77
SX 78
SX 79
SX 80
46.000
45.500
晩期土器出土地点
晩期土器出土地点
晩期土器出土地点
10cm
0
(1：200)
調査区

D区遺構全体図

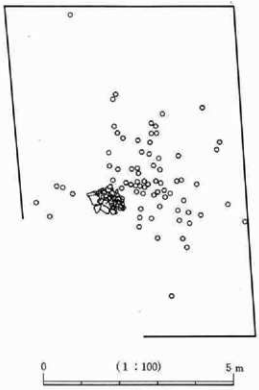

N
4E22
4E34
4E33
4E44
4E32
4E43
4E54
4E42
4E53
4E41
4E52
4E63
4E51
4E62
4D60
4E61
4E72
4D70
4E71
撹乱
撹乱
SX 53
SX 55
SX 52
SD 47
SD 46
SD 45
SD 44
SD 43
SD 42
SD 41
SD 40
SD 39
SD 38
SD 51
SD 37
SD 36
SD 35
SD 34
SD 33
SD 32
SD 31
SD 30
SD 29
SD 28
SD 27
SD 26
SD 25
SD 49
SD 48
0
10m
(1：200)
断面三角形遺出土地点
模式図

C 区遺構全体図



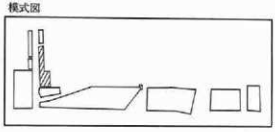
農道脇遺物分布図

● …土器　1～5点
▲ …石器　1～5点

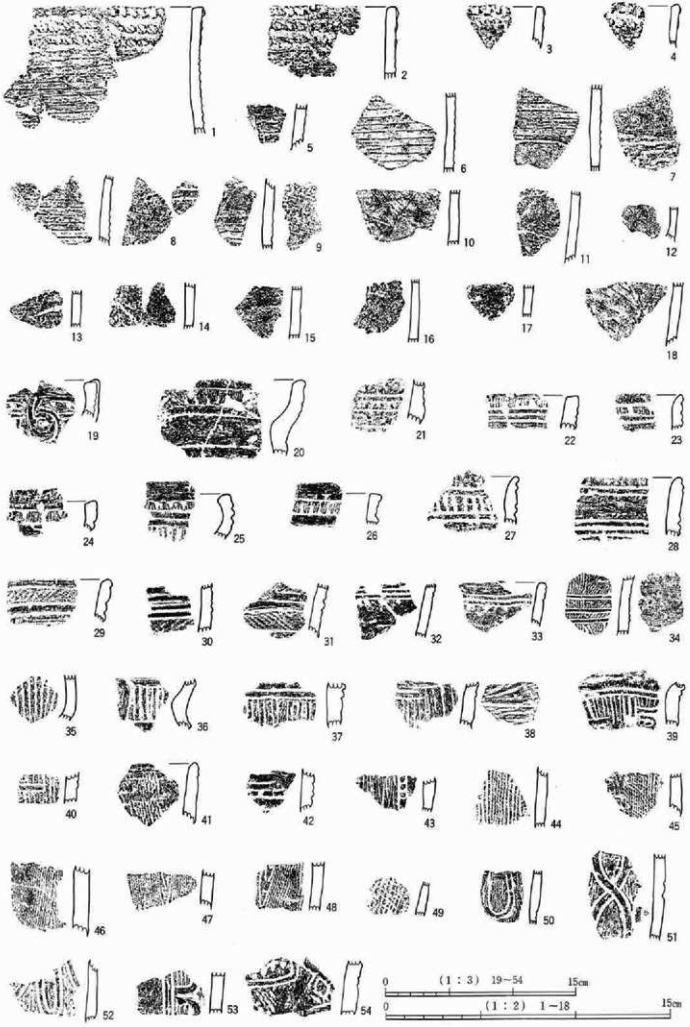


一括土器分布図

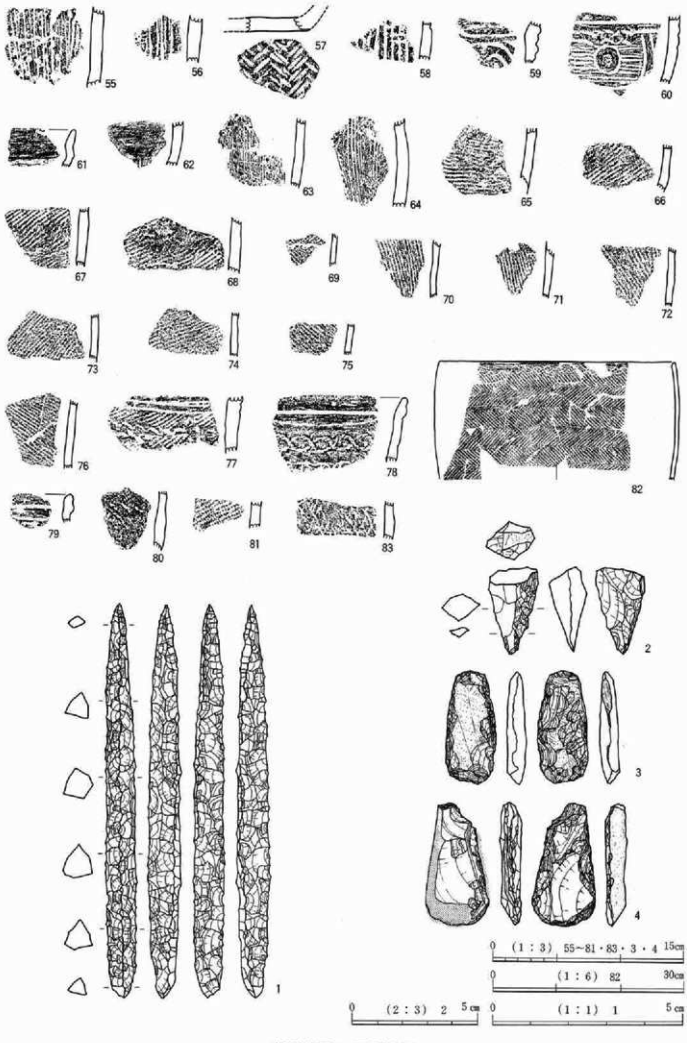
模式図



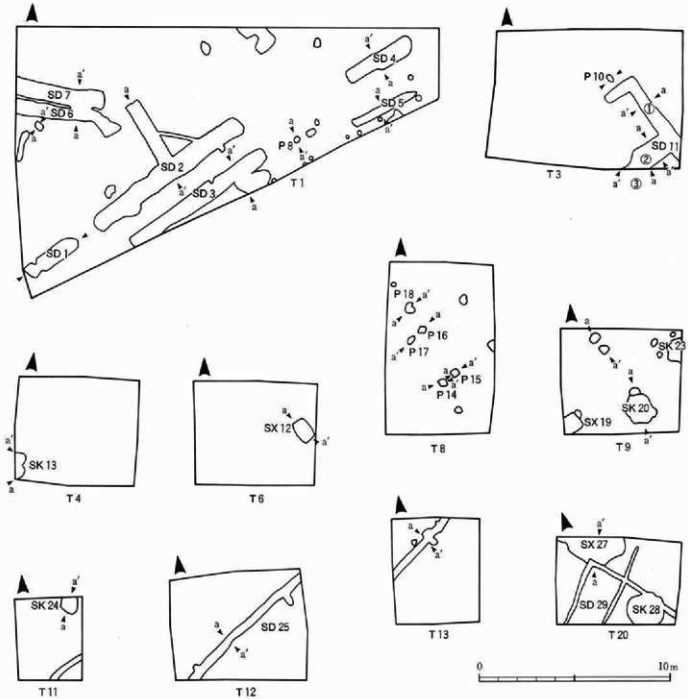
B区遺物分布図

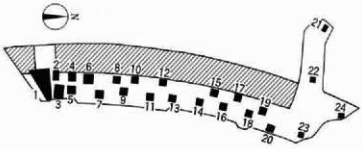

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0 (1:3) 19~54 15cm
0 (1:2) 1~18 15cm

土器実測図1



土器実測図2 石器実測図


SD 7
SD 6
SD 4
SD 5
SD 2
SD 3
SD 1
P 8
T 1
P 10
SD 11
T 3
P 18
P 16
P 17
P 15
P 14
T 8
SK 23
SK 20
SX 19
T 9
SK 13
T 4
SX 12
T 6
SK 24
T 11
SD 25
T 12
T 13
SX 27
SD 29
SK 28
T 20
0
10m

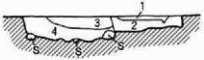

N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

遺構分布図

SD 1　47.7m

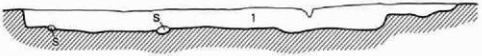
1 黒 褐 色 土
2 黄褐色粘質土　地山と近似しているが、やや暗い。

SD 3　47.7m



1 黒褐色土
2 黄褐色粘質土と黒色土の混合層
3 黒 色 土
やや締まりがあり、まじりのないきれいな単層。
4 暗褐色土

SD 2　47.7m

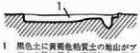


1 黒褐色土と黄褐色砂質土の混合層　少量の小砂利礫を含む。

SD 6・7　47.7m

1 全体に多量の小砂利礫を含む黒色土　近・現代陶器、鉄滓等を含み、一番新しい層土である。

SD 4　47.7m

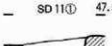


1 黒色土に黄褐色粘質土の地山がブロック状に混入。直径約40cm程度の偏平な礫が数点含まれている。

SD 5　47.7m

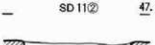
1 黒色土に黄褐色粘質土の地山がブロック状に混入直径約40cm程度の偏平な礫が数点含まれている。

SD 11①　47.5m



1 暗褐色土と黒色土の混合層に斑点状の黄褐色粘質土(直径2cm程度)が含まれている。
2 1より黒色土の混合割合が多い。
3 耕 作 土
4 明褐色土

SD 11②　47.6m



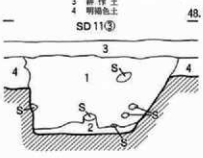
SD 25　47.6m

1 暗褐色土と黒褐色土の混合層上面には小礫が混入。

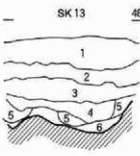
SD 26　47.6m

1 暗 色 土
地山の崩壊が少量混入。
2 暗褐色土
地山粒が中量混入。

SD 11③　48.0m

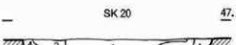


SK 13　46.0m



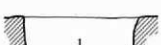
1 暗赤褐色土
2 黒褐色土
3 黒 色 土
2と混乱しているが、若干色が濃い。
4 黒 色 土
5 暗褐色土
6 黄褐色土
地山と混乱しているが、若干暗褐色土が混入し色が濃い。

SK 20　47.9m



1 黒 色 土
2 黒 色 土　1と近似するが、やや色が明るい。
3 褐 色 土　2と4の混合層。
4 黄白色砂層
5 褐色土と黒褐色土の混合層

SX 12　47.3m



1 褐色土
30～50cmの偏平な礫を含む。人為的に堆積させたもので、礫に混じりコンクリート片も中世から出土。

SX 27・SD 29　46.8m

1 暗灰褐色粘質土
水田の表土のような層土で、1a層からの掘り込みである。鉄分の影響により赤味がかっている。→SD 29
2 黒 色 土　まじりのない単層。
3 暗 褐 色 土　少し粘性がある。

SK 24　47.6m

1 褐色土と黄褐色砂質土の混合層
2 暗黄褐色の砂層

P 8　47.7m

1 黒褐色土に暗褐色粘質土が混入。やや しまりがあり、掘り込みはしっかりしている。

P 9　47.8m

1 黒褐色土
下部で地山を若干含む。掘り込みはしっかりしている。

P 10　47.4m

1 暗褐色土
若干、黄褐色粘質土がブロック状に混入する。

P 14　47.7m

1 暗褐色土を主体として、黒色土と黄褐色砂質土が混入

P 15　47.7m

1 暗褐色土を主体として、黒色土と黄褐色砂質土が混入

P 16・17　47.7m

1 暗褐色土を主体として、黒色土と黄褐色砂質土が混入

P 18　47.7m

1 暗褐色土を主体として、黒色土と黄褐色砂質土が混入

P 21・22　47.9m

1 暗褐色土

遺構個別実測図

図版36

1．調査区西側完掘
（東から）

2．調査区東側南部
低位面完掘
（東から）

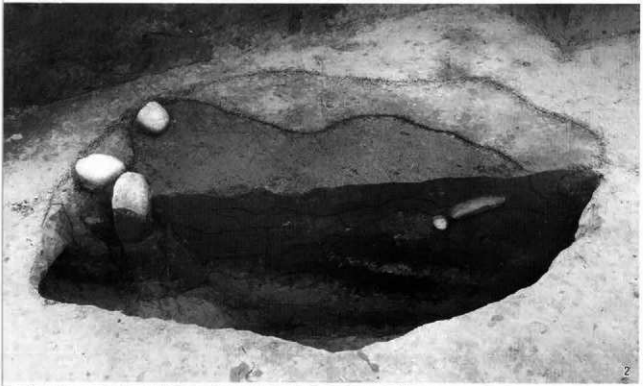
3．調査区東側完掘
（西から）

1．1125グリッド
遺構完掘状況
（南から）

2．土器集中区5
遺物出土状況
（東から）

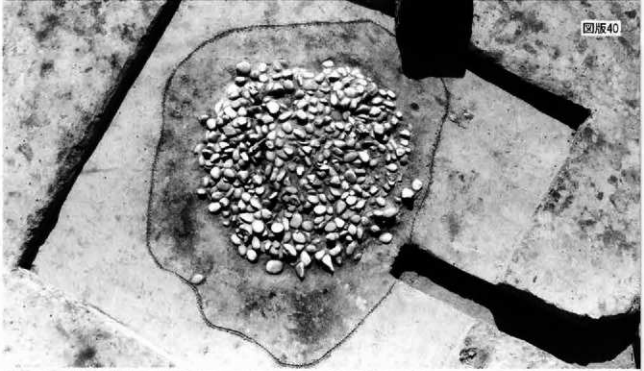
3．4号焼土
遺物出土状況
（西から）

1．1162グリッド
南側壁面セクション
（北から）



2．6号土坑　断面
（北から）

3．6号土坑
遺物出土状況
（東から）

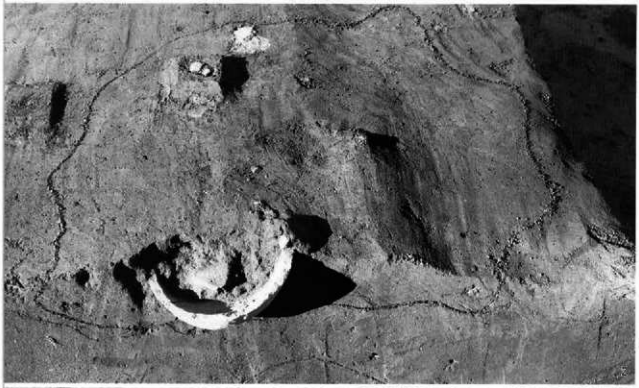


1．集石土坑
礫出土状況
（北から）

2．集石土坑　完掘
（北から）

3．配石遺構
礫検出状況
（南から）

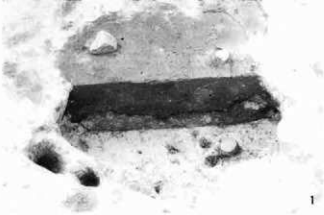
1．1号焼土　断面
（西から）

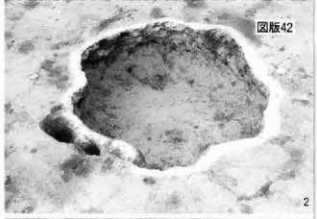


2．3号焼土
遺物出土状況
（南から）

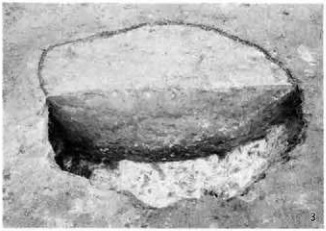
3．4号焼土
遺物出土状況
（西から）

1．SK1　断面
（東から）
2．SK1　完掘
（東から）


1

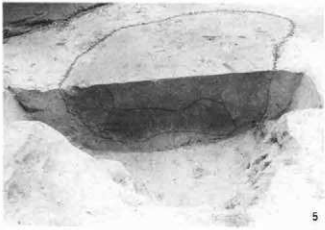

2

3．SK5　断面
（南から）
4．SK5　完掘
（南から）


3

4

5．SK7　断面
（北東から）
6．SK7　完掘
（北東から）


5

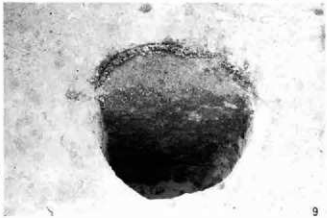
6

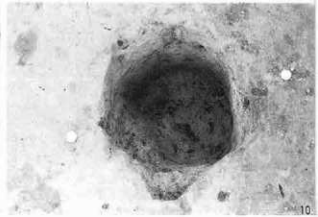
7．SX5　断面
（東から）
8．SX5　完掘
（西から）

7

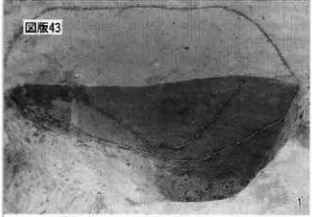
8

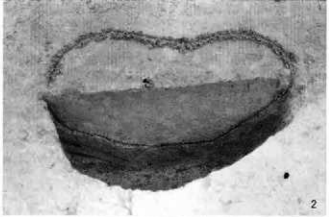
9．P50　断面
（南から）
10．P50　完掘
（北から）


9

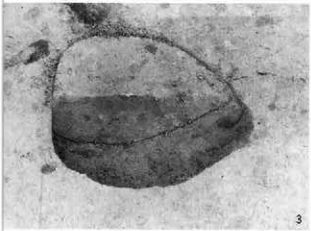

10

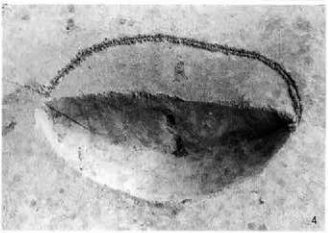
堂付遺跡



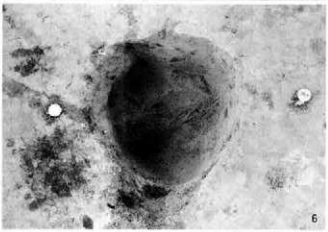


1．P7　断面
（南から）
2．P51　断面
（南から）

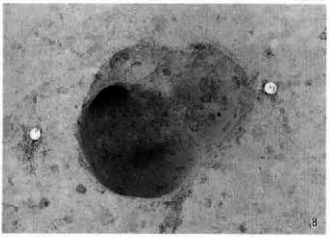




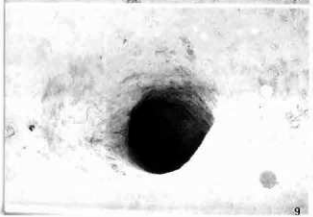
3．P52　断面
（南から）
4．P53　断面
（西から）



5．P54　断面
（東から）
6．P54　完掘
（東から）



7．P55　断面
（南から）
8．P55　完掘
（南から）



9．P57　完掘
（北東から）
10．P58　完掘
（南から）

1．石鏃出土状況
I I45－5 Ⅲ層
（南から）

2．石鏃出土状況
I H54－20Ⅱ層
（東から）

3．打製石斧出土状況
I I53－8 Ⅲ層
（西から）

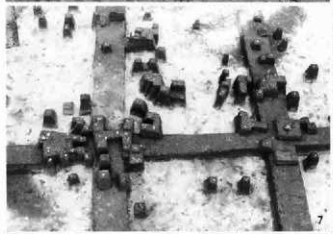
4．打製石斧出土状況
I I34－25Ⅱ層
（東から）

5．打製石斧出土状況
I H66－25Ⅱ層
（南から）

6．注口土器出土状況
I I45－9
（東から）

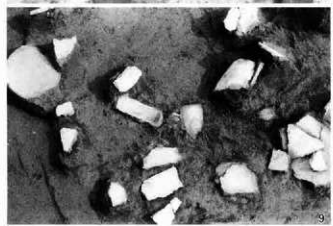
7．土器集中区1
遺物出土状況
（北から）

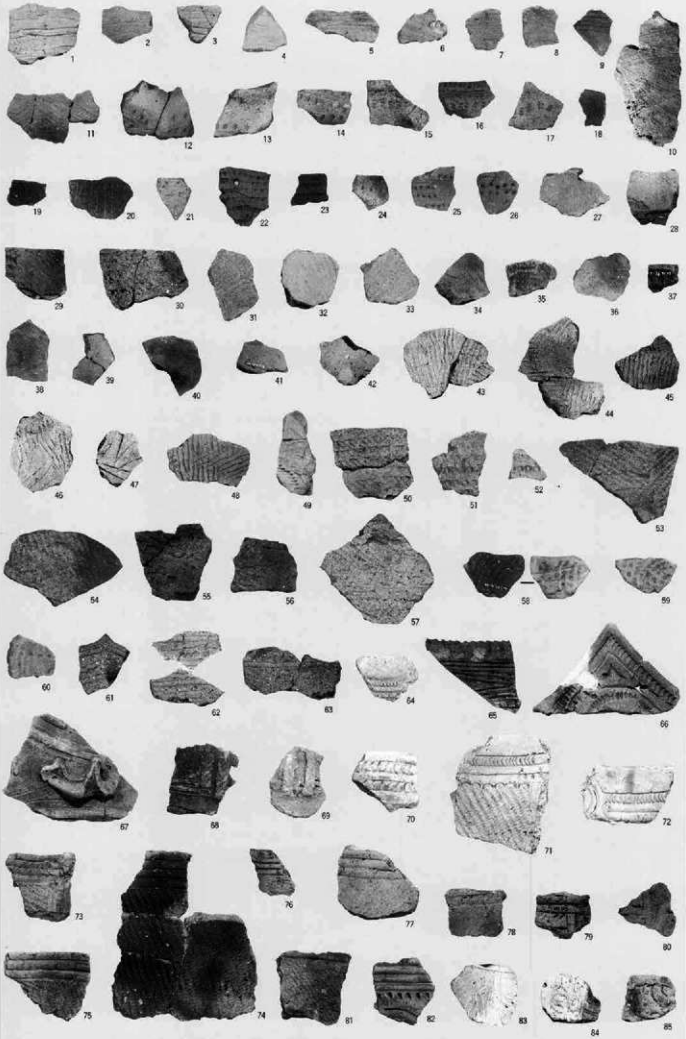
8．土器集中区3
遺物出土状況
（北から）



9．土器集中区2
遺物出土状況
（西から）

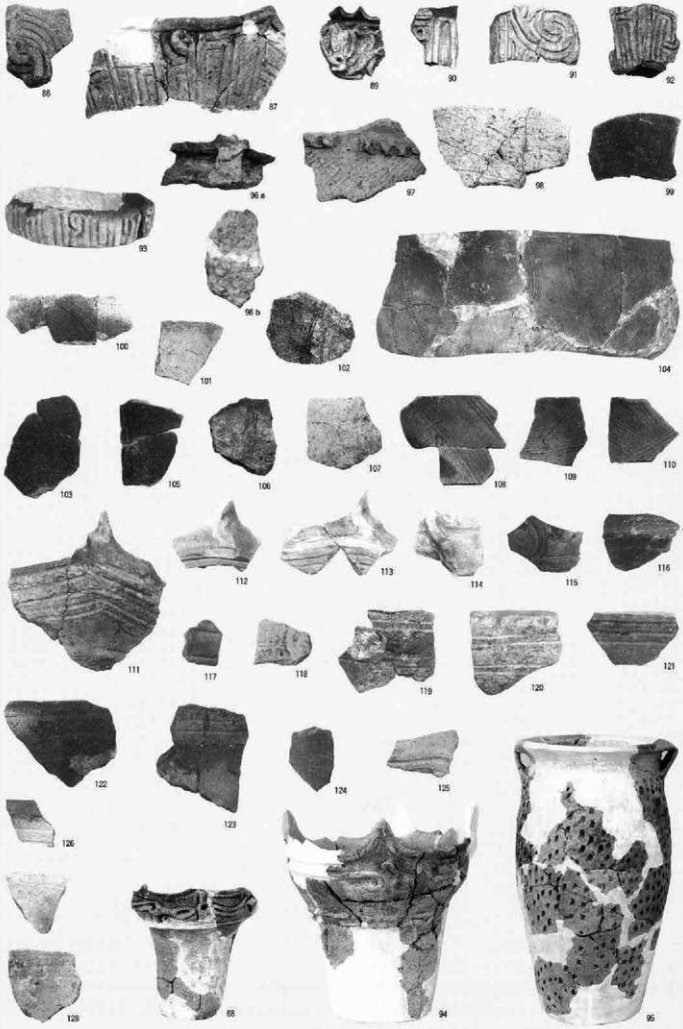
10．土器集中区6
遺物出土状況
（東から）





遺物1　縄文土器

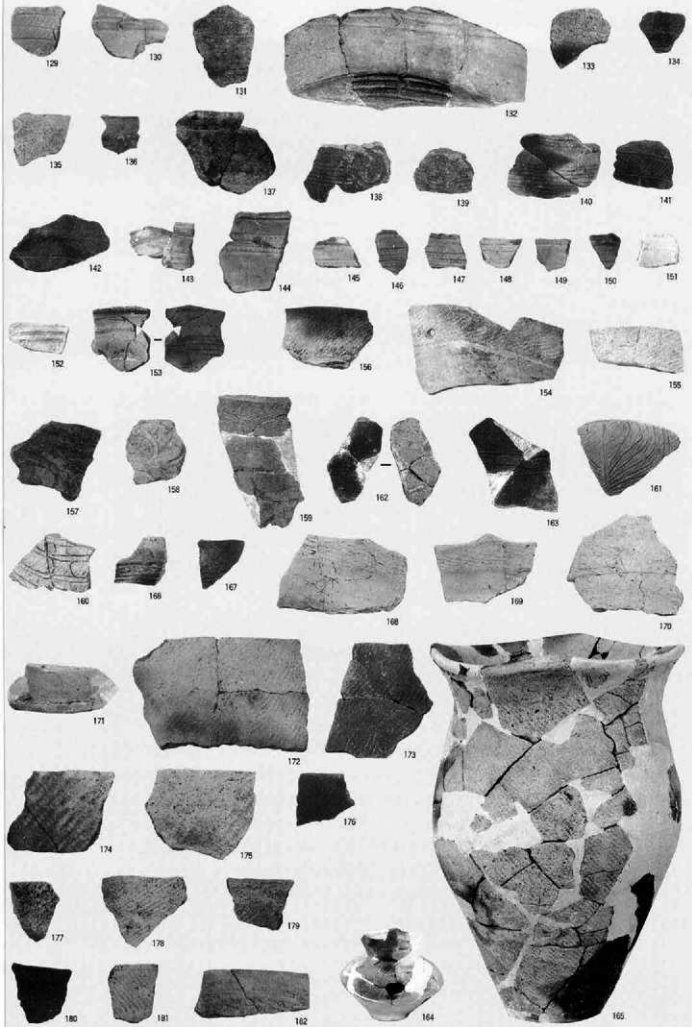
(1：3)



86・87
89～93
96～128
(1：3)

88・94・95
(1：5)

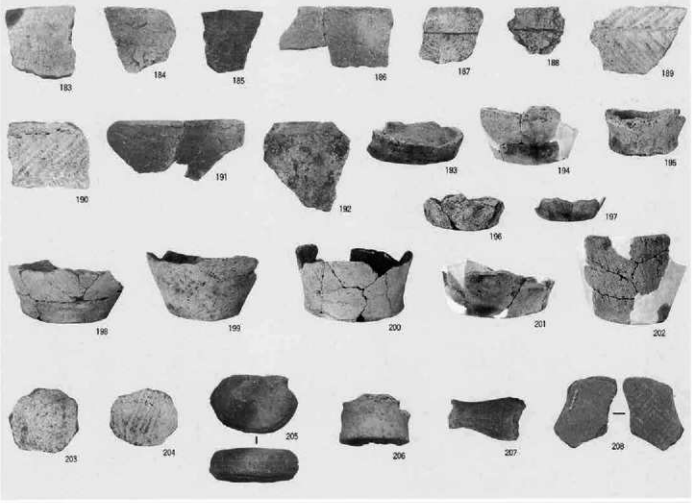
遺物2　縄文土器



129~163
166~182
(1：3)

164・165
(1：5)

遺物3　縄文土器

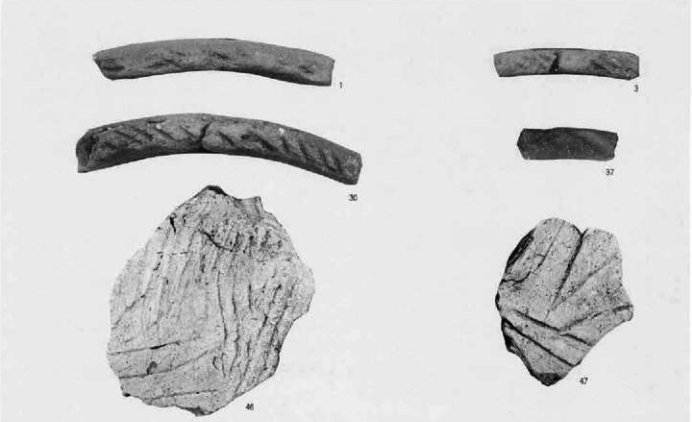


183～192
203～208
(1：3)

193～202
(1：5)

(1：3)

SK 6 上層出土

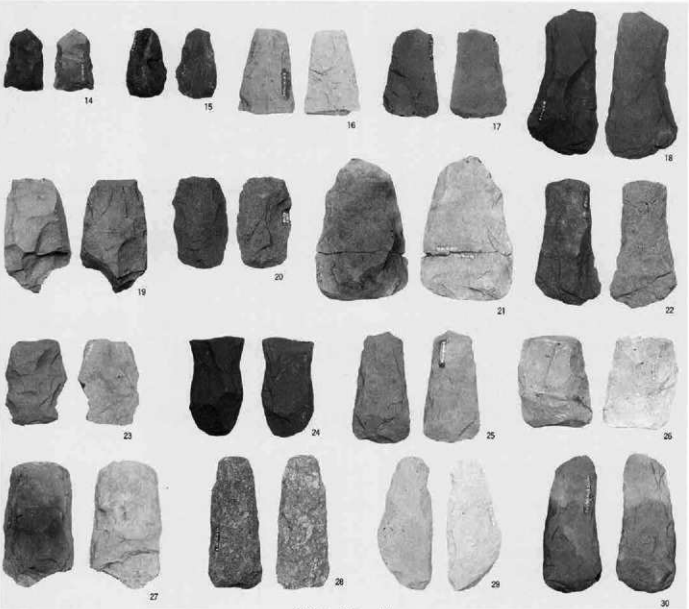


(1：1)

遺物 4　縄文土器・土製品・須恵器他

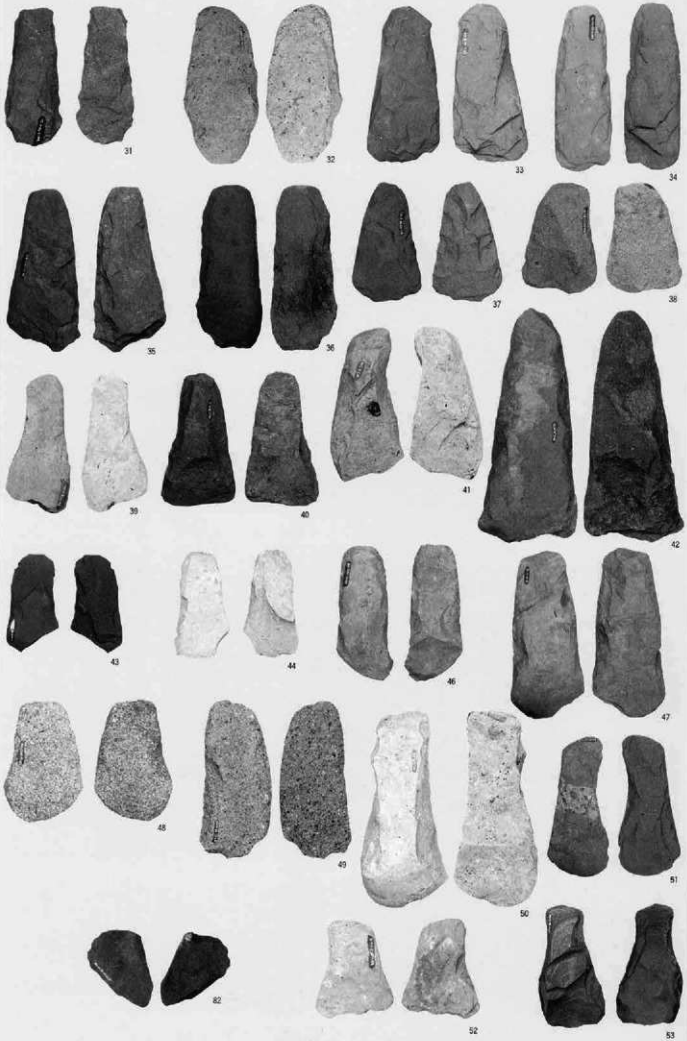
石　鏃
1～6
（1：1）
7～10
（2：3）

ピエス・
エスキーユ
11～13
（2：3）



打製石斧
14～30
（1：3）

遺物5　石　器

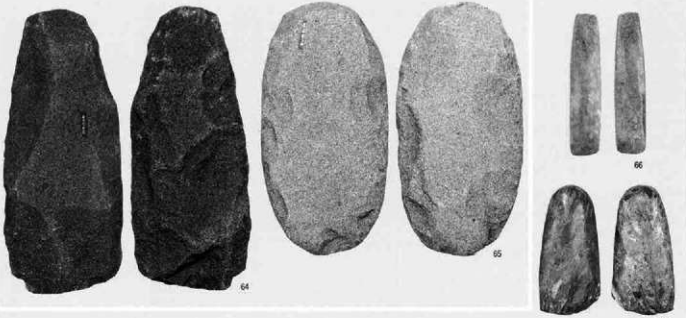


打製石斧
31～53
(1：3)

剥　片
82
(1：3)

遺物6　石　器

打製石斧
54～65
（1：3）



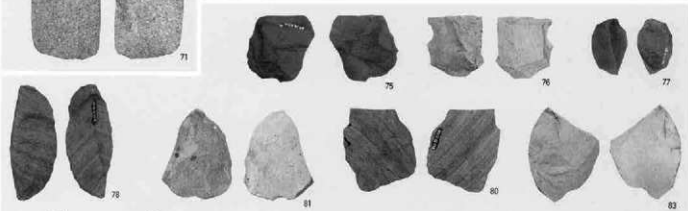
磨製石斧
66
（1：1）

磨製石斧
67～70
（1：3）

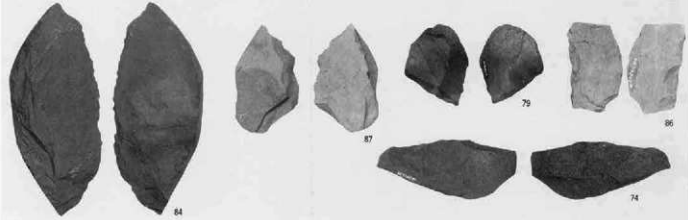
遺物7　石　器

磨製石斧
71
(1：3)

両面加工石器
72・73
(1：3)



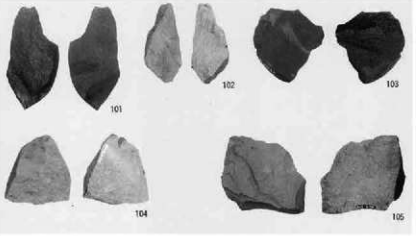
不定形石器
74～86
(1：3)



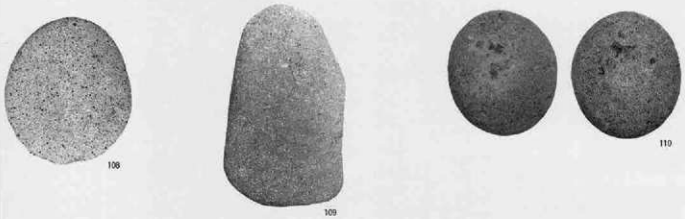
石　鏃
88～96
(1：3)

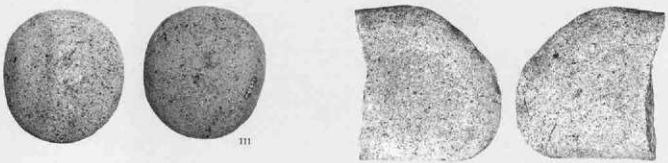
遺物8　石　器

石　鏃
97～100
（1：3）



剥　片
101～105
（1：3）





磨　石
106～108
110・111
（1：3）
109・112
（1：5）

1．遺跡遠景
（朝日山山頂から）

2．発掘調査前の状況

3．作業風景

4．基本層序

1．東側遺物出土状況
（北から）

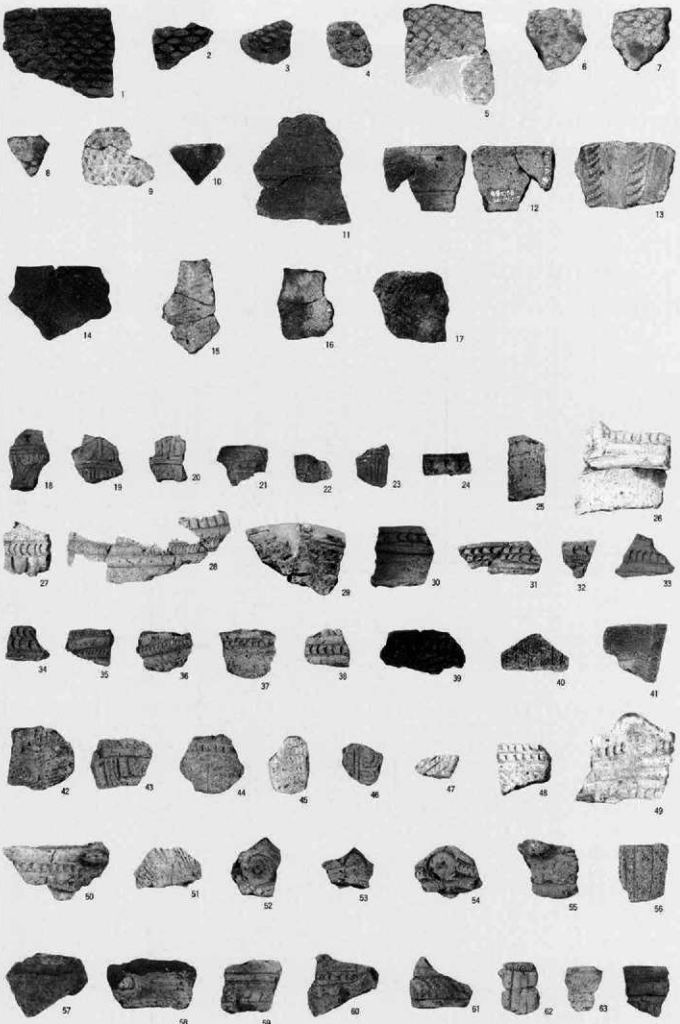
2．西側遺物出土状況
（北から）

3．完掘状況（南から）

1．完掘状況（北から）

2．立会調査作業風景

3．立会調査終了状況



早期の土器
1～13
（1：2）

前期の土器
14～17
（1：2）

中期の土器
18～64
（1：3）

遺物1　縄文土器

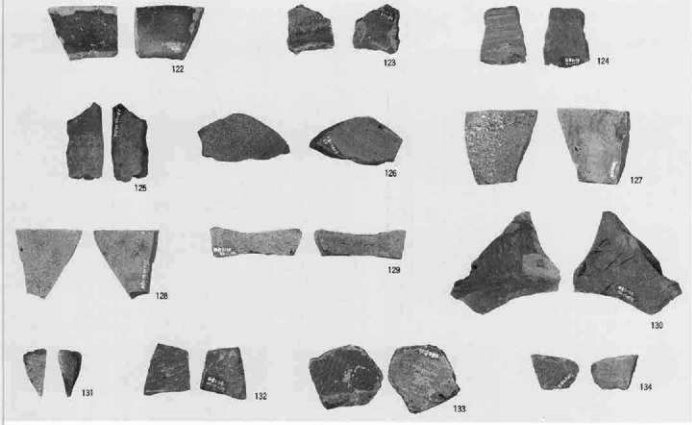
中期の土器
65～101
（１：３）

後期の土器
102～106
（１：３）

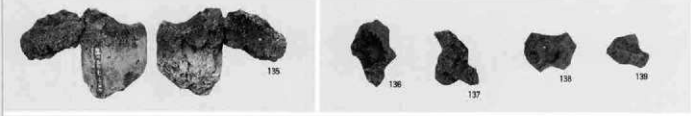
時期不明の
土器
107～114
（１：３）

土製品
115～121
（１：２）

遺物２　縄文土器・土製品

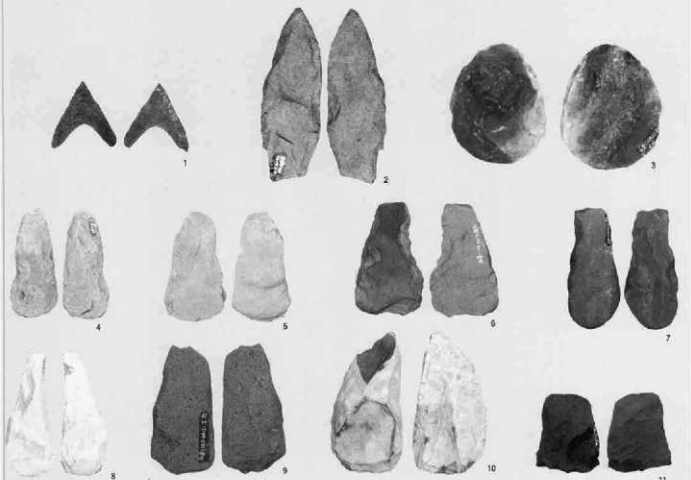


須恵器
122～134
（1：3）



フイゴの羽口
135
（1：3）

鉄　滓
136～139
（1：2）



1．石　鏃
（1：1）

2．尖頭器
（1：2）

3．円形掻器
（1：2）

打製石斧
4～11
（1：3）

遺物3　須恵器・フイゴの羽口・鉄滓・石器

12. 打製石斧
(1：3)

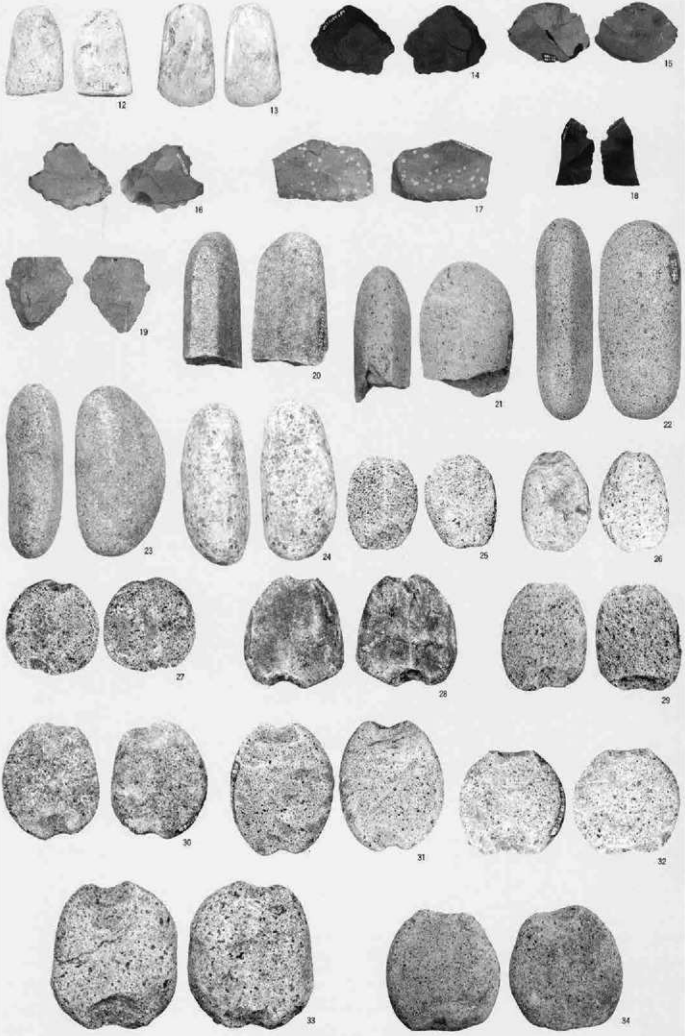
13. 扁製石斧
(1：3)

14. 両面加工
石器
(1：3)

不定形石器
15~19
(1：3)

磨　石
20~24
(1：3)

石　錘
25~34
(1：3)

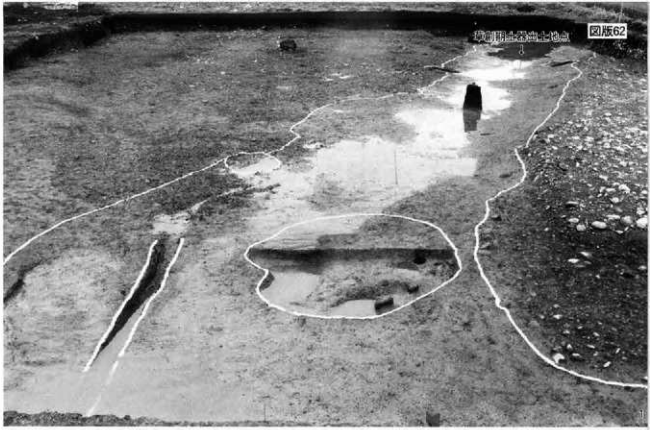


遺物4　石　器

1．遺跡遠景

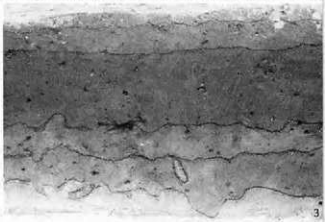
2．Ｄ区　完掘
（北東から）

3．Ｄ区自然流路
（東から）



1．Ｄ区自然流路
（西から）

2．Ｄ区作業風景



3．Ｄ区基本層序

4．Ｄ区草創期土器
出土状況

5．Ｄ区晩期土器
出土状況

6．Ｂ区基本層序

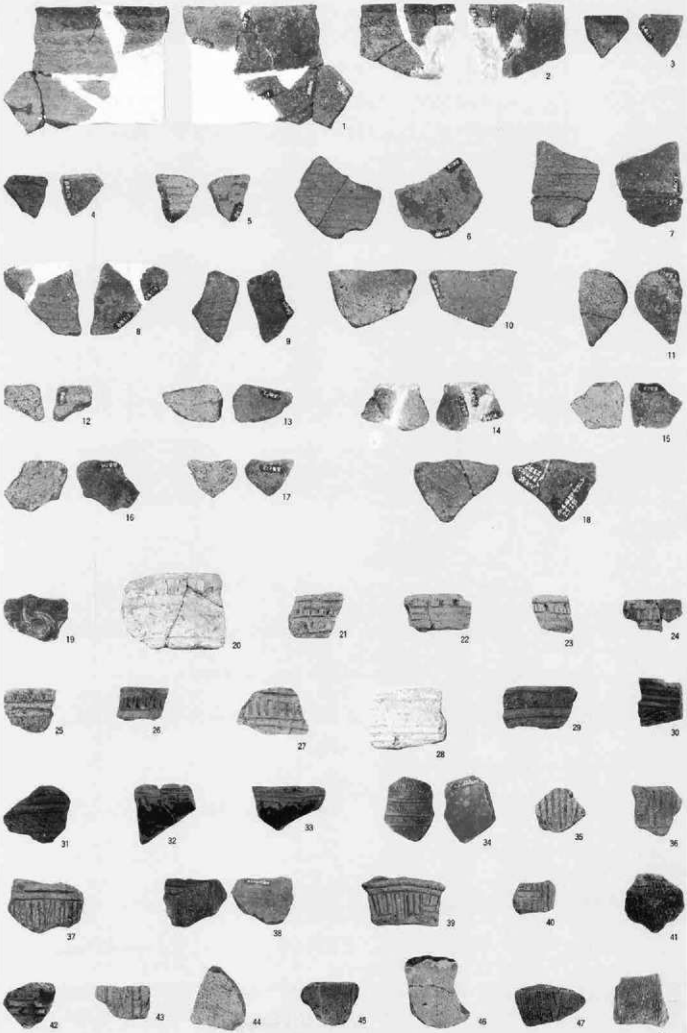
7．Ｂ区農道跡遺物
出土状況

1・2．B区一括土器出土状況

3．C区SD38　断面
4．C区断面三角形の鏃出土状況

5．C区　完掘（北東から）
6．C区打製石斧出土状況

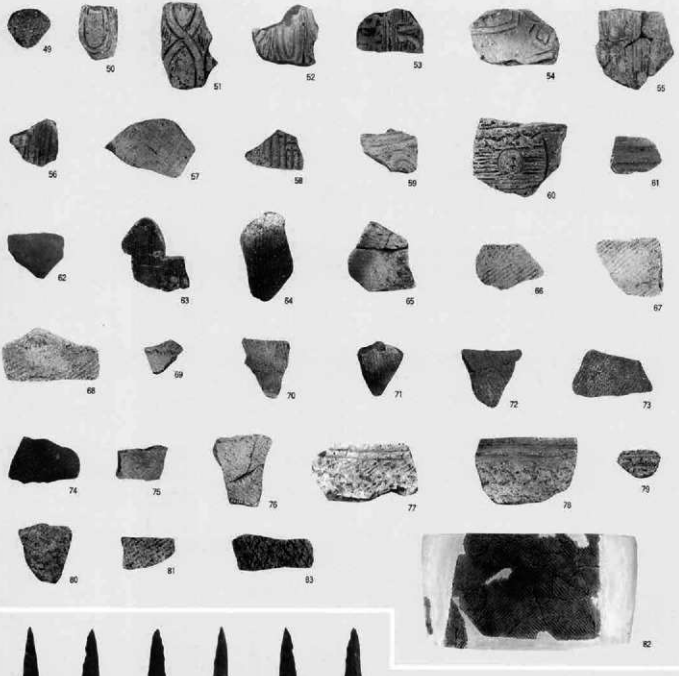
7．A区溝完掘状況（北東から）
8．A区作業風景



草創期の土器
1～18
（1：2）

中期の土器
19～48
（1：3）

遺物1　縄文土器

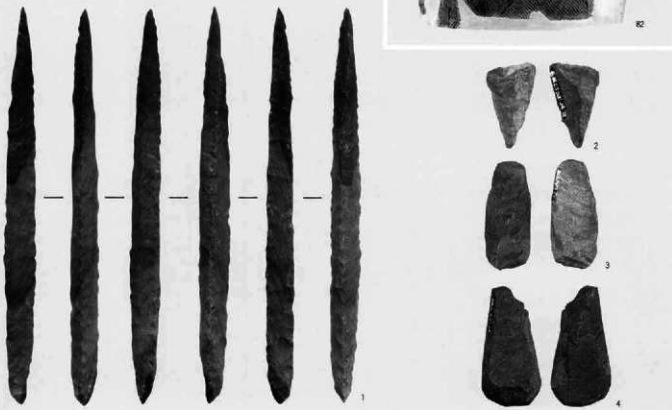


中期の土器
49～60
（1：3）

後期の土器
61～64
（1：3）

晩期の土器
65～83
（1：3）

82
（1：6）



1．断面三角形の鏃
（1：1）

2．尖頭器
（2：3）

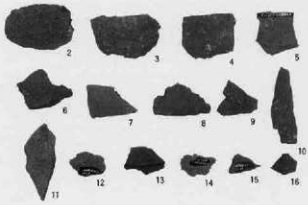
3・4．
打製石斧
（1：3）

遺物2　縄文土器・石器

1．隆起線文
2．横位微隆起線文

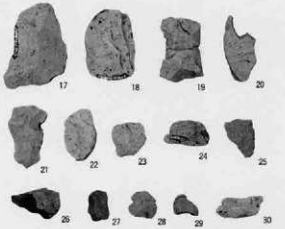
3．斜位微隆起線文
4．条痕状成形痕

第一次調査出土
剝片類
1～38



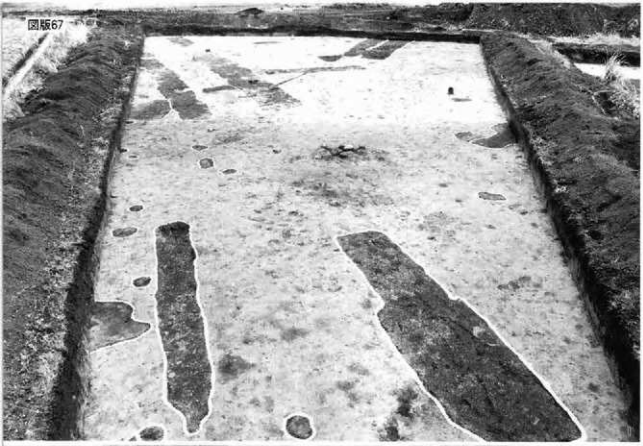
ガラス質安山岩
1～16

凝灰岩
17～30



砂　岩
31～36

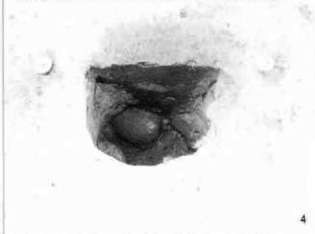
頁　岩
37・38



1．トレンチ1
遺構確認状況
（東から）

2．SD4　断面
（北東から）

3．SD5　断面
（北東から）



4．P9　断面
（南東から）

5．トレンチ3
遺構確認状況
（西から）

6．SD11②　断面
（南西から）

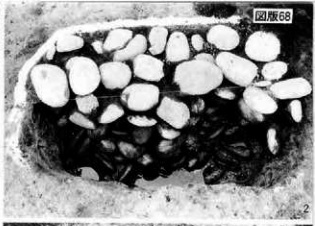
7．SD11③　断面
（北から）

割目B遺跡

1．SX12
プラン確認状況
（南西から）

2．SX12　断面
（南西から）

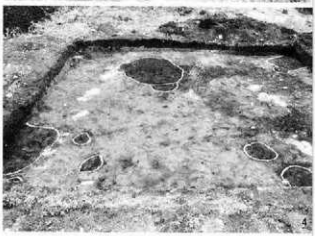
1


2

3．トレンチ8
遺構確認状況
（北から）

4．トレンチ9
遺構確認状況
（北から）

3


4

5．トレンチ12
遺構確認状況
（東から）

6．SD25　断面
（南西から）

5

6

7．トレンチ16
倒木痕　（南から）

8．SX27・SD28
確認状況　（西から）

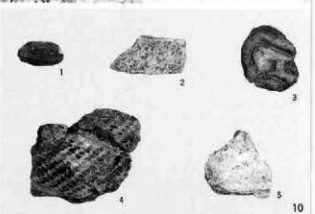
7

8

9．SX27　断面
（南東から）

10．出土遺物
（1：3）

9



10

報告書抄録

書名	堂付遺跡・百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・割目B遺跡
副書名	国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第78集
編・著者名	遠藤孝司・江口友子・内山　徹・井狩　歩・池田淳子
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46　TEL 025-223-5642
発行年月日	1996年3月29日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堂付遺跡	新潟県小千谷市大字高梨字堂付609-2番地ほか	206	220	37度20分27秒	138度49分20秒	第一次調査 19930928～19931001 第二次調査 19940712～19941202	352 9,500	道路(小千谷バイパス)の建設に伴う事前調査
百塚東E遺跡	新潟県小千谷市大字千谷字千谷1,860番地ほか	206	162	37度19分39秒	138度48分54秒	第一次調査 19930927 第二次調査 19940706～19940824	48 700	道路(小千谷バイパス取り付け道路)の建設に伴う事前調査
百塚西C遺跡	新潟県小千谷市大字三仏生字猿ケ崎2,114番地ほか	206	155	37度20分17秒	138度49分05秒	第一次調査 19930827～19930903 第二次調査 19950417～19950822	512 7,500	道路(小千谷バイパス)の建設に伴う事前調査
割目B遺跡	新潟県小千谷市大字三仏生字金塚5,103-2番地ほか	206	152	37度20分00秒	138度48分52秒	第一次調査 19930913～19930917 第二次調査 19950526～19950630	512 8,700	道路(小千谷バイパス)の建設に伴う事前調査

	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂付遺跡	遺物包含地	縄文時代(後期)	溝・焼土・土坑・ピット等・集石土坑・配石遺構	縄文土器、石器、土製品	
百塚東E遺跡	遺物包含地	縄文時代(中期)		縄文土器、石器、土製品	
百塚西C遺跡	遺物包含地	縄文時代(草創期・中期)	自然流路・溝・ピット等	縄文土器(隆起線文土器)、石器(打製石斧・断面三角形錐)	
割目B遺跡	散布地	縄文時代	溝・土坑	縄文土器、土師器	

新潟県埋蔵文化財調査報告書第78集

国道17号線小千谷バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

堂付遺跡・百塚東E遺跡・百塚西C遺跡・割目B遺跡

平成8年3月28日印刷　編集・発行　新潟県教育委員会

〒950 新潟市新光町4-1

電話025（285）5511

平成8年3月29日発行　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒951 新潟市一番堀通町5923-46

電話025（223）5642

FAX025（228）1762

印刷・製本　長谷川印刷

〒950-21 新潟市小針1丁目11番8号

電話025（233）0321